

平成十一年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷八七四号

川柳塔



白川協加盟

No. 874

三月号

第24回 全日本川柳二〇〇〇年東京大会

日時 平成十二年六月十一日(日) 午前十時開場
場所 日本青年館大ホール

〒100-0013 東京都新宿区霞丘町十五番地

TEL 〇三三四〇一〇二〇一(代)

交通案内

○別紙交通案内図参照

JR信濃町駅より徒歩7分

JR千駄ヶ谷駅より徒歩7分

地下鉄銀座線・外苑前駅より徒歩5分

宿題 第一部(事前投句・五月十日締切)

「飛ぶ」 福岡 伊豆丸 竹仙選

「ファッショ」 三重 木野 由紀子選

「柱」 神奈川 鈴木 柳太郎選

3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入。

各題二句、無記名、封筒に住所、氏名明記、

投句料一、〇〇〇円(定額小為替、現金書留)

同封して郵送のこと。

投句先 〒3320015

川口市川口一三一・四〇一 松岡葉路方

日川協東京大会事務局宛

電話・FAX 〇四八(二二二) 八〇八四

郵便振替口座 〇〇一〇〇七七一七六九八〇

宿題 第二部(当日投句・十一時三十分締切)

「東京」 東京 小松原 爽介選

「起点」 兵庫 斎藤 大雄選

「ゼロ」 北海道 斎藤 大雄選

「やさしい」 新潟 大野 風柳選

各題二句、各部各題とも未発表に限る。

第二次選者

仲川 たけし・吉岡 龍城

磯野 いさむ・橘高 薫風

藤沢 岳豊・大木 俊秀

竹本 颯太郎

会費 四、〇〇〇円(昼食・記念品共)

表彰

① 文部大臣奨励賞 一名

② 参議院議長賞 一名

③ 川柳大賞 十一名

④ 大会賞 十一名

観光

平成十二年六月十日(土)

隅田川下り 浅草より日の出桟橋

別紙観光案内参照 四、〇〇〇円

場所 日本青年館中ホール(立食パーティー)

会費 七、〇〇〇円

宿泊 平成十二年六月十日(土)

宿泊 日本青年館ホテル和室(相部屋)

宿泊費 八、〇〇〇円(朝食付)

部屋割り、事務局から御案内。その他の

お問い合わせは、事務局までご連絡下さい。

申込締切 (四月末日必着 厳守)

別紙申込書に内容をご記入の上、合計額を送金

して下さい。

申込先及び送金先

〒3320015

川口市川口一三一・四〇一 松岡葉路方

日川協東京大会事務局宛

電話・FAX 〇四八(二二二) 八〇八四

郵便振替口座 〇〇一〇〇七七一七六九八〇

(社)全日本川柳協会 大会委員長

磯野 いさむ

全日本川柳東京大会実行委員会

大会実行委員長 竹本 颯太郎

〒1900002

立川市幸町四一五二一・七四〇五

電話・FAX 〇四二(五三七) 三八〇四

* 宿題第一部(事前投句)先が変更されて

おります。ご注意ください。

麻生路郎の幻の名著復刻

川柳とは何か

—川柳の作り方と味方—

麻生アート発行・橘高薫風序・B6判・266頁

美装上製本・頒価 2000円・(〒340円)

お申し込みは 川柳塔社事務所へ

五十の晩年

橘高 薫風

年を取ると感性が鈍くなり、ひらめくものに疎く、近來句も文章もしほり出さなければ出て来なくなつた。

二月六日、大阪は知事選の投票日であつたが、雨の中投票を済ませ銭湯へ行く。湯船に首を浮かせて気の付いたのは、今日の湯は目立つて黄色い。それは温泉の素のような匂いもなく、白い袋の浮いているのを見ると紅花だと分かつた。

袋の湯に浸つた部分が美しい紅に染まつている。その時、私の衰えた感性が作動して、これは川上富湖さんの色だと思つた。ふろの日(二月六日)の湯屋の趣向が、私に巻頭の文を書くきっかけを与えてくれた。執筆期限の限界の日である。

一作年秋から昨年の春までに、黒川紫香、奥田みつ子、月原宵明、八木千代、川上大輪・富湖、田中正坊諸氏の句集の

序文を次々と書き、うれしい悲鳴を上げたのと打つて變つて、昨年の秋から一月末までのうちに、定金冬二、寺尾俊平、松川杜的、辻白溪子、福元みのる、北山悟郎、田中透太、川上富湖といった私には浅からぬ絆の方たちがこの世を去られた。慌ただしい通夜と告別式へのお別れが続き、風邪発熱の難儀まで加わつて、惨憺たる越年であつた。老妻が「あんた御敵いをしてもらい」と心配する。

一月三十一日の大阪の朝は冷え込みがきつかつた。しかし、オーシャンアローで二時間四十分ほどで着いた新宮は、さながらに秋、空青く温暖でまるで別世界だつた。黒潮流れる海を越えて浄土へと目指す補陀落渡海の土地柄を思わせた。途中の枯木灘辺りからの海岸線の岩礁美もさりながら、串本に近い橋杭岩が、この日は仏の姿に見えた。

新宮熊野地会館での川上家告別式は、正面に富湖さんの遺影がカラーで頬笑む。平素からお洒落に徹した人らしいし、大輪さんにこれ以上なく愛された人らしい満足感に溢れたお顔も、逆縁に耐えておられるご母堂、大矢まさ子さんの胸中

を察すると、飾られた花も正視出来ない。読経の中を川柳塔を代表して謹んで焼香し、冥福を祈つた。

富湖さんは、一昨年葉文館出版主催の第三回オール川柳大賞を受賞、昨年には路郎賞を獲得、稀に見る派手な榮譽に輝やかれた。花火のような晩年と言つべきか。五十歳の晩年は如何にも悲しい。

新宮から帰宅したら同人結城君子さんから電話があつたと言つ。これまた暗い予感的中して、掛けた闇の向うの電話の声は、敬愛する栗谷春子さんの訃報だつた。

再会は初対面よりはすかしい。春子含羞の人をまた私は失つたのである。

作品

悼 川上富湖さん

湖に映すはオフェーリアか鶴か
水平線一筋の沖仏岩

君は逝きありし日のまま茶房の絵
こがるは父母よペルーのティ
ティカカ湖よ

豆撒いて自分で拾う旅の果て



川柳塔 三月号 目次

■ 卷頭言 五十の晩年

川柳塔（同人吟）

白選集

訓風柳多留二匹篇研究 15

大空のこころ (11)

秀句鑑賞

2011.12.17

橘 高 薰 風 : (1)

八木千代：（2）

橘高薰風選：（4）

橘 高 薰 風 : (50)

5.

東野大八：(56)

(5)

河内天笑選 (6)

百 相 品 而 真 居
(0) (8)

曾西昌 (16)

皮多子山藥酒 (8)

万事よろしいように



城を半分明け渡し、二つの家庭が「ちやっこちや」と一族として住んでみると窮屈さもありますが、賑やかで安心で、またそれなりの幸せ気分、抑えたり抑えなかったりしながらも、わりかしとおおらかにまずは平穩に暮らしています。

鯛も一人はうまからず

こちらは準主婦 内外の掃除に近所とのお付き合い。ご飯とスूपに煮物に漬物と基準程度の夕支度、時間があれば腕も鳴らせます。老いたりと雖も台所歴をみすみす錆びさせる手はありません。

暗黙の了解のうちの仕分けが続いていたのですが、疲れているに違いない共働きの彼女を氣遣つて「あとは私が洗うからね」そう申し出したのが運の尽き。その夜以来は当然のこ

茴香の花

「ふだん」

一路集「紺」

「カード」

初歩教室「本」

二月本社句会

■図書紹介『冬の蠅』

■エッセー 難聴

さよふなら 透太さん

大きな足跡 二重奏響く

各地柳壇（佳句地十選／宮尾みのり）

柳界展望

二月各地句会案内

■編集後記

宮西弥生選 …… (92)

木村春枝選 …… (94)

高杉千歩選 …… (94)

丹下美津子選 …… (95)

吐田公一 …… (96)

瀬戸まさよ …… (102)

金井文秋 …… (103)

門谷たず子 …… (106)

福本英子 …… (107)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

福本英子 …… (108)

座右の句

思いやり行方不明になることも

私の句

子の抜けた空き間を埋める春の土

小枝 ふさる

（惠美子）

とく蛇口と向かい合う仕儀になり、たくさんのお皿や鍋と戦っています。

「働くとは、ハタを楽にすると言う事」祖母の口癖を何十年ぶりに思い出すのです。内心では「損な役回りになったなあ」と、こわばっていたのも一週間たらず。

ひとりて台所に残るかわりに気がうんと楽になったのです。フリータイムが気兼ねなく掌に転がりこみました。

「親が死んでも食休み」

すっかり椅子に座ってそれこそ最前列のS席、わりかしスポーツに興味があるので、エールを送ったり、檄を飛ばしたりとごく愉快に。もちろん作業は中断です。

そんな刻、田村亮子さんがテレビに出現、「右手の小指を負傷したには困りました。右からの背負い投げが得意技だけに。でもこの際、不得意な左手からの技を磨いて、それをシドニーで爆発させます。」とまあ爽やかに健気に、悲壮感などありません。聞いていてどつと涙が溢れました。

「物は思いよつ」

大袈裟のようですが万事暮らしよいように働きやすいように、端も我も楽なように、昔のひとは何とも良いことを言い残してくれていますね。いろいろの諺を思い出しては、とりあえず自分に都合のいい文句に納得して機嫌よう暮らそうと思うのです。



橘 高 薫 風 選

鳥取県 土橋睦子

裸婦像に天使の衣かけてあり

偶然のような顔して逢う喫茶

おしゃれするところに体ついてこぬ

玩具にも教育ママの許可がいる

法話聞く飴玉ひとつ唇に

居留守だと思ふ紅茶の香が匂う

弘前市 高瀬霜石

食べているばかりで何も生み出せず

愛犬に見つめられても恥ずかしい

五尺八寸空気を入れる立ち直る

子が巢立ちちよっと変わった貨幣価値

晩酌でちびちび話す死後のこと

独立独歩冷たい奴と言われている

島根県 堀江正朗

二〇〇〇年庭の砂子を誂い初め

戦盲のしみじみ知った時代の差

笑われる愚痴妻にだけ妻にだけ

白杖に甘え心がふえて歳

白杖と六十余年ありがたや

今の世を知らず空想楽しいな

ほろ酔うて点字打ってるいい顔だ 島根県 堀江芳子

年始客花見の約束して帰り

緑之助師の褪せた手紙に教えられ

やわらかい声とんがった声電話

ちらほらと梅咲きそめて我が世かな

なに機嫌悪いの問えば目が欲しい

自問した一步がいつも出遅れる 枚方市 宮川珠笑

まあまあで時を味方に引き寄せる

改札の途切れを盲導犬が待つ

どう追われても戻る野良猫
必衰の理 老師呆けてみせ
穏やかな癌で共存してくれる

海南市 三宅保州

倦怠期いたずらごっこでもしよう
私を校正してほしい妻よ

私を客観的に見る息子

多すぎる味方を信じられますか

何もかも背負いこんだら進めない

何が何でも決めてしまいたい議長

和歌山市 木本朱夏

時雨きて恩師の笑顔隠しけり(菅井智水庵先生へ)

数え日の鳩ほうほうと寂しかり

読みさしの本のあいだの去年今年

能面の薄き唇雪を呼ぶ

能面の裏も吹雪いているのなり

雪螢死なば逢えるということも

和歌山市 古久保和子

小さ目の箱を選んで冬籠り

一番底のものに用事のできた箱

使い捨てカイロで温めていた甲羅

お手玉は祖母の分身陽の匂い

歳時記で飾る日本が美しい

コーヒーの香りいつもの曲り角

八尾市 村上ミツ子

ことばより涙しっかりものを言い
冗談じゃないよと笑顔はじけてる
ほどほどの暮し友にも恵まれる
叱られてよい母さん好きになり
すぐ足がつく父さんの隠しごと
疑わず鈴の鳴る道歩いてる

富田林市 藤田泰子

樹氷林まるでこの世でないように
花だから苦労話は語らない

未だ少し黒さを残す後ろ髪

熟睡を貪りあしたは鳥になる

振り出しへ戻るゲームを繰り返す

身を焦す程に溺れたことがある

八尾市 内海幸生

三重苦消せと真っ赤な陽が昇る

怒るまい人をアテにしたからよ

年玉の予定表持ち孫が来る

昔むかし空気はタダで吸えました

裸樹を真似て耐えれば春は来る

鏡へは張子の虎に映るだろう

箕面市 岩津ようじ

くらげでも日に当たらねばとけぬもの

人間に生まれた幸の酒の味

ご恵送いただいたまま読まぬ本

値段だけ気に入らないという指輪

少しずつ左傾して行く定年後

洪茶飲む湯飲み子からの喜寿祝い

富山市

舟渡杏花

二千年ハラリと落ちた歳月や

川柳のK点挑む二千年

適温を保つ仏の掌のひらで

三寒四温に負けてしまった蛇親子

旅の最中折れてしまった対の箸

裏切りのリズムと知らず心地よい

鳥取県

石谷美恵子

ありったけ身を飾ったが温もらぬ

ゆっくりと駄馬も駿馬も老いてゆく

淡い色ばかりの中で眠くなる

再びの輝き誓う初日の出

白黒をとことんつけて疎まれる

ありがとう夫婦茶碗はまだ無疵

米子市

政岡日枝子

行きつ戻りつ今どのあたり母の旅

母の名が住所録から外される

母を包んで救急車を走らせた

母の部屋はボンボン時計も止まった

一つずつ鱗をはいでいる今よ

その顔は日に日にやさしくなっていく

成仏に一本釘が足りません

手さぐりのあしたへ米を研いでいる

釣竿と浮気の虫が帰らない

いい香り少女もうすぐ花になる

不渡り手形ばかりの恋を抱いている

淡い虹抱いて女の羽づくろい

和歌山市

玉置当代

二千年心の窓を開け放つ

矢印の通りに行かぬ天の邪鬼

震度七わたしは情緒不安定

腰痛を夫に介護してもらう

風向きで左右されます時の運

年の暮れ何でみんなが逝き急ぐ

羽曳野市

三好専平

注連縄に使うお金はありません

血のにじむ稽古は口に出しません

マンボウのような人間減ってきた

曲がってる川を魚は恋しがり

タコ焼き屋どうもこのごろはやらない

駒台にこぼれるほどの駒が泣き

大阪市

杉澤

汀

ひまわりの咲いたところへ花キャベツ

しめ飾り稲穂を恋しがる雀

スタンドの老骨も立つ初トライ

鳥取市

倉益一瑤

陣笠もいざ鎌倉へ活気づく

ポスターは国政担うよいお顔

日溜りに頭抱えて寝るアヒル

岸和田市 高須賀 金 太

ミレニアム違う音色の除夜の鐘

雪吊りの樹に雪があり安堵する

綿帽子かぶり優しくなる地藏

ヒットパレード宇多田ヒカルを歌えない

駆け引きは嫌い自分が消えるから

オキナワの心札束では買えぬ

米子市 白 根 ふ み

気の晴れるまで蘭玉を付けている

はは老いたもうことなかれ屠蘇の順

古きよきころ湧きくる屠蘇を酌み

山茶花の蕾足りない異変かな

白椿雪に打たれてからよごれ

七草に雪の白さの粥する

鳥取市 小 谷 美 ツ 千

今喪中それでも温い賀状来る

二〇〇〇年母の遍路の鈴が鳴る

添い寝していたのに母は起きて来ぬ

コスモスと一緒に母がほえむよ

冬雷もびたりと止んだ葬の列

こしひかり二合ふつくら盛り飯よ

熊本市 永 田 俊 子

モナ・リザの笑いが不気味二〇〇〇年

ロボットが笑い出すかも二〇〇〇年

万物流転句読点打つ除夜の鐘

残り時間奪うテレビは消しておく

どうしても埋まらない塗り残しの絵

熊本県 高 野 宵 草

渋滞の車それぞれ用を持ち

眠い目で子等も待つて二千年

七日粥 散歩で過食とり戻す

松の内 孫先生の授業受け

挽回は遠し開発悔いてなお

熊本県 岩 切 康 子

約束の客が来なくて動けない

年越しそば胃に相談して食はず寝る

絹寝巻初夢とうとう見なかった

松の内過ぎて捨てない食工夫

お馴染みの顔が揃った初泳ぎ

唐津市 久 保 正 剣

二〇〇〇年まだ賢人の現われず

蛸壺の被写体蛸と限らない

弓なりの女体が見たい徳俵

味つけに誤作動はない母の匙

お色直しからレンタルでない衣裳

唐津市 井上勝視
ジャンケンもいいなと丸い嫁と義母

立ち枯れのような俺にも欲はある
忘れてる影に突然怒鳴られる

冬の地図ひろげて爪を切っている
ライバルも必勝祈願しています

唐津市 山門幸夫
カボチャ飯冬至の夕餉亡母が居る

振り返る漫画の年でありにしか
有難や七回の干支老婆と居て

初日の出孤高の老龍静かなり
薄化粧万両の紅鮮やかに

唐津市 山門タミ
大空の飛龍仰いで二〇〇〇年

二〇〇〇年日の丸高く波静か
二〇〇〇年辰の爺孫揃いぶみ

変る世も日本人です初詣で
世界中アップダウンの二〇〇〇年

唐津市 仁部四郎
制服が替わるのを待つ年度末

借金メニューが届く年度末
長のつく椅子が四股踏む年度末

国会のドタバタ記事を子らも読む
国民はやはり政府を信じたい

唐津市 市丸晴翠
雪どんど地上の穢れ消しに来る

青空をキャンバスに蜘蛛糸を吐く
調理法教えられてるレジの列

未来図に国債の影大き過ぎ
賞金は山分けという皮算用

唐津市 山口高明
鼻つまみすっぱん生血一気飲み

匿名で五年もつづく志
手料理の憎い手管に絡められ

陛下さえお誉めになった松浦渥
凡人の僕に聴こえぬ天の声

唐津市 樋口輝夫
大吉が出るまで孫は引き続け

途中から方言まじる長電話
綻びを縫うてた亡母の小さい背な

初めだけ竜虎相打つプロ野球
竜宮のママに身ぐるみはぎ取られ

高知市 北川竹萌
娘に貸した帽子長城見て帰る

窓開ける稜線直に初の雪
同人会乾杯音頭和の米寿

何時会うても若いと年賀状がくる
宅急便三日続いて帰郷せず

高知県 赤川菊野

二千年今人生の始まりだ
人間が好きで嫌いで一人旅
灼熱の砂漠に眠る千体仏
愛憎を越えて静かなデスマスク
長男に嫁ぎ重たい冠木門

高知県 小澤幸泉

真四角なまんまに生きて生き過ぎる
Eメール三世の夢を見つけ出す
うつ病と仲良く暮れる老いの部屋
冬枯れの隅にめばえる涙あざみ
人生の曲り角にも母が居る

松山市 宮尾みのり

緩やかに時間流れて癒される
渋滞もゆるやかだったミレニアム
病み疲れ予感ばかりが冴えてくる
まんざらでない鏡へ言う化粧
お隣ともう一ヶ月出会わない

松山市 丹下美津子

二〇〇〇年迎える父が餅を搗く
吉兆か大空晴れてお元日
ほろ酔いの夫と組んで舞うワルツ
登り竜のお軸飾って新春の床
いい人と組んで介護のボランティア

今治市 野村京子

母の鈴哀しい音のする迷路
ごしごしと嘘にまみれた手を洗う
約束は果せず深くなる根雪
少年の匂いが残る鼻ピアス
母の住む町を通ってきた時雨

香川県 川崎ひかり

一円が足りず一万札を出す
たと紙の中で春待つ辻が花
男とはかくあるべきか松の芯
守護神のように子犬を抱いている
悪いくせまた親切の裏を読む

香川県 池内かおり

老松に寒中見舞い申し上げ
落雷に支え合ってる夫婦松
ありったけ椅子持ち寄って餡雑煮
嫁と娘へ手縫いのベストよろこばれ
日替わりのメニューにこにこ帰省客

香川県 成重放任

悪いとこばかり似てても憎まれず
思わない人が喪中の中に居る
着かざった妻の後行く子守りパパ
三代が揃って和むカルタとり
愛妻の手解きを受け野良仕事

香川県 山地 マツエ

机上論理想ばかりが高くなる
想い出があつて反古には出来ぬ布
子等巢立ち夫婦にジャムが固くなる
老夫婦大根一本持てあます
バラ一輪活けよう私の誕生日

香川県 神保坊太郎

なりゆきでリユーマチと言う友が出来
ジェラシーは酒に溶かして捨ててゐるもの
よう聞けと弟側杖くわされる
小さい怪我して大きく叱られる
子が七人立派でしたねお亡母さん

宇部市 平田実男

青ジューズまづいもう一杯の嘘
候補者のみんなへ握手してあげる
決を取る人と目が合い手を挙げる
何もしないと何も出来ないのは違う
苦しみや悲しみ言えば愚痴になる

美祢市 安平次弘道

時は金なんて言うてて遊んでる
旅プラン妻に任せて飲んでる
変り身は早いと少し隙がある
自分史はそのうち書くとそれつきり
コーヒーは二杯目午後の予定なし

竹原市 小島蘭幸

晴着を乗せる車磨いている父だ
ママさんバレーがしたくてしょうがない二十歳
生活の匂いが消えている晴着
ひとり住むアパート決めて来た雪よ
海に背を向けた仏もいる波止場

竹原市 森井菁居

野歩きが好き裏道の侘が好き
亡びゆく自然を呪う北きつね
百歳現役 人間国宝やめられぬ
合格を見届け神と縁を切る
かじられることが嬉しい親のすね

竹原市 三宅不朽

きけわだつみのこえ読み直す二千年
浄土寺の朱もまっていた路郎展
富士カラー円空さんの影がない
落花生この掌触りの旅を恋う
七草の青々とあり妻が病む

竹原市 時広一路

庭で芽を出すとは雑草運が無い
誕生日大安縁起良い年だ
白い波言いたい事が有りそうなる
ことわりも言わずに昼に月が出る
妻は留守 言うてセールスお断り

竹原市 古谷節夫

春の森万物芽吹く神が住み

地球から森を消すなど二〇〇〇年

神々のお告げ聞える場所探そ

エンピツを転がし出世した男

メジャーリーグへ昇格するか巨人軍

竹原市 岩本笑子

一年中茄子もキュウリも売れてます

風車今日も良い事ありました

寒椿風の無情さを知らず

少し休もうりユツクの中味軽くする

別れたいのに風さえ吹いてくれぬなり

竹原市 石原淑子

日々好日梅のほころぶ二つ三つ

大寒もポカポカ陽気ミレニアム

寒椿変らぬ愛を敷きつめる

水仙の薫るお点前平常心

足し算の大好きな愛育んで

広島県 藤解静風

満たされた日々に暮しの詩がない

友はよし時計外して酌み交わす

逆らってみたい風あり竹とんぼ

父の瞳におだやかな風吹いている

吹きすさぶ北風の中塾カバン

岡山市 井上柳五郎

また今年同じ願いの初詣で

数の子のひとつをわけて老夫婦

孫からも傘寿へ包み誕生日

ファックスの操作に老いはひと苦勞

枯葉みな篩い落とせば高い天

倉敷市 井上富子

氷雨でも犬は散歩を嬉しがり

好奇心の強い器で世話がやけ

たつぷりと御髪^{みづみ}が在りし日の写真

恋人の名前で貯めているばるる

リハビリにこたえてくれる膝小僧

岡山市 川端柳子

夫想う忘れなぐさの絵を画いて(二年眠ったままの夫へ 2句)

夫まだ目覚めぬままよ初日記

ごめんねと詫びた切株から新芽

歳月や一度いたずらしてみたし

席替えて空は青いぞワンツースリー

岡山県 矢内寿恵子

龍天に昇る二千年の夜明け

ミレニアム夢が形に変わるかも

枯れてくる脳波へ二千年の活

永らえて川の流れに逆らえず

公園は火宅を抜けて来た孤独

岡山県 山本玉恵

出直しに靴を磨こう二度三度

虚と実のはざままで春を舞いつづけ

蓑虫の身の上風は春の音

無器用な夫がくれた掌の温み

迷いまようつて手くらがりなる晩学を

岡山県 小林妻子

がばがばの靴で氏神初詣で

焼酎ばかり吞んで皮肉な酒談義

次の世の切符は閻魔様の手に

ライバルが見えなくなった奥座敷

携帯電話寢床の中はいいですよ

岡山県 荻野 鮫虎狼

節分の鬼も言い訳して帰り

二千年去年と同じ陽が昇り

長男の居場所故郷で牛を追ひ

ラーメンが冷えきっている舞台裏

昇り龍ばかり並んで居る年賀

岡山県 福原辰江

改めたムードへ初日顔を出し

陽気辰三代揃い盛り上げる

人生いろいろだったなあ走馬灯

ちぎり絵が見事と紙のやさしさで

命惜し粗大ゴミと言われても

岡山県 富坂志重

小遣いをいじめに貢ぐ死の値段

黄泉からの便り来た夢初の夢

不器用もやさしい家族の仲で生き

炎えたとはかない命糸トンボ

夜のねむりそのまま逝けたらいいのにな

松江市 佐野木 みえ

古火鉢貰って思案小半日

カーテンを引けば素直になれそうで

結ばれて二十年目の娘の至福

靴の紐しつかり結んで富士登山

陽だまりは不幸な子にも注ぐ愛

松江市 川本 畔

風呂敷の結び目にある演技力

カメラアイ大事なものを見落した

求めるものが最後にあった裏表紙

若い手が大きく竜を書いてくる

夢に見て電話しにくくなっている

松江市 安食友子

半信半疑 盛大運とある暦

負けだすと無口になっていくゲーム

雪しずりまだ弱い芽が気にかかる

荒波の深み岩海苔知っている

エルニーニョとかラニーニヤとかで身が迷う

出雲市 富田 蘭水

古稀を過ぎ妻に素直にハイが言え
ペイオフ論縁なし無職土いじる
教へ子に囲まれ記念の辰の茶碗
夢という不思議な文字にまだ迷う
二度とない今日この寺で目を開く

出雲市 竹治 ちかし

五十路坂舗装の道路とはいかず
ああ夫婦執行猶予の仲で生き
子が見せてくれる良い夢悪い夢
もし妻が居なけりや半身不随です
夢よりもお金が好きな妻と居る

出雲市 園山 多賀子

感情線起伏宥めて米寿坂
有頂天梯子外されないように
自史に忘れ上手と書いて措く
ぶら下がって見たいな背の高い男
箸箱を分身のよう愛す夫

出雲市 久谷 まこと

門外漢だけど聞き耳立てている
定年が近くいろいろ話し声
幸せに馴れてしきりに愚痴こぼす
はなやいだ声はやっぱり女です
傘となり杖ともなって惚けすすむ

出雲市 尼 れいじ

陽が昇る少し動いた五葉の松
終身刑覚悟の恋を追っかける
文句言う時は全開おちよぼ口
あちこちにいろんな神がいらっしやる
二十世紀梨がさがしている出口

出雲市 吉岡 きみえ

やがて春仏と笑って話する
春よ来いレンゲの道が歩きたい
紅さすとすこし女が匂ってくる
二階からとんとんとと若い音
悪業の数ほど懺悔の日をかさね

出雲市 板垣 夢酔

叱られるそれでもすわる母のひざ
発音にならない恋が胸で燃え
菜っ葉服 会社を救う技術持ち
毒のある花に蝶蝶寄りたがる
挨拶もお茶もあとだと将棋盤

出雲市 板垣 草丘

二〇〇〇年雨でも旗を掲げなさい
ウミネコがつかいを組んだ声になり
トロ箱で運んで魚でありません
前列はみんな故人と言う写真
急逝の友が賀状でさようなら

出雲市 小玉満江

クリスマス家族そろって絵ろうそく
やまんばもガングロ娘初詣で
おせんべいポリポリ噛んで思案ごと
山彦はもう帰らない木が枯れる
齒の治療のばしのばして十二月

出雲市 岸 桂子

日が沈むただそれだけのことなのに
ラブコール孫が相手という平和
十人のショッピンングに見る十の彩
指切りの指から忘れて行く寒さ
窓を拭く胸のこだわり消したくて

島根県 松本文子

初菿穴道の湖に鳥渡る
母逝きて寒し大空果てもなく
心の根雪今年もきつと溶けぬだろう
優しさをそつと外している寒さ
死にたくなるほど春の花が咲く

島根県 森 茂美

しばらくは時間を止める明治村
安全神話起きない事故の起きた国
難民の児らが可愛いつぶらな瞳
結論を急かすか暮れの鐘が鳴る
丹頂は恋の季節か初春を舞う

鳥取市 植田 一京

昔むかしの父はスーパーマンだった
だまし舟の記憶か姉を信じない
善悪はどうあれ思い伝えとく
黄昏にまだまだ道を見極めず
ラッキーな時は短くすぐ逃げる

鳥取市 両川 洋々

助っ人の神にどん底から出合う
太陽に背き世の中にも背き
ボロのでる嘘をシャネルの香で隠す
横たわる基地に沖繩疲れ果て
理屈など無視して鬼とペアを組む

鳥取市 春木 圭一郎

鳥取へようこそ海と山の幸
鳥取も住めば都と渡り鳥
鳥取の砂丘へ埋めた恋一つ
鳥取のいで湯に心洗われる
鳥取の地酒ほろほろ友と酔う

鳥取市 美田 旋風

除夜の鐘聞いて飛龍の夢を追う
親の夢家をリフォームして譲る
どの虫も妻に逢ったら百年目
賑やかな百円店で無駄を買う
カクテルへ恋の思い出落けてくる

鳥取市 岩原喬水

鳥取市 杉本孝男

仏の眼悪を無言の慈悲で刺す
不況風地震に耐えたビル倒す
地顔です鏡は嘘を言いません
葉だけ売るほど貯めて死んじまい
歳ですネ餅まで喉を通りかね

鳥取市 岸本宏章

国旗みな平和な風になびきたい
仕事着が一番似合う日本人
職場でもうかつに言えぬオーイお茶
子は宝三人目には金も出る
泣き虫の孫よ卒園おめでとう

鳥取市 岸本孝子

一番に手をあげた子はあてられず
一番に生まれみんなに看てもらう
今世紀最後を歩く靴を買う
還暦で女の城を明け渡す
句読点打って自分をとりもどす

鳥取市 中村金祥

横綱が勝ってバラバラ拍手する
大王もタイオキシンに恐れ入り
今日の嘘大事に仕舞う律義者
裂けた愛すべて銭から始まった
俺の番来ぬから明日も頑張ろう

とっておきのワインは妻の誕生日
窓際に写る栄華も過去の夢
さすがプロ拍手する間を空けて待つ
判を押すだけの机だ大き過ぎ
龍宮の下見に連れと行ってくる

鳥取市 福田登美

初春の心に淡く紅を引く
吹雪いても心ゆっくり春を呼ぶ
乾杯に夢をかじった涙湧く
限りなく孤独の夫婦雪解ける
触れてみる松葉がにから波の音

鳥取市 石上悦子

帽子かけ用の頭に聞かれても
ピーポの主はワインを浴びただけ
古時計時々止めてドッコイショ
風邪菌の駐屯基地に選ばれる
本物の茶髪が意外くろ髪は

鳥取市 西村默光

沈みゆく夕陽が民話語り継ぐ
池の傍湖山長者と対話する
野鳥たちに池の釣り場を教えられ
釣りに行き湖畔の掃除させられる
農業と漁業が池を挟み撃ち

鳥取市 坂田和歌子

墨汁に試されているあかきたな
年末を末と思わぬ無一文

賞品は生きているよなお人形

獣以下されど三食たべている

斜かに黄水仙の天地なり

鳥取市 徳田ひろこ

北風に強い玩具が売れている

雪解けを待った広場の柳の木

それとなく力を貸しているのです

舵取りゲームする金魚鉢にぎやか

タイムカードゆっくり押ししたりベンジ

鳥取市 夏目健一

どん底を凌いだ影に君の愛

さらさらと銀河に浮かぶ亡き恩師

反り返る椅子もいつかは他人の席

境界線がこころの狭さ見せつける

ちちははにやさしい嘘の匙加減

米子市 木村富美子

雪が降るわら打つ父の背温い

父の冬一年中の縄を絢う

父の絢う縄は匂いと音がする

縄とびが飛べてやさしい顔になる

荒縄で大根が来るかぶが来る

米子市 澤田千春

さずかりものよ持つて生れたこの笑顔

宇宙からながめた我が家赤くぬる

気がつけば甘えた人が消えていた

言い訳に軽い芝居をしてしまふ

おおらかな氣にしてくれる日本晴

米子市 林瑞枝

子供みたいでかい夢追うミレニアム

娘の回復神に感謝の初詣で

何故かなつかし景色夫のふる里に

月旅行出来そうな駅新世紀

ひとりハンドル癒しの歌を口ずさむ

米子市 茂理高代

取りすがり泣きたい母の胸はなし

茨道もののはずみか花が咲く

この波に乗らねば岸の花摘めぬ

陽の当る冬枯れ道も又たのし

どの家も幸せそうに陽が当る

米子市 青戸田鶴

二千年いやしの言葉かけ合って

三社参り古い神社のたたずまい

好奇心だけは今年も枯らすまい

だまし舟私の方によってくる

おせち作りもう限界と思いつつ

やすらぎの広場を持つて手を繋ぐ
米子市 木村春枝

講演会飴玉二個をポケットに
手で作る玩具温い灯抱きながら
モノクロの母親像に論されて
本番に眉一刷けの出来あがり

米子市 鷺見正子

父ちゃんの魚は魚屋より美味い
紅白のテレビに映る宇宙人
視聴率競って軽くなるテレビ
只の物貰う列には近づかぬ
噂している気がしてならぬ冬の耳

米子市 中井ゆき

晴れつづき木の芽が少し丸くなる
浄玻璃の鏡の前で欲はなす
雪吊りの縄美しく懸命だ
晴天がつづき天にのぼれぬ龍がいる
孫抱いて至福の顔になる娘

米子市 野坂なみ

先頭の耳は後ろにつけ代える
お手玉を今度は老母に縫ってあげ
貸した手をいつか取り戻そうとする
さまよいの果てに虚像にとびついた
縄張りの争い神も巻きこんで

晴れた日は味方がそばに居てくれる
ダンボール私の踏絵しまつておく
孫が来て老母の玩具になつて
五歩行けば五歩をふりむくことにする
雑木林に活性剤がおいである

米子市 光井玲子

東京の雑踏老人には合わぬ（東京で正月）
よろこびを声一杯に誕生す
鶴の一声父はまだまだ健在だ
羽根のばす今日の宴は貸し切りだ
アイデアでぐつと変身ダンボール

米子市 永井三津子

お正月孫の喧嘩で幕が開き
二千年淡い政治はもう要らぬ
一期一会ちぎれる程に手を振って
クリスマス独り亡夫恋うプレゼント
不器用な文字から生きる夢貰う

米子市 神庭詩郎

マネキンが一足早く春を着る
自動ドア君は自由を忘れたか
施設から迎えの車来る介護
横道にそれる講義にある人氣
就職の決まらぬままで来た卒業

倉吉市 山本玲子

残菊の色あせていく今朝の霜
初売りの景気をつける福袋
大好きも母の口ぐせ雑煮餅
雪道で転んだ人が笑って行った
のぞみ号車中はゆっくりと歩く

倉吉市 野口節子

心満たす器が未だ見つからぬ
雑煮尻目にカップラーメン食べている
赤貧を洗う手と手があったかい
有難や見つめてくれる夫が居る
母病んで千羽の鶴に命乞い

倉吉市 淡路ゆり子

初日を拝む弾む心が湧いてくる
祝日は日の丸揚げる心を決める
ゲームする瞳の輝きに子の未来
年輪は素直に顔に浮いてくる
小鳥のため千両万両良く育ち

倉吉市 松本よしえ

節分の淋しい鬼と五色豆
逃げて来た鬼が悲しい顔をする
大人には成りたくないと怖いこと
少年の未熟に期待かけている
安売りの玉子を先ずは籠に入れ

倉吉市 山中康子

新春の陽ざし桜が咲きそうな
二〇〇〇年やるぞ私は今が旬
さらさらと流れるように皿洗う
一番にこころを掴む犬を抱く
甘えずにどこ迄飛べる紙風船

鳥取県 岩崎みさ江

俱会一処 山ふところの雪帽子
目出し帽バンクの前で脱いで置く
セピアです想い出の色問われたら
身の内の鬼にも豆を撒いておく
威張っている方が影武者かも知れぬ

鳥取県 村上信子

喪服着て寿司をバクバク食べている
出来合いの服着て肩を張ってみる
風鈴を年中さげた窓がある
窓際も妻子のためと腰すえる
人を恋う二度目の恋も春のよう

鳥取県 新家完司

千歳飴親より早く死ぬなかれ
老人力きらきら入れ歯光らせて
老眼のおかけか星が美しい
書き初めは「辛抱」「我慢」「忍」とする
菜の花の夢見て膝を抱いて寝る

鳥取県 さえき や え

地蔵さまの雪道あけるごんたくん
急所つく言葉に温いものがある
二千年へはく靴ひとつよっている
ささゆりを畑一面に咲かす夢
散る花咲く花一期一会の雪を見る

鳥取県 西原 艶子

甲冑をしずしずと観るお正月
外出へおしゃれところが疼き出す
集まれば不倶戴天の顔に会う
不行跡 如何に造詣深くても
地下道で楽器演奏流行り出す

鳥取県 土橋 はるお

節分の鬼が恐れた表札だ
ゆつくりと長持ち唄がやってくる
二〇〇〇年雑煮元氣にいただいた
酒たばこ止めると蝦蟇口に誓う
初詣で嫁が来るよう頼んどく

鳥取県 原 みさを

蛇尾におわる月日としても初日の出
塩味の少し足りないおめでたさ
日本がバケツのマスで計られる
ミレニウム何度も舌を噛んでいる
何を区切る地球に太い線引いて

鳥取県 塔 寛子

ミレニウム龍も迷うかあつい雲
村政のエンゼルプラン翔ばぬまま
介護保険身近なようで人ごとで
あと一息のその一息に見はなされ
しばらくは脇道を行く手もあった

鳥取県 林 露杖

二千年平々凡と明けにける
暖かい新年蠅がおめでとう
時間だけ進み何にも進まない
老いふたり言った聞かぬで揉めている
嗚呼おんなセクハラの罫かけてはる

鳥取県 黒田 くに子

定退の父ゆつくりと屠蘇祝う
職引いた錨に消えぬ波の音
母という根っ子未だまだ枯らさない
幸せの新妻受胎告知する
同居して独居のように孤にこもる

鳥取県 羽津川 公乃

二千年無事に七草匂う膳
熟睡の至福いよいよ老いたるか
婦人会の役を下りたら老人会
瘦身度肥満度十五ずつ夫婦
服喪にも欠かせぬ孫のお年玉

鳥取県 奥谷彩子

二〇〇〇年余生メルヘン組み直す
喜びを包む袋は返し縫い

冬木立妥協ゆるさぬ父が好き

母の背な祈る姿で丸くなり

福袋福詰めたまま売れ残る

鳥取県 津村八重子

忙中閑 今日もたのしく破目はずす

亡き友の名句にあきず読み返す

手に汗をにぎり未来の絵図を画く

飽食の孫の背丈をまた見上げ

八十年広げつづけた此のつばさ

鳥取県 田村きみ子

二〇〇〇年娘に負けていく知識

舞扇肩かるくして舞って見る

ワインのせいだろうか姑もよく笑う

雑巾を縫ってる母の顔をして

同居です視線を少し低くする

鳥取県 橋本多哥由

童心に戻りそれからよい夫婦

やさしさの輪には背すじが伸びてくる

雲の間にくつきり見える昼の月

衣ぬぐ旅の疲れに露天風呂

人生を貫き愛と恥を知る

神戸市 中村ゆきを

食いしばる歯もガタつきぬ年の明け
正太郎周五郎の情 三ヶ日

二〇〇〇年あなたは何に賭けますか

目醒めたらそこに子の居て妻の居て

神棚を拭き清めたら三毛座り

神戸市 小林一夫

生国や箸に伸びたる雑煮餅

パセリの森で君と葡萄酒など飲もう

訃を告げる電話を切りて風の音

胸をはる少女像にも初日影

にぎり湯に身をなげだして春の雲

芦屋市 黒田能子

それぞれに染まり始めた三歳児

真っ白いメッセージ聞く春の風

人生の節目節目に咲くさくら

最後まで回りつづけていたいコマ

相づちを打ち輪の中を出られない

尼崎市 長浜澄子

残り福電車の揺れも心地良し

どう背伸びしても所詮はネコジャラシ

抱負きくホテルリッツの仄灯り

地球儀の染みの日本に四季がある

気の利いた台詞の並ぶカフェテラス

尼崎市 春城 武庫坊

長命を願いお煮染め薄味に
新春ラグビー夢中になって餅がこげ
初詣でみな善人の笑み浮かべ
アルバムを繰ると昭和の風が吹く
公園を野犬が走る初春三日

尼崎市 春城 年代

成人の長いたもとで身を躲す
雑巾を縫うミシンさえ故障する
音をあげるのも他愛ない青林檎
十七字に酔うてかれこれ小正月
きのうきょう冬ざれ人の葬送り

尼崎市 田辺 鹿太

気骨とは男の骨をいうらしい
忘れたいことは忘れぬ物忘れ
人間のおかしさ嘘を真に受ける
無駄のない生き方だけはしたくない
兵は皆眠る高野に苔むして

尼崎市 的場 十四郎

二度の職決めてさくらも綻びる
末席のお国自慢で座が和む
放浪くせ今も自叙伝セピア色
手のひらにのせておきたい孫二人
道一つ迷わず歩く二〇〇〇年

伊丹市 山崎 君子

二〇〇〇年本家のひ孫双児なり
美味しいね誰かが言った友の味
五人囃子わたしの亡母を知っている
あれから五年男雛すこうし笑み給う
里帰り奥にひっそり昔びな

西宮市 林 はつ 絵

無口から出た一言にあるパワー
猫の子と同じレベルで日が過ぎて
方法はどうかあれ心伝えたい
平均寿命あたりでやっと自信持ち
まだらばけ勝手な時に顔を出す

西宮市 奥田 みつ子

なまぐさき掌合わせ初もうで
ブーツとふくれて私の顔になった餅
姑になり亡母より亡姑をなつかしむ
多角経営 駅にコピー屋ラーメン屋
家を出るいつも右足から一歩

西宮市 山本 義子

風入れて人間と部屋錆おとし
カラオケにくり出すまでが幹事役
じたばたは止そうとゆるり湯につかる
しみりと古いテープを聴く夜寒
あといくつ嘘つくだろうかアハハ

西宮市 亀岡哲子

かいま見てなお夢多しルミナリエ
遠いどこかで虹を渡っているわたし
動物園動かぬままもいて冬日
カルメ焼いよいよ膨れ子はいない
孫はもうほんとの話してくれぬ

西宮市 秋元てる

岩木嶺も名もない山も雪だろう
今も若い遺影へ故郷の菊の花
最後かも新幹線の木曾三川
迷いなく散るよ山茶花陽は西に
ラララで終る昭和の流行り唄

西宮市 菊池トミエ

初夢は上昇気流に乗って行く
当り年何か良い事見つけよう
この坂を越せば楽しい花園か
七坂を越えた翼の傷みよう
一徹を通し短い日が暮れる

西宮市 井上松煙

元日は福をのがさぬ顔をして
やり残しいよいよ喜寿に気も新た
妻のメモ子供扱い今もなお
柏汁のぐつぐつ冬を匂ってる
冬木立雑木も力ためている

西宮市 緒方美津子

メモなのに亡父の筆跡捨てられぬ
父逝きて鶯も来ぬ庭となり
七回忌蓮の台の端に母
横顔の何てやさしい鬼だろう
職退いてウィークデーの旅の味

宝塚市 嵯峨根保子

祈ること忘れて帰るルミナリエ
華やかな祈りで括る十二月
出合い元年午後の光のある中に
花がつおほどの軽さの抱負なり
三日月の凄さと眠狂四郎

加古川市 吐田公一

胸張ってやんちゃに飛べよ竹トンボ
作品で他人の倍を生き残す
古稀になお三度の職のありがたさ
借金でできる政治は楽でいい
道端におわす地藏へ灯を上げる

相生市 中塚礎石

やっと今七人の敵いなくなり
根回しの安堵が答まで喋る
新聞の一面記事になる計報
寝たきりの妻との絆命綱
セーターを編んでもらった老いの恋

姫路市 古川 奮 水

雑音が過ぎて本音が逃げていく
汗を拭く顔が祖父にも似たと言う
借財も財産らしく自慢聞く
初出勤暮れから靴は拭いてある
隠し芸ひっ提げ下戸の新年会

大阪市 西 出 楓 楽

心安らぐ街公園に子が遊ぶ
いつ来てもたしかな四季がある京都
正論と本人だけが思ってる
よく出来た人には距離を保つとく
ツ―言えばカーと返ってくるいくさ

大阪市 井 上 白 峰

脳味噌の目減りを防ぐ趣味の会
群を出たわたしに座る椅子が無い
口裏を合わすと走る悪だくみ
譲り合う心に解ける縛れ糸
嫌という言葉の裏にある本音

大阪市 清 水 絹 子

クリスマス誰もおいでと言うてこず
上上の試験のあとの孫とイブ
クリスマスよそに山がの露天風呂
向こう三軒あいさつがわり水を撒き
仲人の挨拶妻に覚えられ

大阪市 町 田 達 子

カウントダウンその瞬間にも呱呱の声
千支の龍ことしは大変な年だ
歳なりに生き生きマイペースで私
天保山で落日の神秘見ています
振袖の娘へ神もホクホク戎さん（成人の日）

大阪市 川 端 一 歩

原稿が仕上がり万歳してしまふ
月の出は赤いやさしい顔で出る
あの人はお辞儀がきれい歯もきれい
失敗の話がうけてうまい酒
両親を越せぬひとつに親おもい

大阪市 岡 本 久 峰

頂門の一針ノック刺されけり
謙譲を知らぬ外人嵩高い
痩せ蛙爪に火点し生き残る
黒髪のためとうなじ眠り込む
生駒トンネル抜けて母なる風に逢う

大阪市 小 林 周 信

お元日父から順に飲む福茶
福引きでばんちあられを貰ってくる
年賀状一つに軋む人の仲
水仙が凜と咲いてる風の丘
起き抜けの煙草一服止められぬ

大阪市 中田 あい子

本枯しの梢に光る小さい春

二〇〇〇年つつがなれとひたすらに

新老年時代来そうな二〇〇〇年

泣くよりもつらい笑いがあるものを

独り居も呪文となえて七草粥

大阪市 本間 満津子

泣くも笑うも人生劇場一コント

こんなこと有って良いのか道が消え

頭の蓋開けてふりたい香辛料

手を鳴らしても数珠をかけてもしようがない

病ぬけして未来図を書き直し

大阪市 田中 節子

臆病者君子危うく後ずさり

好奇心結局無駄な福袋

めでたさもメカに追われたミレニアム

名前なく電話番号だけのメモ

福笑い心の鬱も消し飛んだ

大阪市 梶本 落児

競走馬勤めを終えし日向ぼこ

少年の感動少し貰えたら

冬の海そこがのぞける程澄んで

裏通り身体おぼえていくれる

五重の塔鹿と鳩とが話する

大阪市 河井 庸佑

板挟みひとり苦しむ辛い役

晴耕雨読余生の予定練り直す

包丁のリズム聞かれぬ母が病む

長い国こんなに違う春だより

蜘蛛の巣に水玉光る森の朝

大阪市 板東 倫子

初詣で伏見みやげは焼き雀

コンピュータに識別されて職場去る

春曆性善説を信じよう

御意見無用ガングロの新成人

出世してもタツノオトシゴぐらいの子

大阪市 川久保 睦子

一年の計をくしゃみで書く日記

一合を仏と分ける飯を炊く

路地を行く車にカニのごと歩む

若い娘のマネキンのよう皆キレイ

身の程を知らぬ女の露天風呂

大阪市 渡部 さと美

はつきりと言う舌らしい寒の水

不況にも強い芽育つ新人類

住吉さん刻巻きもどす神馬曳き

見かぎってしまうと運はこちら向き

寒風に笑むパンジーに恐れ入る

大阪市 玉置英子

柚子湯出て一口ほしいレモネード

来れぬ子へまず一枚目年賀状

お得意が大変うちはなお大変

二千年紫式部御登場

千年紀出合う節目をそうろりと

大阪市 川原章久

すぐ女出来る息子に嫁がない

孫熱が戻ると元のやんちゃくれ

楽々と今まで越えた山はない

触りましたお尻や胸は出来心

ぼろぼろでものれんは変えぬのが老舗

大阪市 小糸昭子

お多福の面を被って許そうか

面とつてお化粧とつて良い素顔

試着した時は入った服だった

裸婦像に昔は肥っていましたな

両手揚げ万歳したい招き猫

堺市 桑原道夫

食器棚伽藍伽藍と哭きにけり

尻振って逃げる家鴨も政治家も

象の鼻虚空をつかみ損ねたり

滝壺を覗いてきたるランドセル

墓もモーニング娘が好きらしい

堺市 志田千代

大切なメモ洗濯をされにけり

メモの品プラスお酒のアテも買う

続けたから続いています五十年

句集謹呈 私の裸お見せする

楚々とした美女もおつと爪楊枝

高石市 浅野房子

当然のようにひとりの雑煮餅

このごろは疑心暗鬼と言う病氣

このごろはとんと御無沙汰夜の街

お話を聞いてほしいが病んでいる

無視されている負けている運命か

和泉市 岡井やすお

三月は別れの月や花が売れ

卒業生送って教師よく眠れ

下が来ず今年も花見場所取りに

大赤字残しパンパカパンと去り

女性ならセクハラだけはせぬだろうと

岸和田市 長谷川 呂 万

大バーゲン二級品とは承知して

鞭入れて掉尾の力余命表

お茶コーヒ備蓄名水新春に活き

カルタ取る声は聞かれず電子音

時は金ならば私はお金持

岸和田市 原 さよ子

お薬師の頬にやさしく浮く木目
あんな似の五百羅漢に手を合わす
振袖にちよつと意地悪した小雨
母さんがきつちり食べる残りもの
落款の朱が鮮やかな龍一字

岸和田市 岩 佐 ダン吉

駆け引きをするたび僕が小さくなる
四面楚歌それでも地球回つて
北風に向かおう恥じるものはない
始発駅拳しつかり抱いている
やるだけはやつた真つすぐ睨む天

岸和田市 井 齋 一 齋

甘いミツばかり撒いてる選挙カー
不況風どこ吹く顔の肥満体
喜寿迎え気持は若い時のまま
手袋を落す人有り春間近
只酒がお高く付いた検問所

岸和田市 藪 野 けい子

移動月 上役の椅子に座つてみる
おしゃべりの帰り献立聞いていく
二〇〇〇年孫の笑顔と十日戎
夕食に駆け引きしてのふぐの鍋
駆け引きの孫のおねだり散財す

岸和田市 田 中 文 時

散歩中一句浮かべどペン持たず
スタートからラストか何れ二〇〇〇年
一喝を明治の祖父に食う暮し
サバイバルゲームにや勝てぬグルメ腹
見解の相違で済まし争わず

岸和田市 宮 野 みつ江

木枯しの屋台で貰う人情味
五回目も涙で歩きルミナリエ
ファインダー覗くと街は別の顔
客茶碗出されて里は遠くなり
二千年目標出来ぬまま十日

貝塚市 池 田 寿美子

わがままに生きて少うし若がえる
何もかも話せる友はただひとり
ミレニアム福祉の現場矛盾にす
いたずらを一寸してみたいな砂紋(竜安寺)
めぐり逢い残り少なくショパン聴く

泉佐野市 山 本 蛙 城

初詣で減った一人にこのわたし
Y3Kごろは稀少種日本人
少子化の国に風俗店の国
九条より産めよ殖やせを急がねば
二〇〇〇年の児戯に二千元紙幣

八尾市 宮崎 シマ子
グルマストーブ囲む故郷の雪の駅

出過ぎたと思う必ず鞭が来る
恋を無くしたカナリヤに歌がある

百薬の長にもあつた落し穴
ジーパンの嫁は元日から元氣

八尾市 長谷川 春 蘭

米寿過ぎ杖に頼らず恵方みち

駐禁を守り素通りした名所

石臼の置かれしまに梅つぼむ

蒸芋を買うは明治の男なり

雪しまく恋には遠き歳となり

八尾市 高橋 夕花

福耳にたまつていくは風の聲

懸命に生きた椿の大きな瞳

私にあかんべえしていく春の鬼

夫の好きな昔ばなしを聞いたげる

約束を守つて三月三姉妹

八尾市 生嶋 ますみ

母の手の届く高さに注連飾り

鏡餅心ゆくまでまんまるに

子守りにいく妻いそいと化粧して

臥す妻に代つて氣負いきッチンへ

厚底の靴で抜いてる首ひとつ

考えがあつて三番手につける

何もかも流してくれる時の川

子は鏡はつと氣付いて叱れない

がき大将がいて子どもらはよく遊ぶ

パンジーのつぼみに春がいつぱいだ

八尾市 吉村 一風

思いあがりの言葉が他人を傷つける

冷や奴四角四角に食べる箸

ドナーカード持ったポケツがこそばゆい

反抗の無口がかじるハンバーガ

群狼の街でつまずき歳を知る

八尾市 神原 まさと

寒い夜はお酒五勺が守れない

サングラス掛けて拝んでいる初日

おみくじを見せあい燃えている二人

初詣で苦闘しましたベビーカー

人伝に訃報が届く松の内

松原市 玉置 重人

柳友を見舞う日の風は冷たし

大往生ですなと軽く言う他人

いつでもどこでも私は私です

金太郎飴は依怙ひいきを嫌う

診察券今年もどうぞよろしゅうに

松原市 小池 しげお
妄想がふくらんでゆく負けいくさ

三猿を守って敵になつてゐる
ザクロジュースも一度恋をしたくなる

灰色も三年すれば白くなる
掘ごたつ楽しく遺書を書いてゐる

藤井寺市 高田 美代子

何時割れていいのか薬玉が一つ
日の丸をがんじ絡めにする勿れ
正月の残りがヒヨイと貌をだす
ラブソング小鳥も春を待っていた
心配なことの一つに府知事選

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

確執を微塵もみせず蟻の列
軽い気で嫁においで之歌に乗り
手枕を麒麟の首にかしてゐる
メモにまで性格の出ている楷書
開けるまでやさしく抱こう福袋

藤井寺市 太田 扶美代

悔やし泣きこれがわたしの精一杯
アルバムの仲間時々確かめる

入院が続いて退院も続く
亡母さんの匂いの残る街に住む

二十一世紀どうやら僕は生きていた

白酒で和気藹藹の嫁姑

福娘やつて五年目未だ独り

お互いに耐えてる積り嫁姑

負け犬の愚痴が飛び交う外野席

肩書の名刺ばらまくクラス会

羽曳野市 吉川 寿美

木登りの下手な男と道づれに

使い残した月日が溜る小引出し

さびしくて焚火の輪からぬけられぬ

眼も耳も悪い神さまだと思う

妹の思い出曳いて回忌膳

羽曳野市 福田 満州

停電もなくおめでとう二〇〇〇年

へら鮎をいちずに愛すおじいちゃん

大皿のパセリばくばくお婆あちゃん

しばたたく目がうそうそと言うてはる

片付けた部屋でやつぱり捜し物

羽曳野市 酒井 一壺

二十四時一言もなかったふたり

表札は二人のままで住んでゐる

なんとなくふたりでいるとよくねむれ

人間の無理な祈りに神も馴れ

真剣に神に祈った記憶ない

藤井寺市 中島 志洋

羽曳野市 西村りつえ

帰阪した子らに囲まれ初詣で

チンパンジーに私負けます記憶力

カラオケで冴えた声消す鼻濁音

見返り像寒い御堂にあたたかし

梅桃桜お誘いを待つ鶴の首

羽曳野市 徳山みつこ

0にしてまっすぐ二千年へ試歩

ジョーカーを引いてばあちゃん負けてやる

アイちゃんにとうに負けてる記憶力

裸木もう春へ命をたぎらせる

龍のひげ核のボタンに触れぬよう

富田林市 片岡智恵子

いい夢が羽毛布団に脹れゆく

飽きた順におもちや積まれる部屋の隅

休耕地春の陽射しへ拗ねている

喪の言葉調えておく曲り角

やさしい嘘もらった今日の飴の味

富田林市 松本今日子

百八ツ聞いて変らぬおめでと

初日の出富士のお山が胸にあり

秒読みの中で華やぐ受験生

初詣でお大師さんは山の上

お年玉一寸格つけ年男

河内長野市 加島由一

携帯の届かぬとこに居る次男

どの国の国旗にもある明と暗

青年の主張本日にはん晴れ

琵琶で聞く敦盛最期雨止まず

餅を食う仕草 枝雀をふと思う

河内長野市 植村喜代

誤作動なく二〇〇〇年の初日の出

先ずありがとう二〇〇〇年ありがとう

一人では何も出来ないありがとう

初日の出どこかへ冬を置いて来る

戦争も過ぎて忘れぬ二〇〇〇年

東大阪市 森下愛論

過去すべてたたんで反省しています

軽い酒重たい酒と泣き笑い

老いひとりぼんやり飲んで生欠伸

確かめたいのち浮沈のワンカップ

深酒へ闇から届く風の私語

東大阪市 谷口義

黙っていることが私のためになる

お正月前の十日と十日後と

頭から老けて足腰から弱る

さよならを言わずに逝くも思いやり

挨拶が殺し文句になっている

東大阪市 指宿 千枝子

夢ふくらむまろき文字よ2000年

白川郷正月二日雪景色

バスで行く正月三日能登は雨

金沢の菓子金粉で化粧して

父在りて母在りて飛ぶ故郷へ

東大阪市 北村 賢子

手の動きあなたのこころ聴こえます

義理人情再生したい2000年

まなうらに朝日を拝む亡母が居る

通い慣れた街路樹の四季忘れない

風紋が砂のドラマを物語る

東大阪市 安永 春

夢と希望たと抱いてる弾んでる

笹もろて美人の笑みに見惚れてる

スニーカー春だ春だと唄いだす

古希なんてはずかしながらまだ女

出来たてのお餅のようにこの想い

大東市 児玉 蛙

梅雨晴間歩き溜めする万歩計

喜怒哀楽抱き風いでる母の海

いつもの事一日おいて腹が立ち

ネクタイをとれば四人のパパとなり

頂点で女なかせる観覧車

交野市 山川 日出子

六十路会喜怒哀楽の自己紹介

松竹を引き立て役の梅の花

青い目もおみこし担ぐ平和な世

ロボットが新聞配る新世紀

アメリカで始まりました宇宙葬

吹田市 山本 希久子

旅人は足早に去る駅広場

春の光無口な少女頬染める

敵に塩贈って鉛を返される

昼会席女の友情あたたかし

奇想天外詰めて私のダンボール

吹田市 古川 喜美子

良い姑を演じすめに囃される

伸びをして隣のみけに逢いにゆく

裕福な家並のつづくみかん島

起きあがりたくないときもある達磨

少しぐらい飲みほがらかなり給え

吹田市 瀬戸 まさよ

冬の鍋ふぐカニ鴨に舌鼓

ピンと張る冷気がいいね今朝の霜

アーと鳴きカーと答えている鴉

小三に賀状を強いる親の義理

少子化に子は四人です胸を張る

吹田市 大谷 篤子
逢えないでグラス一つのクリスマス
冷えた手の内なる思い冷えていず

悔しいがハードル下げて悔いはない
大安に新たな喜劇はじまりぬ

写真からはみだしそうな孫五人

茨木市 藤井 正雄

箸袋二次会賛否聞きにくる

絵筆持ちバス乗り継いで岬行き

ジャズバンド楽譜繰るのもジャズ調子

扇子悠々勝ちを確認する碁盤

ワンルームズボンのままで寝る疲れ

茨木市 井上 森生

パソコンを味方に気分は若い日々

香港のベビーが笑うEメール

シルバーはパワーじゃなくて床しさよ

嘆かないで母よ長寿は大仕事(祝九十五歳)

過去未来不安消せるかミレニアム

高槻市 井上 照子

ヒヤシンス水だけで香をふりまいて

受験の子夜食に母の願い知る

同じ道歩んだ友の笑う頬

故意ならば許さぬ女強くなる

五十年息ひそめてた国旗出す

高槻市 傍島 克治
荷を抱え妻よまだかと試着室
追加した銚子が効いた頼み事

お詣りもせず近道だけの法善寺
御しやすくみられ仲間には誘われる

亡母さんゴメンネいつもついでで墓参り

枚方市 前 たもつ

期待され磨いてみるか六十八

半世紀夢ありがとうスヌーピー

天知る地知る携帯も知っている

メモなどを取らない母の記憶力

トップ集団風よけにするゆとり

枚方市 栗林 光夫

少しずつ余命を蓄る秒の針

あっけなく聖樹の飾り外される

ようやくと年を忘れた三代会

切抜きの裏に震災記事があり

自分史に死ぬ瞬間が記せない

枚方市 海老池 洋

襖とも実も葉も落とし枯れ木立

知らぬ間に梅綻びた流行り風邪

趣味ひとつ鬼にもなれず虫のまま

急がせる返事怪しいなと思つ

空元氣だすに疲れた影法師

枚方市 寺川弘一

欲しいものありませんかと医者が言う
図書館に屯している老人力

天寿まで世界抜けて行く余生

ジャムの蓋開かぬと母が僕を呼ぶ

仏壇を開くと母と結ぶ橋

枚方市 森本節子

正月はお休みしましょうフライパン

晩三吉 大梨一つ三日がかり

つばを押す湯舟につかっている時も

小鳩たち一度古巣を見において

丹精した花を毎日目でなでる

守口市 結城君子

Y2K黄薔薇背にして語るなり

ふたりとも無言モツフォ聞く恵み

初鴉とはいえ警戒心とかず

首すじへ小寒の冷えつきささり

二〇〇〇年のぞいた命大切に

寝屋川市 平松かすみ

尻とりで試されているおばあちゃん

ガード下日記つけてるホームレス

クロインの若い私がおほくなり

若いなあ川柳天国のビデオ(1984年)

友偲びここに幸あれ弾いてます

寝屋川市 高田博泉

妻までがインターネットに凝っている

ハイボール小さい声でたのむ席

蝶々が飛んで来たので声ひそめ

京ことは柔らかそうで刺がある

頑張っているのに運は逃げてゆく

寝屋川市 堀江光子

いつ見ても耕していた故郷の父

清流に後継ぎのない網を打つ

逢うてきた娘と知らず食はず待ち

からかわれながら仔犬の必死なり

道草の癖抜けぬまま年重ね

寝屋川市 岸野あやめ

お神籤に増長慢は不可とある

緊張をすると東京弁になる

自棄ですか人生つまりゲームとは

止められて開けずに居れぬ玉手箱

デパートの初売りで買う日記帳

寝屋川市 富山ルイ子

二〇〇〇年昨日に代るアンビシャス

勢いがついて何もかもうまくいく

葉ボタンをポインセチアが駆逐する

むかしの顔なつかしい声テレビから

友米寿古稀の私が祝いする

龍がうろこに金粉をつけて来る
寝屋川市 柴田 英壬子

乾燥のななくさ七日を待つ余裕
福笹をおこがましくも買った悔い
鏡開き小もちバラバラおぜんざい
三寒四温さくらの枝が染まり見ゆ

寝屋川市 酒井 勇太朗

同じ夢見たと女房怖いこと

ミレニアム何度聞いても意味不明
こつこつと貯めて骨肉修羅の種

お賽銭はずんでみたが同じこと
府知事選面子張り合う府民無視

寝屋川市 籠島 恵子

相槌は誰も打たない母の愚痴

改まる服も着ないでお正月

平凡な朝のリズムを大切に

ゴルフバッグ何が入っているのやら
衝動買いの服をこつそり捨てている

寝屋川市 太田 とし子

泣く子居て笑う子が居て立役者

ゆずの湯に浸るからだが今日はある

花吹雪心の寒さ消して春

遠くにも近くにもある向う岸

龍の風お供している奴風

頂点を極め足元確かめる

叱咤激励背に受け上る八十路坂

臥薪嘗胆やつと恵みの春が来る

勤勉の汗を神様見逃さず

水鏡見ながら流す暗い過去

豊中市 吉田 あずき

少しずつ春待つ心柚子の風呂

ハッピー着たホテルマン掲ぐ餅の味

思いつき笑ってみたい千年紀

唐土の鳥にナイショ七草三草だけ

失った夢探してる万華鏡

豊中市 田中正坊

寒椿 孫が二十になりました

二十年ぶりに友から来た葉書

冬の雨混み合っているクリニツク

手帖にもクイズにも載る私の句

今年こそしっかりするながんばるな

豊中市 安藤 寿美子

顔見世の季節風邪など引いとれず

ルミナリエひとことながら電気代

花と愛とそえて柩がとぎされる

“悟郎”と言う大きな呼名もう聞けず

また派手にバチあてはった仏さん

寝屋川市 北岡 波留吉

豊中市 井上直次

損得に聴くなるのも年金者

諺の裏と表の人の知恵

まだ来ない賀状へよせる或る予感

謙遜の影にちらほら自己顕示

半信半疑 信に傾くわが願い

豊中市 岸田知香子

再会が別れになった計の知らせ

二〇〇〇年何事もなき初詣で

街の角端金にて億の夢

マンションの氏神竹林天神社

蟹食べに安いツアアは足ばかり

豊中市 湯浅馬洗

渡し守り一服せずに先に逝く(師友原田君を悼む)

点滴台風車つけられ足慣らし

病み上がり年金危機の本を買う

妻の眼が背中押してる病み上がり

人間の愚かさ弱さ知事迷走

豊中市 滝北博史

やせてやせて今日がラストか思う日々

学生の日昇竜館という下宿

子宝に恵まれぬ娘が陶器婚

人生に無駄なんかない日向ぼこ

逃げるとき持って走れるバイオリン

池田市 藤井計光

耳打ちに敵動揺の素振り見せ

先生の卵と言われ大志抱く

七変化山は海より彩を為す

自堕落な娘と母になじられる

厳格な父のやさしさチョイ不安

箕面市 唐住実

とは言うて行方は運にまかすのか

行の字を様に直して欠席し

約束のない日彼女もそこに寄り

遅れても怒れない程来て欲しい

平和でも君死にたまうことなかれ

箕面市 椎江清芳

父の皺深さに残る浮き沈み

公園の花壇が匂う四季の詩

院号を貰うと仏重くなる

寝たきりでいても耳まで病んでない

気まぐれの雨に泣いてる花時計

箕面市 出口セツ子

成人式親のリストラもう間近

器には入らぬ将来が面白い

節分に私の鬼を労ろう

桃の風未来に期待をしてみましょう

新世紀へジャンプ練習しています

大阪府 榎山隆盛

正月に咲かす三月号の花
百態の恋百様の雲にのる

初空へ古希を忘れた背をのばす

ビールまで別ればなしに気が抜ける

高らかに鐘を鳴らした千年紀

大阪府 米澤俣子

あの頃は一升炊いた大家族

誤作動の続くわたしの勘ピューター

千年後今の日本があるだろうか

世の流れ逆らえないと列に入る

文明の利器扱い切れず逃げている

和歌山市 福本英子

悠然と初春を迎える池の鯉

時差ボケの程度で済んだY2K

アンカーの櫓へ託す来世紀

パソコンに夢中次世紀担う子ら

青春を賭けるシドニーの厚い壁

和歌山市 牛尾緑良

過労死をするほど働いてみたい

草いきれ私の息を確かめる

鉦を打つひたすらに打つ生きるため

注連縄の故郷は遠いとこにある

反省をするにも酒の力借る

和歌山市 榎原公子

古いとお思いでしょうがケイティシマイ

死語になりそうもないです嫁姑

五体満足なれど錆びつくここかしこ

暖冬に腐る速さよ言の葉よ

成し遂げて尚寒風の心地よさ

和歌山市 細川稚代

自己中心世界は僕のためにある

三ヶ日過ぎて糠床手入れする

蓋をした噂チヨロチヨロ洩れている

処世術うまくて本音聞き出せず

一杯のしるここだわり消えてゆく

和歌山市 堀畑靖子

欲ばって仏とはぐれそうになる

紀の川の四季折折の詩が好き

熟年の私が描く未来像

残り福貰いに風の街に出る

手のかかる大人ですなと子に言われ

和歌山市 福井桂香

召されし師聖夜の星となり給う(智水庵先生逝く 3句)

想い出は和歌浦の波 加太の磯

雪よ降れこの哀しみを被うまで

愛きさら夢きさらスノー・ダンス

遊び疲れて薔薇のつばみという玩具

和歌山市 桜井千秀

切り抜けた修羅場へ鎧脱いでくる
ひいばあちゃんになつたら何と呼ばせよう
焚火した道舗装され有料道路
散り立ての山茶花何か言いたげな
受話器切つて舌打ち思い切りしよう

和歌山市 楠見章子

モーニングカップに挽ぎたてのニュース
じゃんけんをしている里の影法師
拾つたら届けてほしい胸のネジ
駅の蕎麦清清とした空の味
ブランドーひと匙紅茶でおめでと

和歌山市 山根めぐみ

真つ直ぐに理に落ちてゆく滝の水
味方ゼロ大きな海に浮く私
誤作動がおきて私のヒステリー
ちまちまと閉めた財布を叩く暮れ
ダイエツト聴けば強固な意志である

和歌山市 池永正 匍

貝殻にロマンの果てを思わせる
実言えば玉手箱にも請求書
唄だけは残つてほしいかえり船
コンクリで化粧をされた海岸美
退屈な日は黒くなる雑記帳

和歌山市 山口三千子

庭のレモン採る手をトゲが刺しにくる
タクト振る伴侶遣り繰りなど知らず
風花を眺め抱いてる膝小僧
心の迷いふつ切る為に草を引く
たとう紙を開けば亡母の香りする

海南市 谷口義男

パソコンと句作三味老いの日々
世間体だけを飾つて本音出ぬ
スーパのチラシ比べるやじろべえ
総理だけ責めても国は良くなりぬ
老人の医療費アツプ殺生な

和歌山県 中後清史

すり傷を負い生きてゆく冬帽子
甘い汁吸つた男の長い冬
抗争に見る宗教の根の深さ
車座が好き人間が好きだから
残り火がありシクラメン赤を買う

和歌山県 鈴木政子

お受験の心配もない保育園
大学に入れば私遊びます
燃え尽きてデモシカ先生登校拒否
法の華私の足裏五百万
小空港一機もない広さが好き

奈良市 米田恭昌

杵音も途絶えて久し過疎の村
とりあえず乾杯をする俺お前
りストラの家族離散と言うドラマ
どん底のものがく虎にもある闘志
訥弁の熱氣に会議の風動く

奈良市 天正千梢

誘い文句旅の楽しみ倍になり
頂点のキャリアであぐらかいている
お局に減私奉公求められ
貧乏を看板にして吠えている
七草の香りはなちてお粥たき

大和高田市 岸本豊平次

夫婦茶碗小さい妻が六十キロ
九十歳勝手に天寿と決めないで
二千年バケツに水を汲んで待ち
正月は塾も休むか孫が来た
子はファミコンパパが風あげ懐かしみ

大和郡山市 坊農柳弘

三浪の息子へ朗報サクラサク
猫柳わたしの春を連れて来て
伊豆巡りもう春なのか椿燃ゆ
ミレニアム屋久杉立派な千年樹
木守り柿カラスも遠慮してゐらし

香芝市 大内朝子

小春日を小鳥気分のスニーカー
夜まわりの声がひとりをあたためる
ボーナスの娘に連れられてシヨッピン
髪染めのおしゃれ息子の手がぬくい
限りなくやさしく雲が夕焼ける

京都市 都倉求芽

誤作動は放火いじめに人殺し
百人一首恋歌ばかりとった頃
好きな歌手だが鼻濁音出来ぬ
後ろから馬かとよければ厚底靴
犯人は正月なりき尿検査

京都市 山海友熙

真つ暗な世界を歩く歳の暮れ(事故に遭う5句)
生かされて闇の出口を見つけたり
生きていた伴せ梅の香に酔いて
一人来てひとりで帰る梅の道
神様の横と信じて強くなる

京都府 稲葉冬葉

敵の数だけネクタイを持ってはる
直感で惑わず男子トイレなり
初夢になぜか枕が濡れていた
最終の学歴問われ父母思う
松葉杖わが身となればいと哀し

富山 島 ひかる

雪国に雪の無いのものと淋し

コーヒーを飲んで夜なべの境に入る

あぶり出し好きの二文字に苦笑い

手をつなご大きな丸が出来るまで

保育所のねんねの唄をせがむ孫

富山 酒井 輝

誰からも好かれて罪を撒く笑顔

丁寧過ぎる無気味なアリガトウ

何時からか妻に余生を育てられ

一人ずつ棲むかも知れぬミレニアム

名水も老いた喉には刺がある

富山 増田 紗弓

愛情に流儀はいらぬ祖父の膝

掃除機が迷ってしまう子供部屋

二階から出入りした雪子に教え

階段で父の機嫌がすぐ解る

在りし日の言葉が漏れてくるノート

可児市 板山 まみ子

眠らずに今年を思い返し除夜

新年もジャージで飲みにやってくる

押し戴き拌んで食べるトロの寿司

餌台のメニュー日変りバイキング

まだ二歳鉄道マニアの仲間入り

富士宮市 渥美 弧 秀

学校唱歌抜きの「ジュニアのど自慢」

青春の「月光の曲」弾き直す

年金の歩幅乱れる交際費

妻の愚痴いつもの如く聞き流す

亡父の倍生きて老後の倅せは

静岡 島田 漠 脊

様々な龍が舞い込む年賀状

寝たきりの爺が笑った龍の新春

龍の絵の風が一番よく揚がる

SLの煙が龍に見えてくる

健康は一つ病気は万とあり

横浜 菱田 満 秋

ガンダムのままで老けたらどうするの

また干物かいな隣の換気扇

両眼が入り達磨の役が終え

嘘つきが白手袋で握手する

ハンドルの遊びを妻に言いよかす

横浜 清水 潮 華

人の子と言う弱点を握られる

変わり映えした気にさせる美容室

皆終えて眼鏡を磨く除夜の鐘

処分また快感暮れの大掃除

初詣ですませば用のない日長

横浜市 菊地政勝

八王子市 播本充子

風と独楽忘れ形見の風物詩
風揚げに一家言持ち孫を連れ
陽だまりの縁側ひとり癒しの茶
お互いに先に逝くなど声をかけ
ばけ味に惚れて骨董店めぐり

横浜市 山下省子

佐倉市 吉田笑女

一年の集大成か偏頭痛
丸顔にジャストフィットの低い鼻
川柳にだけ本心をさらけだす
口答えすると首筋まで寒い
猫舌もかに雑炊を吹いている

川崎市 和泉あかり

大宮市 八田敏

午後の雨スーパールの灯が浮いている
妻にみな知られてるよな眼を感じ
ウォンテッド言葉のつまる福袋
向きあえば眼鏡に眼鏡の顔映る
よく解らないまま拍手させられる

町田市 竹内紫鏑

仙台市 川村映輝

山城の跡 乃木さんの詩碑似合う(岩殿山頂)
歩こう会 校舎のトイレ予約して

(メガフロートのテスト
施設見学 3句)

溶接技術が生むフロートに離着陸
湾に浮かべて微動もしない滑走路
通船は揺れ見学団は救命衣

小正月過ぎて抱負が見えてくる
受話器からはみ出している孫の声
みな同じ条件なのに恨み事
自らの他には怖いものがない
来なかった賀状戦力外と知る

デパートの客とぶつかる年の暮れ
ほしい物山程あって買いそびれ
嫁と行くデパート今日も自腹切り
新年は我が家の嫁も里帰り
留守中の料理は孫がしてくれる

二千年迎えて矢張り妻の世話
平成に慣れず昭和の歌に酔い
こんなにも澄んだ富士あり冬の朝
孫の初春ジーパン姿バドミントン
ベランダは真冬も春の花並べ

線香を配って議員を煙にする
転ぶから動くなこれは致命傷
飲めぬ酒息子が来ればお相伴
成人式馴れた手つきで煙草持つ
老人クラブへ遊びに行くほど暇がない

弘前市 富士慕情

大空へいよいよ巢立つ子の決意

鳶の子とぼうとぼうと風を待つ

白鳥のあの子も白く旅立ちぬ

名残雪ひとひら頬へ溶けにくる

ブランコを漕いでいるからもう押せぬ

弘前市 小枝 ふさゑ

風の音雪の音聞く不眠症

物忘れ互いに庇う昨日今日

男の子だけでも雛は飾ります

賑やかなちらしが重い朝刊紙

年金が思案しているディナーショー

弘前市 一戸 ツネ

龍門の階段にある仏の灯

陽光の雪の晴れ間の地蔵さま

生き延びた愚者も頂く仏の灯

春日差し地蔵の御頭ばかり出る

南無南無のリズムで落ちる紅椿

弘前市 岡本花匠

しばれ雪きりきり泣かす帰り道

たと紙に愛憎包み雪の嵩

ひたむきな愛を灯して雪椿

わが業も夕餉に煮込むじやっぱ汁

亡母の忌や桃の節句と賑賑し

弘前市 蒔苗果林

夫婦仲ととのえまして餅を搗く

人知れず成りもせぬこと励んでる

春の街に出会ううまず女瞳は乙女

散歩径遠出するほど花可憐

見よ春よほんのり化粧胸の隅

弘前市 櫻庭順風

球場がないけど地区の代表に

遠征のうれしい悲鳴聞こえぬか

藤井寺マウンドの距離遠すぎる

逆転だ一つのチャンスものにして

心に残る校史に残る藤井寺

弘前市 小寺花峯

逆転を許し孤独な足の裏

綿雪に津軽の春を嗅いでみる

悲しみの話が笑う通夜の席

外孫の指先似てる独り言

少年のそこには風がヒュルヒュル

弘前市 相馬銀波

風呂敷に包んで嘘を持ち歩く

一步引くだけが限度の自己主張

理想論酒はだんだん辛くなり

万策が尽きて冷たいにぎりめし

有難うばかりがふえた床の母

十和田市 小笠原 敏 人

雪掻きで隣が半歩近くなり

意地悪な雪に明け方見舞われる

出来が良く家を離れて行く子供

健康の二文字惑わす歩数計

ラジオから流れる相談我が身かも

十和田市 阿 部 進

男なら炎のように燃えて欲し

迷惑をかけないように生きる古希

過去たどる旅をします母連れて

想いやりのかけらも見せぬ現代っ娘

年かしらたたみのへりへけつまずき

黒石市 相 馬 一 花

上戸から下戸が生まれるDNA

大雪の日も厚底の虚栄心

泥酔の夫にそっと抱き枕

ご主人に留守番させて舞踏会

ピニ本を見て軽くなる胃潰瘍

砂川市 大 橋 政 良

腕組んでゆくのはこの世だけでいい

老いた蝶でも待っている花もある

明日の絵にまだふさわしい色がない

なんとなく聞く日記に火の匂い

一生に一度拾って見たい運

北九州市 梅 田 宣 司

芯のある男と交わす酒の味

新刊の香りを抱いて見舞行く

影法師こちら辺りで別れたい

二〇〇〇年羽子板もなし独楽もなし

唐津市 宗 水 笑

夢多きわらべ心に龍は住み

平凡な暮しでよいと初参り

よせ鍋の箸は休まぬ国訛り

八起きめまではたつぷりある余生

広島市 森 田 文

枯葉いま海に流れがあるを知る

新しい暦へ夫婦乾杯す

大きなドラマがあった無人駅

ささやかな見栄ネックス裏返る

倉敷市 小 野 克 枝

よく叱る医者に命を看視され

忘れずに今日の汚れは今日洗う

順番が近付く無芸席を立つ

波の音あなたにだけは判る音 岡山県 大 石 あすなろ

朝の計画五分もすればもう変る

回転ずし遊びごろが盛つてある

幸せの形に伏せる対茶碗

化粧品サンプルだけで足りてます

岡山県 福原悦子

昇竜 新世紀へと飛躍する
快活な嫁で明るくなる茶の間
想像をえがく確かなペンがない
城下町裏道昔のままでいる

松江市 浦辺静江

久しぶりでした楽しい日が暮れる
出雲富士夕陽眺めて御満足
何となく落着かせてる昼下がりに
季節毎 袍を替えているおしやれ

出雲市 石倉 芙佐子

耳当てで椿の話聞いてみる
無風地帯 気弱な花が咲いている
掌の小雪私の熱冷ます
沈黙の椿言いたいことばかり

出雲市 小白金 房子

ほどほどのくらし丸める鏡餅
黒豆の主役めでたい艶をもる
生かされて毛筆太く新春を書く(夫七十七歳)
箒の目靴跡しかと新春を踏む

島根県 伊藤 寿美

蓮如忌や六字名号掌を合わす
冬籠り老人力の本を読む
同居はしたがトイレも風呂も釜も別
緊張と緩和 枝雀在りし日のテレビ

鳥取市 武田 帆雀

2000年祈る竈の火を熾す
雪を掻く学童さまの通り初め
雨降ってふって乾かぬ会議室
ボーナスを零さぬように一週間

鳥取市 富山 檳榔樹

二千年過疎も明るい常夜灯
別れても融通無礙は親譲り
紅葉の手温もり包む母の園
青春の血が騒ぎ出す龍の年

鳥取市 近藤 佳子

仲よし小よし夕陽があかいふるさとは
すり減った靴に家族がささえられ
これだけは譲れぬことが女にも
ぶらんこを漕いでひととき過去にのる

鳥取市 前田 一枝

小さくても我が家の城がぬけ出せず
ピカピカの車に乗れば永久の旅
根も葉もない枝に残る花一輪
あけて待つ席に振られた娘が座る

鳥取市 山本 益子

好奇心 縁切り寺を覗きたい
魔除けには先づ赤鬼の絵を掛ける
ちよっと待て駆込み寺で目覚めよう
ストーリー 鬼の仮面は剥がさない

倉吉市 最上和枝

鳥取県 上田俊路

ブランコに揺れて膨らむ淡い恋
淡雪が解けたくないと思っている

大物の浮気ガンより命取る
手さぐりで五七五を捻ってる

倉吉市 米田幸子

地方色豊かな雑煮召し上がれ

ありったけ資産つかって逝くつもり

日の沈むまでに峠に辿りつく

温もりの伝わる飯にありついた

鳥取県 谷口次男

羨望と嫉妬 遠くて近い仲

借金と預金は近い仲なのか

夢のある話をしよう二〇〇〇年

共生の微かな鼓動二〇〇〇年

鳥取県 乾 喜与志

生かされている本日に手を合わせる

水平線の記憶がもどる卒寿坂

成人式の日の丸は静かだな

父逝って七十年は遠からず

鳥取県 乾 隆風

ていねいな賀状を二枚もいただく

九死に一生ありがたや二千年

歯が抜けて念仏の乳のんでいる

万国旗彩るサミットを望む

新世紀核無き地球期待する

人間の弱さが期待くり返す

ミレニアム迎えシステム変えてみる

いよいよとなれば鼻薬が効くだろう

鳥取県

石尾 かつ乃

つぎはぎの言葉じんわり身に沁みる

恐竜の住み家になったおもちゃ箱

景気よい声初せりの波に乗る

忘られた帽子ブランコまだ揺れて

鳥取県

國 森 武 子

多趣多才あるが信用されてない

淡い恋レントゲンにはうつらない

目を細め孫の手形を額にする

はつきりと三人の子に不足なし

鳥取県

西 川 和 子

この爪を赤く染めても絵にならぬ

淡水に生まれ潮風身にしみる

綾取りが大分上手になって来た

孫からの知恵を袋にまた一つ

鳥取県

近 藤 春 恵

汗と努力実って今日の椅子がある

プライドを捨てたら友が寄ってくる

正座して父は思案の腕を組む

成功のかげに内助の妻がいる

鳥取県 吉田 孔美子
パイパスに落ちていたきれいな包み
茶の本と癌の本とが残された

ゆっくりも出来ぬ銀行が閉まる
風呂ベッドゆっくりがいい一人が良い

鳥取県 山本 正光

正座して書いた賀状だ満足だ
今度逢うための笑顔が肝心だ
炬燵板今日も柳誌がのっている
予定表どおり動けて幸せだ

鳥取県 太田 幸枝

世紀末私のネジを巻きなおよす
新仏香の煙にむせている
車社会足が短くなりそうなの
我が道と車道ゆっくりネコ車

鳥取県 権代 康女

二〇〇〇年ぐっと大きな夢をだく
神飾り少なくなったトンドさん
血管に水一杯をついで寝る
病人をいたわるのにも金かさむ

鳥取県 幸家 單車

噂話が扉の透間から洩れる
はりきって一人芝居を演じてる
過去の海返せと抗議する漁師
大それた夢追いかけてはりきるぞ

曾孫へ母の笑顔は世界一
福笹はビニール福も迷うてる

一・一七 奇跡の生も五つ老い
わたしの味噌汁美味しいと自画自賛

神戸市 山口 美穂
木村 貴代子

一人住むこたつに誰を待つかん
先行きは思わず今の幸に酔う
幸せを感じ取れない子等不憫
サービスのタオルに銀行名を残す

神戸市 池田 善守

亡母親の歳に並んだ二〇〇〇年
二〇〇〇年三ヶ日とも非常食
天皇誕生日 日の丸二つ街に見る
寮生活してるみたいな老い二人

西宮市 門谷 たず子

倅せの余波に浸って老いてゆく
まっ白い頭と過ごす風邪三日
思い出の広がる駅も黄昏れる
精一ばいの背伸び明日が見たいから

西宮市 西口 いわゑ

満月の凄さ悪女に似たるなり
昼下がりに静かに夢の戸を開ける
義理で飲むお酒にしてははずんでる
山茶花がほっこり冬の陽に映える

西宮市 牧 淵 富喜子
仰ぐ目にルミナリエの灯亡友になる

ルミナリエ今人生のどの辺り
夕焼けの町で暮れゆく大晦日
何ひとつ変らず明けておめでと

西宮市 長谷川 淳
無邪気です五目並べで子と遊ぶ

子の歳へ戻ってみたい遊園地
間引かれた花みるからに口惜しそ

成人式親ごの汗が臭うてる
宝塚市 黒 台 伊佐武

枯らすまい心に水やり忘れまい
やるせない咲かずじまいの恋始末
鴉啼きこみ上げてくる片思い
補聴器と入れ歯をはめて老々婚

川西市 松 本 ただし
人間のせわしさ笑うざくろの歯

心まで煤けた塵の積もる都市
お人好しばっかり議論空転し
船場弁御堂筋から消えてゆき

三田市 北 野 哲 男
梅桜七十回も見たらしい

禁煙と決める二十歳になったから
河豚どうぞおあがりなさいませと雪
信仰の哀しみ戦争ばかりさせ

兵庫県 大 谷 幸次郎

大阪市 神夏磯 典 子

ホーホケキョ幼い声に拍手する
充実の余生宿題かかえてる
神様が下さった荷だ重くとも
ああ負けてよかった悔いをバネにする
大阪市 辻 川 慶 子

二〇〇〇年何事もなしおめでと
ファッションのタイトルで買う月刊誌
七草の舞妓さんたち始業式
期待とは遠いものなり陽が沈む
大阪市 津 守 柳 伸

帳尻が合わず夜更けの雨の音
類は友呼んで唄好き旅行好き
雪降らぬ兼六園の監視員
出棺の時刻瞑想する居職

大阪市 松 尾 柳 右子
要領よく立ち回ってる次男坊

見えぬ顔訪えば皆風邪引いている
寒風に検診覚悟の重い靴
温泉へゆこう行こうと冬を越し

大阪市 北 勝 美

向かい合う仏の姿真似てみる
真似てよし仏画に安らぐ小半日
陽の光浴びたかろうに厨子秘仏
点一つそこから拡がる大宇宙

大阪市 津 村 志 華 子

新世紀ゆつくり登る老いの坂
2000年わたしも小さな夢がある
どれ程を待てと言うのか花時計
旧い友年賀はがきで恙なし

大阪市 清 水 利 武

梅が咲き人の心に笑みが出る
玉のない眼鏡で芸をする男
盆栽の梅が客呼ぶ道明寺
しみじみと青空見てる龍の風

大阪市 寺 井 東 雲

世紀末怖い映画が続いてる
有頂天僕もその頃若かった
姿良しい声が出る鶴の首
一流のシェフの帽子は天を突く

大阪市 鶴 田 遠 野

仕始めた化粧で女嘘覚え
初雪に酒席を替えて飲み直し
去った夢浮かぶ車窓を消す朝日
ケータイはわざと忘れて出張し

大阪市 安 達 は じ め

適当な暗さに映える本尊
未来への夢掻き立てる入社式
羨望の的でハンサム落ちつけず
味の良いうどんに並ぶお昼時

大阪市 鈴 木 ト ヨ 子

難聴の母に内緒はやめておく
波風も覗いて過ぎる老いの部屋
亡母の空似愛しさつのる患者さん
粗大ゴミ行きたくないと泣いてます

堺市 黒 田 真 砂

床の間の竜に今年の願い事
新しい日記へ記す抱負等
病で暮れ病で明けた初日の出
新しい年へ挑戦初授業

堺市 宮 本 か り ん

ミレニアム生きてる証今日がある
四十すぎた息子へ飯のてんこもり
美人画へ眼鏡かけたりはずしたり
腕組んで男は何を考える

堺市 柿 花 紀 美 女

親が敷くレールに子が蹴躓き
白息の朝のホームの中にいる
生きているしとなった年賀状
輪になって先頭もラストもない仲間

和泉市 西岡洛醉

七十二歳地球自転へ歩を合せ
イヤリング孫大人への仲間入り
点滴に頼る命の遅々として
日溜りに善の話が古い囲む

岸和田市 原苑子

好評のお刺身と鰯手抜きです
人も家も期限切れから情緒出る
すみれ咲く庭の片隅陽の恵み
父さんが敬遠してる娘の夕餉

岸和田市 井伊東吉

老いること忘れてしまふミレニアム
ホテル界思わぬ繁昌ミレニアム
紅白の好きな歌手だけテレビ点け
元氣さが書体に見える年賀状

八尾市 宮西弥生

日が伸びた分だけ明日へ輝こう
憎しみも生きる力としてもらう
一筆がほしい賀状が多すぎる
仏画く安らぎもらう鬱の日日

八尾市 高杉千歩

ゆるゆると老いに傾く春眩し
春日や数珠離せない日が続く
零時三十分ニュースを眠る日課
鍵変えても不安が残る春の鬱

藤井寺市 楠昭子

あめ綺麗目に焼きつけてルミナリエ
朝食に野良猫時間通り来る
十日過ぎばつぼつゴミも平常に
黙もくと仏を彫っている世界

河内長野市 井上喜醉

七十路 愛のあかしは思いやり
喪服着た女色気を凍らせる
美しい地球でとことん生きてやる
天気図でダルマが踊る北の冬

吹田市 石原靖巳

今年また屠蘇を祝える古希の膳
新年の顔でたこ焼き食べている
龍の字に祈りを込めて書く賀状
足の裏撫でて阿漕な金もつけ

吹田市 野下之男

名前より顔見て欲しい福寿草
青春が山の写真に生きており
挨拶を返して記憶手繰り寄せ
記念日はハワイ旅行が隠し球

寝屋川市 江口度

銀髪をうらやましがるパーコード
消火には一番似合う象の鼻
なべ底から貧乏神が放れない
病院の義理は果さぬ方がよい

寝屋川市 森 茜

寒雀身を寄せ合うてふくれおり
ごんごん始発が通る新世紀
息災と言う幸せを噛みしめる
もう少し読み終るから生返事

寝屋川市 坂 上 高 栄

飾るものない私は笑顔だけ
騙されてやる親心子は知らず
まかしとき胸を叩いた程でない
グループを見れば我が子がよく見える

枚方市 二 宮 山 久

年賀状思いがけない知らせくる
転勤の娘夫婦と初詣で
ことのほか今年にかける二〇〇〇年
新春の息子の彼女にあう笑顔

池田市 栗 田 久 子

水の音遠野に遅い春がくる
ひたむきに逃げれば影が追ってくる
音も無く落ちた椿が苔に咲く
口紅の色を抱いてるシクラメン

和歌山市 川 上 大 輪

数珠繰って僕はお経を知りません
日記にはハッキリ書いた自己主張
暗黙の了解がある指定席
入り口も出口も本にありそくだ

和歌山市 垂 井 千 寿 子

不景気も戦時の始末に敵わない
新年だ皆ホッとするホッとする
運転手だけ楽しそう昼のバス
用心のペットボトルが場所を取る

和歌山市 青 枝 鉄 治

出血でちゃんとそろばん合うセール
お喋りの自ら掘っている墓穴
札束に立ちはだかれた正義感
職安に切られた首だ買わないか

和歌山市 田 中 み ね

誰よりも容姿端麗自己暗示
温泉の梯子で五体ふやけそう
うっとりと鏡へ見入る初化粧
天を指す龍の気概にあやかろう

京都市 小 西 未 佐 子

景気呼ぶ弁財天のミス京都
遠く居る娘の手作りのパンの味
約束も無いのに逢える赤い糸
上を見て下見て暮し日々過ぎる

愛知県 早 川 盛 夫

同姓同名ビックリしたなもう
句を詠んで一日たりと無駄でなし
家中の明り灯して留守みたい
ハイエナのように集まる店仕舞

静岡市 安本 晃 授
リストラで首を斬られた首の数

少年は信ずる道をヒタ走る

沈黙はやがて進歩の母となる

ぶらんこが止ると其処に母が佇つ

横浜市 小野 句多留

不肖の子自信をつけた初賞与

大晦日窓拭きぐらいやる夫

涙腺があらこちらでゆるむ歳

気持だけもらつて逃げてばかりいる

東京都 後藤 早智

会心の味で明けてく二〇〇〇年

残月や一番星と待つ初日

登龍門くぐり湯島の初詣で

金龍へ老若男女夢をのせ

弘前市 中山 雅城

エックスの二乗で夢が拡がつて

サーカスが去つた跡には桜散る

サスペンス青いインクが赤くなる

ジャンプ台夏は淋しく立っている

弘前市 今 愁女

ふろふきの大根口に合ってくる

おとこ言う女だてらは死語にする

老いたことみせずに逝つた支那の夜

なつかしき夜来香のチャイナ服

弘前市 須郷 井蛙

ゴミ処理に秘訣町村競い合い

来世紀 風も財産になるだろう

回覧板近所の噂も乗せてくる

伝言板凄いい記号が書いてある

青森県 西谷 大吾

片隅にボツンと温い記事が載る

凡人は凡人らしく草むしる

かまくらで子どもになっている父だ

津軽雪 鍋にくつくつジャッパ汁

予告

第六回

川柳塔まつり

平成12年9月24日(日)

於 ホテル・アウィーナ大阪

この句 この人

橘 高 薫 風

食器棚伽藍伽藍と哭きにけり

桑原 道夫

神戸の震災以来、食器棚はガラガラガッちゃん イメージが濃くなった。寺の堂塔の守護神は伽藍堂に祀る。がらんとした食器棚、何か感覚的言語的ひらめきに通じる音声の口当り、リズムが私の感性をそそる。

高校の教師、十六歳から作句をはじめたが川柳塔だけの井の中の蛙ではない。

二千年はらりと落ちた歳月や

舟渡 杏花

ミレニアムなどとハイカラな語で今世紀最後の年を呼称するが、うかうかと生きて来たのに突然そうだったまでのこと。千年紀などはらりと落ちた気分ではない。それより、わが過ぎ来し方の峻しい歳月の万感が下句に凝る。林はつ絵さんとは姉妹、電話の声の明るさと、この人の作るかぶらずしの味は、金沢の近江市場のより美味であるのが私の印象。

職引いた錨に消えぬ波の音 黒田くに子
草臥れ切つて砂浜に引き上げられた錨では

ない。まだ沖を見詰め身内に波の音まで奏で

ているのである。人間とて同じ、長らく苦勞した道の跡には未練がある。鹿野みか月川柳会に属し、中原汲香さん同様超ベテランだ。

お薬師の頬にやさしく浮く木目

原 さよ子

何処のお寺の薬師如来であろうか。仏像の金箔が剥落して木目の浮くのは折々見かける。道明寺の十一面観音も頬に木目が見られたように思うが、私が一月に拝した渡岸寺の仏像は、太股の木目が鮮明で、纏った天衣のさやぎのように感じられた。岸和田川柳会の創始者高橋操子さんの片腕として永らく活躍、皮細工を趣味とし、句柄同様な柄もやさしい。

黒髪のとゆとうなじ眠りこけ

岡本 久峰

「お祈りをする黒髪の長さかな 春集」の句と比べ時代の差を黒髪に見る。同じ長く美しい髪を持ちながら、現代は電車の中で眠る。時には寝た振りで居るのだ。赤ちゃんを抱いた人が前に立っても。この女性が子供を抱く

頃には、どのような世になっているのか。

久峰さんは七十九歳、道修町で薬劑を営む。靈芝を栽培し根昆布を採り、天然自然の薬品にも力を入れる。いささか頑固、否相当頑固。

逃げるとき持つて走れるバイオリン

滝北 博史

すわ地震だ、というときバイオリンなら持つて逃げられる。戦争へ持つて行けるなら選ぶ一冊はと問われたとき、歳時記であったり「出家とその弟子」であったりした戦時を思い出させた。近來眼が不自由との事。この句も、その現実での心理の陰影によるのだろう。

母の住む町を通ってきた時雨

野村 京子

晩秋初冬にかけて降る雨はうそ寒いものだ。「思い出し思い出し降る秋の雨」という俳句を読んだことがある。作者に時雨は故里の町を思わせた。母の温かい面影から、なつかしい雨と感じられたことだろう。

月原宵明さんとはほんのご近所、川柳だけでなく沢山のことを学ばれたに違いない。

出棺の時刻瞑想する居職

津守 柳伸

訃報を聞いても職業柄お見送り出来ない時、心から瞑目合掌する。せめてもの別れである。作者は居職に近い理容院の経営者、ずっと麻生路郎先生の御髪を整えておられた。

自選集

波多野五楽庵

小西雄々

輪廻転生信じ椿の香に座る
左手の愛情線が覚めている
歎異抄足袋のこはぜの擦れる音
釈迦の手の中で苦悩と巡り合い
生々流転酒一合で満ち足りる

宮口笛生

阿萬萬的

朝酒のこんなうまいお元日
正月を達者で空けた酒の瓶
眠られぬ夜は薬にコップ酒
食べず嫌いやつこ豆腐も湯豆腐も
のむ会が昼に晩にとうれしい日

八木千代

田辺炎六

縄にする藁ならうんと積んである
境界の縄は大きな顔をする
てのひらの縄の機嫌を大切に
荒縄で括るほどでもない私
そうでしょ縄も濡らしちゃ可哀相

民宿の人魚の酌へ歌も出る
巢立つ子へ期待の羽根が伸びなやむ
辞令一枚投げだすように左遷され
口論もあつて活気のある家族
埋れ火を風が誘つて蝶惑う
国債乱発いよいよ厳しい年が明け
ペットボトルの水だけ残ったY2K
景気好転などと強気でいる政府
知ったかぶり ふっと気付いた隙間風
コントにもならず忘れっぽい夫婦
生きている今なら無理も聞いてやろ
ナツメロに酔うて若さと呼んでいる
目刺しよし さきいかもよしキャンプ酒
口下手の男は軽く見られます
結果論自分を叱りつけてロン

土橋 螢

昇つたら降りるところがわからない
私を招く仏がいらっしゃる
背を押すのは愛ですか憎ですか
春宵の催眠術にひっかかり
枯れた真似して来年の芽ごしらえ

榎本 吐来

血糖値酒から酎に切り替える
イヤリング地味な女の自己主張
古稀の顔ずらり並んだクラス会
名前出ぬ友へのさり気ない笑顔
懐かしい車窓の景よさようなら

斉藤 昴

厚底の靴よ目線はどのあたり
胸を打つ一言でした日本晴れ
三味線の音が舞うてる吹雪ます
青空に風のいのちを遊ばせる
人吞んで山は信仰深くなる

月原 宵明

よく見れば悟った顔の冷凍魚
競うのと思案するのがある蕾
足跡を子や孫は只見てるだけ
洗い髪背中で夫指図する
カターの次男と会える後二年

高杉 鬼遊

長生きした甲斐があり記事になり
枯れ枝も蕾んでからの梅の花
寒くとも出掛けるわけの診察日
ご用心この世に悪の限りなく
平成ロマンすこしばかりの酒を召し

田口 虹汀

いい母をなくす 私は初年兵
三枚も有った賀状の当りくじ
ど偉い席についた袴手入れする
TVでも御晶履様の力瘤
善し悪しは無用二人で暮す幸

藤井 明朗

介護保険遠くに聞いて趣味に生く
長寿頂いてありがたく九十の春
冬木立春を呼び合うさくら土手
鳥は春を呼び別れる渡り鳥
春近く会いたい人を待つさくら

正本 水客

陽の当る山をみていて心たる
宿の下駄橋わたる音聞いている
雨の家並どこまでつづくバスの窓
山道の花右に左にいそがしい
せかせかとあいさつをしてしめくくる

哀しみを屋根裏に積む藁囲い
次々と悪をあばいている晴れ間
葉桜の海から羽化が始まった
統計数字に揃み付く縄目
父も木馬も青空を持っていた

林 荒 介
木 村 あ き ら

荒波を越えて男の貌になる
日溜りの地藏さんにもある笑顔
波風を立てぬ気配り三世代
森消えて詩が聞こえてこなくなり
片意地を張って冷や飯まだ続く

川 島 颯 云 児

はや傘寿肩で風切る夢もない
泣き顔は見せぬ敵にも味方にも
言い切った後で怪しくなる記憶
また一つ生年月日が重くなる
万更でない気にさせる褒め言葉

石 川 侃 流 洞

一大事アワアワで通じない
濁り酒舌をとろかす罌を持ち
ゴミ置場もう出回った非常食
厚底ブーツ月面歩行しています
真っ直ぐう突進蟹のへソ曲り

背筋まだ若い明日の靴磨く
順調な日課時々物忘れ
穂先まだスピード感のある硯
表には出さぬ苦勞を知る指輪
冬の雨友の訃を知る死亡欄

恒 松 町 紅
黒 川 紫 香

大阪の人でんなあと懐かしむ
一ミリの誤差を追求する学者
食うて寝てチョンで生きてる幸せさ
柳友がつぎつぎと逝く首筋よ
園児から児童に代わり春となる

西 村 早 苗

別れからいまなお続く花粉症
歩かねばただ老いていく掘炬燵
結論は心配したのが無駄のよう
忘却とはこれかもうすぐ春なのに
お見事と喝采弓の矢真ん中へ

舟 木 与 根 一

雲を起こし尻尾はかくす昇り龍
分校も廃止か過疎の一等地
食べ物のうらみと丁度反抗期
安月給故にリストラから外れ
お茶漬けを食べる茶髪に納得し

藤村 女

明日の夢えがけばはかどる銀の針
言いたい事すかっと言うて気も軽い
紅椿ボトリと落ちて目まいする
つぶやけば心の届く星である
思ひ出の夢があるから生きられる

弘津柳慶

妻の愚痴軽く笑顔で聞き流し
やっとな芽が出かかったのに踏みつける
酔いが回って本音を全部さらけ出し
手拍子を合せて会場盛り上がり
サラ金で競艇場へ入りびたり

野田素身郎

二〇〇〇年期して禁煙でもしよう
可も不可もなく迎えたお正月
酔いしれて一句も得ずに三ヶ日
寒に入りいろんな持病現われる
暦では明後日から春ですよ

金井文秋

生かされているのがしんどいとも思ふ
衰えた足を感じた万歩計
お札肥え鉢は催促せぬけれど
渡り鳥はいいなパスポートが要らぬ
理容師を泣かせた髪も今は禿げ

遠山可住

用の無い膳まん中に置く絆
一枚の野心九十の宝くじ
いい酒をもらい一風呂浴びて来る
ブームとや大和撫子変りたり
春よ春翼下さい花の風

工藤吟笑

荒波に江差追分溶けてゆく
旧姓で呼ばれ和やか同窓会
観客を煙に巻いた売り口上
野仏の笑顔に曳かれ寺詣で
コリもせずまだ夢を追う宝クジ

堀端三男

大正一桁の希望世紀の変わるまで
二千年までの目標達成さてつぎは
ミレニアム婚 現代っ子も験担ぐ
誤作動へ用意した水取って置く
丸五年希望の灯モニユメント

越智一水

世直しへ光っているぞ龍の玉
世直しの太鼓それなら俺も打つ
生かされて生きてきれいな花咲かせ
物よりも財より笑顔の人が好き
ご先祖に棚田守って背かない

二 宗 吟 平

無人駅玄関守る水府句碑

遠慮すな今が一番わしゃ若い

会えないと知って居ながら墓詣で

町中でひょっこり合うてコップ酒

師匠ただ首振るばかり直されぬ

芳 地 狸 村

欧風のつくりがヤングの新名所（ヘイサイド・モール 3 句）

横文字の案内板が馴染めない

あちこちに愛のベンチのバルコニー

ジープが似合う傘寿の山参り

初福においでと戎の旗のぼり

野 村 太 茂 津

ちぐはぐな阿吽で寒い花開く

真情が籠る訥弁澄んだ眼だ

訥弁の主役が似合うお人柄

陽当たりが悪いが温い老一家

武士の血を引くか飽くまで自己主張

西 田 柳 宏 子

約束は覚えているが日を忘れ

老化などしてない筈だがポカ許り

再会の喜びタイムカプセルから貰う

ミレニアム二〇〇〇へカウントダウン無事

順風満帆阻む黒雲待っている

小 林 由 多 香

恵まれた暮らしへ早い日が沈む

敵味方迷彩服でだまし合う

正月はゆっくり飲んで食べて寝る

大根の白さ百円市なごむ

消防車でも火の車消し切れぬ

板 尾 岳 人

神様にいつも相談しています

母に逢う約束をしてお水取り

お水取すんで抱かれた水の刑

閻伽井屋の水に潜んでいる恋歌

冬眠の中途半端な男傘

河 内 天 笑

採血採血 病院は吸血鬼

病院でくらすと髭がよくのびる

国産の大豆に会えぬ春の鬼

おとなしい面つけている怖い鬼

ある出会いからつぎとひらく運

『なにわ川柳—この一句』（復刻版）

橘高薫風著 B6判194頁 1000円

川柳句集『銀海』

樫谷寿馬著 B6判上製本154頁 1500円

在庫少々あり。申込みは川柳塔社事務所まで。

本田恵二郎

東野大八

「川柳という川は広々として澄んでいる。義理人情や浮世の美醜をおおらかに呑み込んで笑みをたたえている。そこで泳いでいる人達は、職業も年齢も超越して、潑刺と楽しうである。誠によき眺めである。

平泳ぎで淡々と泳ぎ続ける人の姿は落ち着きと安定感がある。さても忙しそうにクロールで飛ばしているものもある。それも面白いがなかにはあせているのではなからうか、と思えるものもある。ひどいのは気が狂ったみたいに支離滅裂な泳ぎ方で得意がってみたり、反骨精神的な泳ぎ方で虚勢を張るものも居る。はては岩に衝突して自爆したのも居る。

いつとはなしに、静寂を取戻して、まことに好ましい泳法を発見しているものもある。そして川柳の流れは淡々として流れ続けている。

足癖の悪いお人が先に履き 誓一

句主は最初に座五を（替えて去に）としてみたが、何か物足りなくて考え込んだ。そこで発見したのが（先に履き）である。一応これで出来たようだが、もう一度踏み込んで考えてみようではないか。これは説明的な表現を川柳的に表現しようとする努力である。」

こんな調子の恵二郎の「初歩教室」である。この初歩教室はなんと十六年間に継続して掲載し続けたとある。

この最終号で彼の「あいさつ」が載っている。

「昭和四十四年度から五十九年度まで十六年間、即ち一九二二カ月初歩教室を担当させて頂き、その間四百四十数名の御参加を得ましたことは、私の川柳人生の得難い修練道場となり、また楽しい思い出となりました。長

い間、血の通ったおつきあいを頂いたことを心から感謝いたしますと同時に、一層の御精進をなさって、川柳を生涯の友とされましますように祈ります。（以下略）

さようなら名残つきない十六年 恵二郎

「柳誌を編集するようになって毎月例会の課題吟原稿を清書・無記名で先生に送り、選評を返送して貰って発表するのですが、その原稿返送の早いこと、発送してから三日後にはきちんとその選評が届くのです。このやり方は、昭和33年柳社創立以来、四十周年まで絶えることなく、而も無報酬で続けられた実績には頭が下がります。

また、平成2年4月、大原ユーマア川柳大会へ出席の車中、能弁の先生からいろいろと盛り沢山のお話をきかされましたが、その中の一節。

『君、柳恩の言葉知ってるか。これは僕の造語で、川柳をやっておれば、いろいろな人と出会い、ふれあい楽しく生きることができるようになる。これが川柳から貰う恩、即ち柳恩と僕は名付けているんだよ』

この先生の言葉を忘れることができません（田辺交六悼文）

七十の御趣味金庫に艶ぶきん 恵二郎
右の句は古い『川柳雑誌』の同人吟である

のだが、彼は主幹の麻生路郎師に傾倒して、いち早く同誌の同人の列に加わっている。

川維の集まりで一度この人と座を共にしたことがあるが、根っから無口で余計なことは一切口にしない人のように思えて、あまり声もかけなかったが、彼が「初歩教室」を開設した頃は、よく筆下ろしに、彼自身の川柳観みたいなものにはしばしばお眼にかかった。以下もその愛読した幾つかの柳感である。

「川柳は反骨精神であるという一つの主張がある。反骨精神大いに結構であり、またそうあるべきではあるが、生涯を反骨精神一辺倒で押し通すことは中々できるものではない。出来たとするとそれは偉大であり、稀少価値でもあると私は思う。人生体験を社会体験を年輪の中に折り込みながら歩き続けているうちに、心の角がまろやかになってきて、温い味が生まれてくる。そうなると反骨精神一辺倒のあけくれでは、いささか疲れるようになる。私はそれでよいのだと思う。そして温い愛情の句が生れてくるようになり人間味豊かな句が生れてくるようになってくるなら川柳することによって人間形成がなされることになる。味の生もつ、味のある作家になれ！」

「古くからの伝統や慣習から一歩抜け出したものを、発見したいと意欲することは讃えるべきであるが、それを適確に実行に移すことは仲々むづかしいものである。自分では前進したものをつかんでいる気でも、三者的立場から見ると、新生の息吹とは見えない。

それは表面だけの新しさであって、その内容は、あまり変りばえていないものと見えるものが多いように思う。流行を着ても、肉体の線を変貌させただけで、心は旧態依然というのでは、垢抜けた品格がないのと同様だと思える。そんなことを思い浮かべながら川柳鑑賞を試みる。そして川柳のむづかしさを再確認してみる私である。そしてまた、マイペース（それぞれの個性）に磨きをかける努力が一番必要だと強調する私である」

「ケーテ・コルワイツというドイツの優れた女流画家がいた。ナチの弾圧下のため芸術院会員も返上して、自画像と母と子と死とのテーマをくり返し描き続け、一九四五年に七十八歳の生涯を終った。その彼女が死のまぎわにつぶやいた言葉がある。

『私の芸術が目的を持っていることに満足しています。私は、私の生きた時代にいい言葉で働きかけたかったです』

私はこの言葉の主張に胸打たれて、しばし瞑想にふけた。そして幾度もなめ回すようにこの言葉を味わった。川柳家もかくあらねばならぬ。いやあるべきである——と」

まあこの調子で彼の初歩教室のはじめは、右のようなハシリの数々の柳観で飾られていたものだ。

そこで当時の不二田一三夫編集長をとらえてこうわたしは註文をつけた。

「この御仁にもっとマトモな柳文を書かせてみてはどうかね」

ところがこの相手答えていわく。

「いや、この仁にマトモな話はダメです。

この初歩講座しか一歩も出ない方だから……」

本田恵一朗・本名明・明治40年4月1日岡山県生れ。平成11年7月6日没。享年92。

一頁の句集『砂の足跡』（川柳塔旧本）より
遺句拝借。

欲捨てるたびに開いた視野である

啞蟬の一枝飛んで考える

石像のは、えみ静かな夜にする

地に還るうれしさを舞うばたん雪

▼次号は「福岡阿彌三」

誹風柳多留二四篇研究 15

大野 秀二・小栗清吾
橋本 秀信・粕谷長生
山田 昭夫・伊吹和男

清 博美・佐藤 要人

106 ふとどきな目黒秋出て冬帰リ

大野 目黒は、「目黒不動尊の略称。尊像は、

慈覚大師の彫刻と伝へられる。此処に独鈷の
滝あり、参詣の人はよくこの滝で垢離を取っ
た。縁日は毎月二十八日にあるが、就中、正
五九の月は参拝者が雑踏した。(略)土産物
は餅花、御福の餅、栗餅それに川口屋の飴な
どであったが、この目黒の帰りは品川の娼家
に引掛けるのが通例で、餅花を下げて二日掛
りに帰宅する者もあつた。」(『川柳大辞
典』)。

九月二十八日の目黒の縁日に出掛け、品川
に遊びに行き、泊まって十月になって家に帰
った。九月は秋であり、十月は冬となる。一
泊ならともかく三泊(九月は大で三十日ま

で)も品川に泊まるとは不届き千万である。
どう考えても亭主の勝ち目はない。

目黒から十月かえるふと、きさ 一三三六

目黒からとんだ泊りで冬かへり 七六二〇

橋本 賛。なれど九月は大の月とは限らな

い。小二十九日の年もある。現に二三篇刊行
の寛政三(一七九一)、四年の九月は小。

清・佐藤 同。

107 すき分を持てそかいやこかいや

大野 吉原で遊ぶのに僅かな金、一歩しかな
いのに、その見世は嫌だ、ここの見世は嫌
だと言ってじつくり見て歩く者を詠んだ句。

すき歩ハあだやおろかにあそばぬ氣五八
たつたき歩でくるわ中ほれあるき 一八八

橋本 賛。そか(そこは)こか(ここは)の
音便。

清・佐藤 賛。

108 蜜柑籠よりハむざんな四ツ手駕

大野 「蜜柑籠」は、捨子の異称。必ず捨子
は蜜柑籠に入れるに極まつたと云ふのではな
いが、川柳ではよくこれを用いた。従つて蜜
柑籠というと捨子を意味するようになった
(『川柳大辞典』)。

赤ん坊の時に捨てられるのは、まだ裕福な
家庭に拾われて幸せになる可能性もあるが、
年頃になり、親のためなどで遊里に売られる
のは無惨なことである、との意。

積く善の家を見かけてみかん籠 八三三〇
むこい事娘正札付になり 第一四三

橋本 賛。遊客だけでなく、女衞が娘を吉原
に送るのも、もっぱら四ツ手駕籠を使うこと
になっているようだ。

清・佐藤 賛。

109 片くが他人で俺に手間がとれ

大野 「片々」は、①一对のうちの一、片
一方。かたはづ。かたつかた。②かたわら。

かたすみ。夫婦の一方をいう（「日国」）。

状況がもうひとつはつきりしない。両親の内一方が他人ということは、継母のことである。本当（生み）の親ならば詫びてすぐに済むものだが、継母の方は手間がかかるということであろう。しかし、継母に対して誰がどんな状況で詫びているのか、よくわからない。

小栗 よくわからず。詫びる側が継母か。

橋本 いろんな場面が想定される。右説を子供がしてかしたいたずらを詫びに行くのに実の母であれば、すぐにとび出して謝りに行くものを、継母であればそうはいかない。と

解した。

清 ドラ息子が考えられる。実の母親なら親身になって父親に詫びを入れてくれるが、継母ではそうはいかない。

佐藤 同右。どら息子ならん。

110 紅葉狩今ハゆふ女がたぶらかし

大野 謡曲『紅葉狩』。平維茂一行が鹿狩りに山中にはいると、身分の高い女が侍たちと酒宴をしていて、通り過ぎる一行に酒を勧め、維茂が酔い伏してしまふのを見て姿を消す。維茂が八幡宮の神勅をつける夢を見て目

をさますと、鬼女が現れて襲いかかるが、八幡大菩薩を念じて立ち向かいこれを討ち平らげる。

謡曲『紅葉狩』では鬼女が平維茂一行を襲うが、今は正燈寺や海晏寺などへの紅葉狩は、吉原や品川などの遊里へのかこつけて出掛けのため、遊女にたぶらかされることになる。

女には今でもまよふ紅葉かり
もみじがり今ハはんにやが内でまち

三七三

清・佐藤 賛。

111 忠臣の家老いたつて身が重し

大野 忠臣の家老は、赤穂藩の家老大石内蔵之助をいう。主君の敵討ちをした赤穂藩の家老大石内蔵之助は、昼行灯と異名があり何の役にも立たない家老のように言われた時期があった。主君浅野内匠頭長矩が吉良上野介を殿中で斬り付けて切腹させられた。裁きが不公平であり、二年後に四十七士のリーダーとして吉良上野介の屋敷に討ち入り、みごとに主君の敵を討った。

名前が大石で、身が重そうであるとともに、一身の声望が厚いことを詠んだ謎句。
大石が重荷おろした泉岳寺

六三一九

清 賛。但し、それほどの謎句でもあるまい。
佐藤 賛。

112 止テてから出口の柳蛇のごとし

大野 「出口の柳」。一は京都島原遊廓の門口にあった柳。江戸吉原の見返り柳は実はこの出口の柳を模したものだ（『川柳大辞典』）。他の一つは、日本堤から吉原の大門へ下る衣紋にあった柳。京都島原遊廓の柳を模したという。見返り柳（『新編川柳大辞典』）。

句は、一時期は遊里通いに精出したが、心境の変化で遊里通い止めてから、この出口の柳も蛇のように恐ろしく見える、というのである。本句の出口の柳は、京都島原遊廓の柳か、吉原の見返り柳か、どちらをいうか決めたが、京都島原遊廓の柳の方が妥当か。

出口まで送るすがたも柳也

三七三

こんな腰有と出口に植て置

六〇二二

橋本 賛。どちらでもよいのでは？ ちなみに「史伝」は吉原見返り柳、「吉原志」は島原説である。

清 江戸に限定していいと思う。

佐藤 どちらでもよいと思うが、強いていえば、やはり江戸の方が実感がこもっている。

秀句鑑賞

同人吟 西 出 楓 樂

— 2月号から

句会に出席すると、一句を二度味わうことが出来ます。一度目は選者の披露、つまり耳から聴いて味わいます。この場合内容と共に句のリズム感が掴めます。時には「ええ」と思うような意外な作者の呼名があるのも一興です。例えば、甘い恋の句の作者が偉丈夫で満場の爆笑を買い、会場が一体となって仲間意識を強くさせられたりもするからです。

二度目はそれらの句が柳詠や句報に載った時で、今度は目で味わいます。漢字、仮名の配分など字の使い方に、作者の細やかな心遣いが伝わり、披露と一味違う楽しみです。

一方、「川柳塔」欄のように、はじめから活字になっている雑詠は、より作者を身近に感じることが出来ます。課題吟に比べフィクション性が少なく、作者の身辺を詠んだものがほとんどだからです。自身の体調、家族、ペット、旅行、趣味などの句の中から、心のひだまで見えてきます。こうしてじっくり句と向き合っていると、一人一人がまるで古い知己のように思えてくるのです。

壁にもたれて壁あることを喜びぬ

小林 一 夫

久々に「川柳塔」で句を見せてもらえたのは、体調を崩されたことによるものですから、喜ぶべきではないのですがうれしいです。ちょうど私の息子ぐらいの年齢で、目下企業戦士として苛酷な毎日を送っておられる作者が、思わぬ時間を与えられ、自分を見つめ直されたであろうことがうかがえます。

掲出の句は読み方によっては奥深いのですが、時折勉強会で聞く作者の川柳観によれば、川柳はそのまま詠み、読めばよいという考えです。だから「奥が深い」と言えば、「考え過ぎ」と言われそうです。

地獄極楽まん中辺にある我が家

北 野 哲 男

世の男性は暖かく自分を包んでくれる家庭を希求しながら、家庭に縛られず自由に羽搏きたいと願っているそうです。その相反する気持を、地獄極楽の極端な表現で詠んであるところに、不思議な真実味があります。

瓦礫の下で今もアラーム鳴り続け

亀 岡 哲 子

一月十七日であれから丸五年が過ぎました。筆舌に尽し難い恐怖の経験は生涯消えることなく、近親者や、親しい人を失った人達にその悲しみは薄れず、凝縮されるばかりだと聞きます。実際に経験された人でないと詠めない句で、アラームが強いインパクトを与えています。

茶筌から拡がってゆく小宇宙

徳 田 ひろこ

お茶を点でいると、まわりの音は全て消え、茶筌の響きだけが聞えてきます。そして自分のまわりの空気が風いでくるのがわかります。お点前をいただく頃には、不思議なバリアーに包まれている気分になっているのです。お茶会ではなく、日日の暮しの一コマなのでしょう。

歳月は楽しおかめが好きになる

川 端 一 歩

男性の多くは、若い頃内外の美人女優にのぼせても、年齢を経るにつれて愛嬌のよい女性にひかれるようです。それは、人間の心が見えるようになって来たからに違いありません。「楽し」の表現に歳を重ねる充実感が率直に出ています。

道路工事あめ税金がダダダダ

都 倉 求 芽

わが家の近く幹線道路に面した歩道の、ちよつと広いスペースが、ある時レンガで舗装されました。すると間もなく掘り返されて、街路樹が植えられ花壇が出来ました。と思つたらしばらくして壊され、その頃工事が進んでいた地下鉄の出入口ができました。擬音が効果的で、ユーモラスな迫力のある句に仕上がっています。

わたくしの耳に収集癖がある

古久保 和 子

女性のゴシップ好きは、ワイドショーや女性週刊誌が幅をきかせていることでわかります。句の中から自嘲の気配がただようところから、作者の収集するのはゴシップ、或いはそれに近いものと解釈しました。「ある」と断定してあるのが小気味よく、女性の愛らしさが伝わる句です。

妻正装しばらくぶりに神さびる

岡 本 花 匠

今や古語となっている最上級のはめ言葉、「神さびる」がこの句に命を与え、躍動させています。正装の妻を見た驚き振りが、ありあり目に浮かびます。早く言えば「惚れ直しました」—ですね。

自分と遊ぶとても気が合うから気楽

村 上 ミツ子

女性はひとり遊びが下手なようです。何をするにも誰かと一緒でないと面白くない、と言つのがその言い分です。けれど歳と共に遊び仲間は減ってゆきます。できるだけ早い時期から「気の合う自分」をみつけるべきです。そうそう、男性にも「濡れ落葉」と称される人々が居りました。

短日や二の矢つがえぬまま暮れる

高須賀 金 太

一日—一週間—一カ月—一年が、年々速く過ぎてゆきます。一日などはあつと言つ間で、これは歳とつてきて動作が鈍くなつたせいかなと、半ば諦めたりもします。ましてや日の短い季節のこと、二の矢どころか一の矢も射られぬままの日があるくらいです。比喩が巧みで、しみじみ身につまされました。

よく食べてよく寝てボケぬよう敬具

桜 井 千 秀

書簡の一節のような句ですが、十四字の親しく無遠慮な言葉のあと、「敬具」とどんな返しのよきに、丁寧な言葉で結んであります。句の感じから自分宛と考えるのが妥当でしょう。そうするとユーモアとあたたかさ、が、沸々と湧いてきます。

待ち針に守らせているテリトリ

松 本 よしえ

男性には馴染のない待ち針ですが、テリトリ—を守らせる発想の面白さを買いました。地下鉄の入口冬が真つ逆様

春 城 年 代

もはや必要不可欠な地下鉄ですが、入口は地下へ向かつてぼっかり口を開けていて、その中へ飲み込まれて行くような不安感が拭い去れません。目を思われている作者には、より「冬が真つ逆様」の感が強いことでしょう。

一丁の豆腐が見せる四季の顔

時 広 一 路

冬は湯豆腐、夏は冷奴、麻婆豆腐、汁物、和え物、などなど、主婦にとって豆腐は実に有難い食材です。四季の顔どころか、日々の顔を見せてくれると言つても過言ではありません。栄養面から見ても、豆腐好きは長生きだそうです。身辺に常にあたたかい目を注いでおられることが感じられます。

夢のない花から先に枯れてゆく

吉 田 あずき

作者の意図するところでないかも知れませんが、花を人間に当て嵌め納得させられました。このまま読んでも胸にすんなり響く句であることは、言うまでもありません。

水煙抄

河内天笑選

岡山市 大森 純子

新鮮な一年でした職ひいて

もう一度原始に戻りたい地球

義一講演大阪のノリやなあ(藤本義一氏来岡)

チクタクと脳細胞が錆びてきた

ベストセラ― ロングセラ―になるかしら

松江市 銭山 昌枝

妥協癖イデオロギーは疾うに捨て

直球をふわりと躲す嫁と居る

潮騒は海の男の鎮魂歌

悲しみが諦めになる三回忌

親切にされて錯覚してしまう

島根県 武島 ちよえ

お陰様お目にかかれた二千年

裏口を出ればひよっこり春に会う

騙されたなどと連れ添い五十年

歳忘れ調子に乗った勇み足

嘘ついた事はおあいこ笑い合う

堺市 和田 つづや

雨の日の鬱少々の愚痴許せ

花の香はどこか哲学的と見た

コンビニと言う母さんに頼り切る

もう少し長目に欲しい命綱

不倫願望じゃが芋の皮厚くむく

河内長野市 大西 文次

極楽はどこを掘っても酒が出る

五体満足これでお金があったなら

肌荒れを気にしてくれるコマーシャル

忘れ物取りに戻って飲み直す

七五調呆けた頭をこき使う

宇部市 高山 清子

お洒落して手の甲の皺もてあまし

夢と希望持つて防いでいる老化

年賀状細い絆を太くする

真実の友情出来ぬ嫉妬心

裏切った彼の憎さよ恋しさよ

大阪市 尾崎 黄紅

逢うたびに小さくなつていく友と
返さなくてもよい傘を借りてくる

札束の匂いを知っている鼻だ

無人駅鼠の骸見つけたり

人間の勝手達磨は知らん顔

大阪市 三浦 千津子

たつぷりと湯を滾らせて寒の入り

先客に倣い所望する大根煮

枯れ草へ燃えつきそうな陽が沈む

狂いなく巡る誰にも来る老後

立春の少し青空すこし冬

大阪市 中澤 伽羅

元号は置いてけぼりの二〇〇〇年

羽根つきの音消えましたお正月

木の芽にも聞こえたらしい春の音

一聞いて十知るなんて無理なこと

キヨロキヨロと探しています残り福

大阪市 一本 勇太

飲み干してやっぱり負けたなと思っ

ぬるま湯の夫婦の戯画に朱を少し

覇氣満ちる少年龍に乗って翔び

初日手に鼓動ひとつを握りしめ

も一人の私の覚めた眼が怖い

堺市 荻野 正雄

朝寝坊亡父の声する農繁期

氣イ付けや言ってる老母は要介護

客筋を見分けて吠えるうちの犬

ラーメンに決めているのにメニュー見る

つまずいて不覚を足になすり付け

堺市 田中 紫

福袋わくわく開けて当てはずれ

初詣でガングロコギャル闊歩する

買い溜めの水でしばらく飯を炊く

どっぷりとテレビにつかり生欠伸

おせち飽き茶漬けの味に癒される

堺市 村上 玄也

定年後上司に替わる妻の指示

体重と禁煙効果比べてる

職安へエリート意識捨ててくる

絶対という字を信用していない

丸い月浮世の些事を笑ってる

堺市 大橋 錦

美容院注文つけて高くつき

赤ちゃんの天の笑いに元氣出る

吊り橋の先頭を行く肝だめし

寺参り石段見上げ足鈍る

割り勘で騒いでみたいビヤホール

堺市 齋藤 さくら

こだわりを捨てて曇ったガラス拭く

夫にはエゴの塊ぶつけてる

運だめし末吉だって有難い

片隅に愛が残って妬いている

ストレスに指輪を買って癒してる

堺市 梶本 哲平

われながらの佳句も柚子湯を出て忘れ

寒鴉ごみ集めの日知っている

金賞の菊を距離おき愛でている

表ではリストラ裏で派遣採り

求人欄三次産業ばかりなり

富田林市 中井 アキ

コニシキの巨体が決めるコマーション

結び目をゆるめて母と娘の絆

三拍子揃う息子に嫁がない

冬晴れと遊ぶひとりのカレンダー

天窓を猫と見上げている冬日

富田林市 中崎 深雪

愛犬と散歩少女にもどる時

義理チョコでいいからほしいもてない子

青空をキリリつき刺す冬木立

かくわしい梅の香りに深呼吸

見えにくくなって老いへの不安増す

富田林市 山原 昭水

母つれて花月で笑いまむし食べ

隣オペラ向かい民謡うち演歌

酒器はみなふる里自慢丹波焼

ご近所の元ミス日本年をとり

後輩に胃ガンの予防教えられ

八尾市 田中 トシエ

犬猫にスネかじらせる少子国

年金のおかげで孫へでっかい顔

お雑煮を机で食べる受験生

花冷えにマスク同士は目で語り

農業を継げと言わなくなった父

八尾市 平川 幸枝

ルミナリエ冷えた夫婦が熱くなる

上昇気流 龍の尻尾にしがみつく

介護法ホームヘルパー商談中

主婦達の声が並んだ募金箱

イメージが先行してる未来像

吹田市 須磨 活恵

倅せな時代に遭遇千年紀

娘や孫とがやがや過ぎた三カ日

何もかもごちゃ混ぜ自動洗濯機

肩寄せて暮す夫婦の根深汁

幾度も綻びつづって来た絆

吹田市 後藤 志津香
伝統のおせちで祝う二〇〇〇年

黒豆にこだわり続け母の味
当り年辰の彼女は燃えている
福袋の前に立つたら思案する
成人式晴着美しミレニアム

大阪狭山市 矢野 梓

小さき鯛二人で祝う誕生日
生きているだけでうれしい誕生日
年寄りとまだ思えない誕生日
半世紀一気に戻す賀状来る
いいようにとって自分を慰める

東大阪市 今岡 貞人

終身雇用年功序列役所だけ
警察は色んな意味でおっかない
退くも残るも今や地獄の自由党
汚すまい地球にスベアありません
ライトアップ寺の紅葉も疲れます

枚方市 大昇 隆広

アルバムは君を愛した時のまま
ビル谷間人の業焼く茜空
投げを打ち横綱なりと吠える背な
語らない見せない苦労しわ作る
世の隅でチヨコチヨコ生きてそつと逝く

交野市 森本 益弘
自分史の中に伏せ字のない強み

住所録三人消した年賀状
買いだめをどうしてくれるY2K
三世代揃い今年もハイチーズ
皇紀では二千六百六十年

大阪府 澤田 和重

無愛想な店に掘り出し物がある
馬鹿にした古い当るから恐い
かくれんぼ早く見付けてはしくなる
言い訳を許さぬ妻の丁寧語
毒舌の底に流れる思いやり

摂津市 もちづき 遊美

独り居は鵜の目鷹の目近所の目
有り合わせ着てたらチヨイと派手らしい
夫逝きて厳しくつづく落ち込む日
旅費と体力限界直前飛び立ちぬ
念願の桂林 水墨画の中へ

寝屋川市 井上 すみれ

稚子様御流産とはああ悲し
ふんぎりをつけて足もと軽くなり
風の子が今は風邪の子何とまあ
自分史のオッチョコチヨイに悔いている
佗助が雨にうたれてしおらしく

忘年会新年会もない夫婦

河内長野市

印 藤 智 子

正月の深夜に遺言状を書く

賀状より人の声待つ三ヶ日

新年の装いをしてリハビリに

二〇〇〇年買い溜め品に囲まれる

伊丹市

慇 谷 郁 子

冬木立聖人のごと立ちつくす

誤作動も無くてゆっくり春の膳

名工の腕が泣いてる過疎の寺

自分史の隙間を埋める恋の詩

夫婦独楽プレーキかけて回ってる

尼崎市

野 瀬 昌 子

ここでさよなら駅の別れは辛いから

他人様オバアチャンとは言わないで

すっきりと過去は忘れて姑看取る

米櫃を満たし優雅な氣に浸る

いい話どこにも落ちてない長屋

川西市

西 内 朋 月

豆拾う子もなく止めた福は内

おみくじに良縁有りと書いてあり

医者顔ちらちらしても飲んでいる

朝帰り御免なさいと鉦たたき

初恋の人と出逢った競馬場

第三の出発ですと老父の賀状

早々に家事終え二階の城へ行く

ワンマンも定年間近皿洗う

横綱に挑む小兵の目が燃える

男の子産まれるまでと私五女

神戸市

木 村 忠 義

いい知恵が出ぬと頭をノックする

いい知恵が浮かぶと頭撫でてやる

海峡に橋が架かると川に見え

ルーズソックスリラックス用かも知れぬ

順番がのんびりさせぬうちの風呂

綾部市

藤 田 芳 郎

還暦へ答案用紙まだ白紙

仏壇の扉が閉めてある小聲

留守電にして策を練る負け戦

怪しいぞ着地見事に決まりすぎ

散髪屋に剃り終えるまで逆らわず

島根県

持 田 多 輝 子

軍門に下る覚悟の午前様

ポイ捨てを無くす良心孫に説く

窓みんな開けてゆとりの風入れる

開発で移転をしる居住権

喜びをおさえ切れない試歩の朝

鳥取市 有 沢 せつ子
たこ焼きを入れた袍が汗をかく
頭から降って来そうなクレール車

五十年愛していると言いそびれ
政治家の祝辞多くを言いたがり
園児バス節分の鬼つれて降り

鳥取市 録 沢 風 花

二千年のドラマを積んだ船が出る
大根足しっかり大地踏んで来た
ささやかな私の城で羽根伸ばす
大根を煮ると優しい顔になる
万歩計寒気団きて影ひそめ

鳥取市 福 永 ひかり

消化剤飲まねば次が入らない
相談に乗るには歳をとりすぎた
言い訳をするから小さくなる器
田を売った御殿が家の前に建つ
テンションを上げねば皆が暗くなる

鳥取県 平 井 栄 翁

峠越し道は小さくなる余生
水炊きの終りの頃の味が好き
久々の和服の妻に目を細め
じわじわと外濠埋めて無理を言う
終列車働き蜂も虎も居る

鳥取県 山 内 芳 江

両方の意見を聞いて眠れない
ひと言が過ぎて自腹を切る羽目に
すぐ転ぶ足の脆さに年齢を知る
こそばゆい足の裏まで褒められて
長居してあげくの果てに無理無心

鳥取市 山 宮 愛 恵

何もしてやれぬ看護の日が流れ
寿命とや心の穴がうまらない
昨日は過去 明日を信ずる他はない
わたしからあなたをとるとゼロになる
難問に亡夫を呼んでるお線香

米子市 森 脇 麗

緋牡丹の如く咲きたや二〇〇〇年
晴れやかな巫女笑顔に福もらう
日本晴れ白いスーツで初詣で
冬鯖の味噌煮で夫の酒すすむ
ソプラノの艶歌は耳に馴染まない

今治市 中 村 好 恵

不況風それでも夢は捨てられぬ
読むつもりの本がだんだんふえて来る
艶々としあわせそうな長い髪
リハビリ室四方へ頭下げて出る
カタカナ語辞典片手に聞くニュース

今治市 塩路 よしみ

茶柱に機嫌直した腹の虫

おしゃべりがピタッと止んだ救急車

満月を砕いて入る露天風呂

誇るものないが心は日本晴れ

しあわせな夫婦と他人決めてくれ

今治市 野村 清美

渋柿の刑は剥がれて吊るされる

正月のビデオは孫のピアニスト

手鏡に髪を寝ぐせを笑われる

羊かんへ苦いコーヒー欲しくなる

お雑煮の粘りを貰う辰の夢

愛媛県 宮本 末子

雨溜めて雨滴らす枇杷の花

これ以上伸びては穂の芽が喰えず

雨男今日は糞もつれてくる

餡もれており正月のよもぎ餅

からし菜の野辺はひりひり陽の匂い

高知県 近森 功

年金の財布覗かせ孫を呼び

テッペンの百舌テッペンの木守柿

どこまでが空か秋空底がない

病床にカーテン一つ俺の城

日の丸の根じめとなった松かざり

香川県 清川 玲子

癖までも似て欲しいとは言うてない

ほめることなく明るさだけを言う

三角巾きき手の骨折吊っている

松すぎて仕事さがしの靴みがく

隔世遺伝願っていますランドセル

福岡県 岩崎 和女

忘年会音痴な声に妥協する

勝算があるのか急に攻めてくる

披講者の美声で会も盛り上がり

光る物何一つないくらし向き

焦ってる心の底が見えかくれ

北九州市 岡田 幸生

ごくたまに気の利くことを喋る妻

バックした妻と笑顔が交わせない

誤作動を怖れて襖に水滴たす

ミレニアム囃し景気を盛りあげる

大台に乗るへそくりに罪がある

松江市 松浦 登志子

Y2K田舎暮らしはマイペース

ストレスと栄養過多は貴族並み

読みちがえ景気浮上を浮気とは

新年の御神酒が言わす腹の中

宝船今年は向きを替えてみる

出雲市 城 多 喜

家を出ると一人前の顔をする
太陽のまわりわたしも回ってる
どじを踏む足をわたしは叱れない
足音が私を置いてゆく気配
洪チンの要素わたしも持っている

松江市 山 根 邦 代

思考力落ちたことなど隠してる
テレビ消し自分の世界とりもどす
思うより足腰弱くなってきた
目標があるから笑顔連れ歩く
振り袖と対照的な髪の色

出雲市 川 島 和歌子

町歩く茶髪ガングロ化粧の娘
初詣で一番乗りを待つ扉
振り返る夢中で過ぎた子育て期
年と共に間だんだん好きになる
言い訳はすまいむなしさ残るだけ

島根県 菅 田 かつ子

靴下の中でぐんぐん爪が伸び
やきもちをこんがり妬いて嬉しそう
雪の中目映いほどの黄水仙
阿呆になる修行まだまだ続きそう
二〇〇〇年ほっと安堵のみかんむく

宇部市 藤 本 一 規

小児病棟新年の朝休みなく
借金の方が悪いか国を見よ
成人の門出に風が冷た過ぎ
恐竜のバトンを受けた私たち
タレントの後官僚を連れてくる

横浜市 北 沢 街 湖

初選者安定剤と胃の薬
たった今読んだ知識をひけらかす
辻褄が合わぬ浪費ヘマルサの目
たればを時に心の中で言い
やせたいと言いつつ食べるフルコース

横浜市 荒 井 広 和

子離れを機に発想を変える妻
煩惱のマグマへ禅の消去法
父と娘のギャップは母の中和剤
傷心に追い打ちをする無神経
強がって居ても唱えるお念仏

横浜市 田 中 笑 子

頬つぺたを紙風船がふくらませ
雪見酒など考えぬ豪雪地
夫との車間距離とる難しさ
無駄だとは知って買わせる暮れの籠
誘われた旅 大掃除あとまわし

横浜市 秋 元和 可

ふる里のニュースで包む荷が届く
誤作動もなく現れる初日の出

空の色風の気配も二千年

昇り竜うまく尻尾につかまろう

同じ服やって来るから回り道

横浜市 山 梨 雅 子

玄関を狭しとブーツ脱いである

ふる里の蜜柑に柚子が混ざってき

境遇が似ていて腹をうちあける

久し振りの賀状へ電話かけてみる

福袋どこかで開けた跡がある

横浜市 福 田 由美子

一周忌お経短くなりました

自信ある仕事笑顔でひきうける

落葉掃き風にまかせている都会

ローン組む八十歳を目標に

子の立場夫の立場でゆらく仲

横浜市 川 島 良 子

二〇〇〇年と母の卒寿に乾盃す

共通の趣味でスキーを離せない

量よりも質で二人の膳となる

おむすびの講習もある防災日

沈黙が怖くてすこし喋りすぎ

横浜市 近 藤 道 子

紅梅が一輪笑う庭の隅

素っ気ない答えに慣れて鬼と住む

ガラクタも鑑定ブームで見直され

守備範囲夫にゆずりカルチャーへ

福祉の手急場しのぎのように見え

横浜市 長 島 亜希子

糸屑を取ってあげるもセクハラか

欠席の理由ベットの医者通い

褒められてマフラーをまた編まされる

遊びたいから生真面目に家事をする

捨てなさい買ってあげると娘に言われ

横浜市 芦 田 鈴 美

グイエット貴男が言えばセクハラよ

黄金のじゅうたん濡らす秋の雨

また二人だけに戻ってハ長調

巣離れの後にも餌をやりたがる

ジーパンも正座している初春の膳

八王子市 井 上 京 一 郎

お迎えのベントウへ園児すいと乗り

いいのかと恋泥棒が念を押し

鉛筆の先で課長がつつく誤字

はや五年地下鉄サリン大地震

結局は声の大きさには勝てず

秋田県 湊 修 水

誤作動が無くて新年おめでと〜

おもかげを偲びコタツで読む賀状

光る風腹一杯に食べました

雪女ノックするよな山背風

熱燗で八九の春を謳歌せん

札幌市 三 浦 強 一

介護の要なしとクールなコンピュター

二番手に付いて言いたいことを言う

職退いてからは時々台所

千客万来タコの大きいタコ焼き屋

丸い地球刻々新年おめでと〜

日立市 加 藤 権 悟

会長の財布は無理を聞いてくれ

いよいよになって書き出す年賀状

初夢を抱いて漕ぎだす二〇〇〇年

アデランス被り生き生きしています

二〇〇〇年跨ぐ水虫とのいくさ

尾張旭市 三 浦 き ぬ

これがまあ寒の入りとは菜種花

誤作動もなく飲料水の山

急がねば自画像皺の増えぬうち

育毛剤ひたすら効果信じて

サミットを次は宇宙で開いては

京都市 高 島 啓 子

町なかでうぐいす鳴いて京の朝

寝る前の腹筋これも祈りです

鼻水を少し光らすアナウンサー

すみませんいうとむこうもすみません

恋知ってクシャミの音も小さくなる

和歌山県 坂 東 和 代

好奇心古希を過ぎてても衰えぬ

欠席の方便二度も殺される

聞こえない程度に文句言っている

書道展芳名帳に恥を書く

見た目程のん気にしてる訳じゃない

和歌山県 福 重 美 子

義理だから一票入れる顔してる

柿の実を寂しそうだと二個残す

紅引いて貰って活気づくホーム

三人の医師の薬が喧嘩する

信頼の出来るお医者と手を結ぶ

和歌山県 村 中 悦 男

颯爽と息子家族が帰省する

抜けた歯と戯れる舌の先

天気予報はずれて嬉し慈雨が降る

いい湯だな予定の農事終えた冬

歳を経て許せることの多い幸

和歌山市 木村 親 路

手際良く済ます婦長の注射針
世の中を時々抜けて海に出る
とぼとぼと歩く余生にいたくない
不景気で神と仏は大繁盛

和歌山市 吉村 さち子

除夜の鐘けじめをつける胸で聴く
自画像に介護の疲れ刻まれる
正直な舌らしい母食べ残す
買わされた防備食品欠伸する

和歌山市 土屋 起世子

今むかし楽しき違うお正月
おらかな方言使い丸く住む
嫁姑 戦いすんで共白髪
雑巾も絞れぬ子等の校舎病む

和歌山県 杉山 精子

宝くじほどではないが福袋
神のみが青い地球の行方知る
自我消すと益々森が深くなる
糸口をつかむ握手にある野心

田辺市 大峠 可動

吹きだまりほろほろ酔うて故郷自慢
舌下錠一つは切れ痔一つは疣痔
有縁無縁二色に染まる慶弔費
即席の逃げかも知れぬ馬耳東風

京都市 三宅 満子

コンピューター主役に明けた龍の年
キムタクのような主治医に見つめられ
名曲を聴いて静かに手術待つ
二つの目でしっかりと見た二千年

京都市 勝山 美千代

婚期無視孫の旅行で年が明け
買い溜めの非常食ですでないしよ
ばあちゃんのかき皿にも同じ量
子等の声絶えてブランコ独りゆれ

京都市 前上 英一

透析の血の流れから湧くいのち
コンビニの灯へ誘われる妻の留守
底冷えの町うどん屋の灯が誘う
荷崩れの音聞く父の背中から

橿原市 居谷 真理子

福袋自分にあげるお年玉
泣きたくて選んだ映画隅の席
知られてもいい秘密だけポケットに
胸の底ひばりが刻みつけた歌

橿原市 西本 保夫

似たものの夫婦に世話をやきすぎる
リストラの亭主はなぜか悠々と
自転車で毎日タバコ買いに行く
放つとけばよいとわかったお人好し

三重県 佐々木 森 哉
愛をブレンドどうぞとぞとコーヒーを

髭剃って昨日の罪を消さんとす
鉛筆のように生命を削られる
人生論今夜は酒と語ろうか

大阪市 平 井 露 芳
アスファルトばかりでトイレに困る猫

白地に赤こなええ旗何処にある
屠蘇のんで活を入れてる休肝日
飾られて飛べない風が泣いている

大阪市 大 川 道 子
川柳で老母を誉めたりけなしたり

正論の裏にちらつく黒い影
ウンとうんトーンの違う返事する
やつと意味わかって捨てる古いメモ

大阪市 星 野 きらら
二〇〇〇年大合唱の年賀状

娘へ送る包みどんだんふくらんで
文旦が高知なまりとともに着く
宿坊のお膳男の味も盛り

大阪市 榎 本 日 出
父さんの手帳に孫の誕生日

暇つぶし百円ショップ呼んでいる
靴音で今日の成績見抜かれる
仏滅に拳式している運試し

大阪市 奥 村 五 月
疲れた胃春の七草待ちわびる
里がえり宇宙からかと思う靴
不景気も十日えびすで線を引く
お屠蘇しか飲めない父が淋しそう

堺市 矢 倉 五 月
参拝は付け足し姪が福娘
受賞式お供が服を新調し
病む人へ向ける笑顔をけいこする
ほかほかの夜具に心の紐も解く

堺市 見 本 ちや子
堪えていた思い一気に出る涙
ぼけの木に人刺す力持っている
一日中まめに遊んだ靴の泥
招待の旅買い過ぎたみやげ物

堺市 喜 多 美 波
誤作動を避けて生まれた孫双子
雑念を見透かされそう無垢な顔
自負してたパワー引つ込むドッコイシヨ
関東もつい「おおきに」でご挨拶

高槻市 生 田 義 一
桃源郷和太鼓の音こだまする
信楽の壺中に遊ぶ老い二人
肩寄せる庶民を照らすルミナリエ
動乱の世紀に生きて幸多し

高槻市 執行 稲子

虫食いの穴埋め私の呆け封じ
アメリカンのお替り話たんとする
さよならの嫌いな友が先に逝き
前略のきまり文句の彼が好き

高槻市 左右田 泰雄

いいお酒目もとほんのり酔芙蓉
同窓のよしみでぐる縄のれん
一瞬のためらい空を切るこぶし
やさしさに芯の強さをしのばせる

羽曳野市 川口 信子

持ち寄った話題女の無礼講
数珠をくる指から愚痴が消えて行く
受験子の眠気をさます電子辞書
二千年忘れ上手になりすぎて

羽曳野市 森田 四三郎

不況時はおすすめ旅行安近短
ライバルがいるので惚けていられない
甲高いカラス一声ゴミ怯え
泥棒を捕えて見れば警察官

羽曳野市 川田 晋

食欲はあるがたんとは食べられぬ
眼で駄目と言ってる妻に逆らえぬ
迷ったが矢張りお歳暮出しておく
知事辞任罪は選んだ方にある

羽曳野市 永田 章司

赤錆びた鉄骨に見るバブル跡
麻雀は痴呆予防と言いつし
お客来て秘蔵のお酒お相伴
Y2K初日拌んで胸をなで

羽曳野市 安芸田 泰子

健やかに二〇〇〇年へと踏み込めり
二〇〇〇年を知らす亡夫の腕時計
ガングロを盗み見ていて睨まれた
墓石を責めて愚痴って撫でておく

河内長野市 水谷 正子

餅焼くとお伽噺がふくれ出る
露天風呂旅愁をそそる冬火花
初場所が始まる煮〆残ってる
長男も義理チョコ貰う年になり

富田林市 大橋 鐘造

次に吹く風にはきつと乗るつもり
目の黒い中はと母の応援歌
笑う度美人になっていく少女
喝采の陰で黒子は汗を拭く

河内長野市 杉谷 カズエ

驚かすつもりで来たと伊予なまり
喜んだおもちゃが泣きの種になる
松の内家族に風邪の落し穴
寝ていてもいい身なれども餅かびる

八尾市 山本 至

ローンすみ家も夫もくたびれる

ひと言が雰囲気こわすことになり

親孝行出世払いで待っている

先約の逃げ口上にかわされる

八尾市 中島 春江

赤ちゃんががんこ爺さん笑わした

通りこしそとひき返す焼蕎麦屋

自販機も偽の硬貨に嘆息し

白髪になって近頃赤い服

松原市 和氣 慶一

カウンタダウン少し不安も混ぜながら

ガングロと美白行きかう初詣で

神様もお疲れになる初詣で

少子化で独楽に羽子板めんこ消え

泉佐野市 稲葉 洋

何輻目に乗ろうトンネル多い線

噂にもならぬ孤老の空元氣

長生きのお陰で法螺も許される

厚底のブーツ凶器に見えてくる

岸和田市 村垣 鹿太郎

埋立地君どこの土伸よくね

格好悪い胡瓜が残る無人店

蟹が出て女三人喋り止め

迷っても月並みになる旅土産

吹田市 穴吹 尚士

大晦日せめて散髪しておこう

割り引きの映画の時は歳を言う

義理チョコが海老の撒き餌に見えてくる

野良猫に鰯の干物のクリスマス

岸和田市 木村 正剛

山形に投げる子等への雪礫

二〇〇〇年畳替えしてあらたまる

ボケの役演じる幕が上がります

恵まれた才能に足引つ張られ

門真市 矢阪 英雄

介護など無縁ですよと汗流す

介護などされないままに終りたい

介護され自ら心弱くする

車椅子自力で歩く日を願ひ

和泉市 横山 捷也

つい口がすべって亀裂広くする

六十路から妻のタクトに舞っている

バーゲンに付き合い妻の歩幅追う

座り直して許さない妻の顔

泉佐野市 備後 三代子

背の高き孫と並んで冬うらら

着ぶくれてころろ歩くウインドー

衰えたこと認め合い葉のむ

残り香の匂い袋を腰に下げ

豊中市 みきわきみ

八十年よくまあもったあばら骨

我が妻をバアチャン元氣と問われたり

税金の使途に銀行あろうとは

金婚式とついで来たはこのあいだ

尼崎市 清水久美子

最敬礼して初孫と初対面

新しい顔が手強い敵になる

句友とのよすがに感謝寺社巡り

駆け落ちが原点にある夫婦仲

尼崎市 尾宮弘治

ちっぽけな地球の中で敵味方

此奴めと思う曽孫のいい寝顔

年頃の娘が居て行けぬ出向地

ヤアオーに名前が出ない初詣で

尼崎市 森安夢之助

三代目貧乏神を育ててる

爺ちゃんのお医者嫌いに困ってる

クレヨンの明るい色がよくちびる

無位無冠風の流れは気にしない

篠山市 谷田多美子

コーラスの平均七十二歳なり

子から孫曾孫とたのむ初詣で

コンコンとアイタタタで年明ける

注連飾り小振りになって新世紀

篠山市 円増純子

酔うほどに別のあなたになってゆく

コンサートの余韻たぐっている夜道

欲しいのは禁煙できるいさぎよさ

ことさらに可愛げのない返事する

姫路市 北条てる代

きっちり縛った口から本音出る

福耳の裏でストレス溜めている

脳死とは言わぬが私の錆びた脳

世話やいて焼かれて回る夫婦ごま

姫路市 服部一典

迷わずにいつも真っ直ぐ歩いてる

チューインガムストレス入れて膨らませ

笑う日もあるある三百六十五日

お受験で母親達の勉強会

唐津市 岩崎實

冬休みプラス五キロに針動く

ポケモンで通じ合ってる現代っ子

テクノロジー新問題を生んでいく

詮索は無用 自分を守られよ

八幡市 衆野和俊

タッパがおもちゃ代わりの孫一歳

菜の花のフェイント受けし寒の入り

神様に元氣な僕を見てもらう

神様が早期退職ゴーサイン

香川縣 瀧井 勝
腕白にお化け話が効く過疎地

飼い犬に言うているのでない中身
お供えを見る孫の目とぶつかった
生き下手が回り道して花に逢う

鳴門市 八木 芳 水

補聴器を買い替えてみる冬となる

中途から乗り合わせての真珠婚

本当の涙は人目避けて拭く

北風に目があり僕を追って来る

香川縣 原 賢

ぎしぎしと揺れるところに釘を打つ

白旗はふらず自分を信じぬく

悪気などないのに悪い人にされ

自転車の初心忘れたノック知事

愛媛縣 中居 善 信

おだやかな人で挨拶したくなる

生き方の違いつくづく鼻ピアス

核の事故核に歯止めをしなくては

Uターンせよと急かせる森の風

今治市 渡 邊 伊津志

知っているつもりが人を迷わせる

海に出て船に乗り込む島の風

これ以上太らぬ雑魚というさだめ

霧の瀬戸抜けて船長仮眠する

松山市 山之内 八重美
せつかちとのんびりが合う夫婦仲

憧れのブルース遺し永久の旅
路地裏は歯止めのいらぬ人情味
イベントへ餅まきもして盛り上げる

出雲市 岡 あきら

ライバルの賀状闘志を秘めている

代筆の文字気がかりな年賀状

人々人びつくりしてる田舎猿

賽銭がようあげられぬ浅草寺

松江市 小川 注 湖

信頼の回復努める聞き飽きた

バケツにはバケツに似合う使い道

子の涙嘘とはどうも思われぬ

祭りだけ賑やかだった氏神さま

出雲市 佐藤 治 代

めそめそはしない女で疎まれる

煩惱も欲もまだまだ捨てぬ老い

獅子舞いを見ている首も回ってる

幾度の赤恥重ね老いてゆく

益田市 岡 田 たけを

口も手もまだ呆けないで笛を吹き

角が立つ言葉を吐いて眠れない

人が良いから損ばかりして生きる

春の絵は少し明るく描いてみる

島根県 松本聖子

古稀の坂やり度いことが山をなし
年女しつかりせよと天の声
人の良さ馬鹿か利口か分らぬが
歳とらぬ亡夫に思いを話しかけ

島根県 多々納テル子

ひらひらと若い家族がゆれる竿
安売りに飽きて相場の服を買う
廃屋へ寄り添って咲く野水仙
ひと時の気安めだらうお賽銭

鳥取市 河田のり代

お正月晴着がタンス跳び出した
奥見えぬ芸道手さぐりで進む
ほどほどにしてと長生き子に言われ
成仏をしたいが過去が許さない

鳥取県 澤裕子

信念を持つと背筋がしゃんと伸び
計画に息抜き箇所を入れておく
ひとふりの塩が甘さを引き立てる
雑念が多く成仏出来ぬかも

鳥取県 加藤公子

関節がゆっくり休めと指示を出す
招かざる客にゆっくりせよと言っ
法則に従い並ぶ花つぼみ
オリオンの冴えてバイクの風が刺す

鳥取県 鳥羽直市

見たくないガラスに映る老いの影
粗大ごみにならぬ長生き考える
子育てを終り名のみの雛まつり
頂上のない川柳の坂登る

鳥取県 西沖彰雄

嗣ぐ子などいないが柱拭いている
住所録線引く友がまた一人
OB会自慢も愚痴も走馬灯
生きるため無欲になれず罌に落ち

鳥取県 河本照子

病氣して特別涙もろくなり
我がままな一人暮らしに付けがくる
ヒット曲一つが持っている力
薬にもなる一言を聞く出会い

鳥取県 藤山弘子

期待する気持ち伝わりがンばるぞ
優等生挫折知らずが生命とori
取りあえず進学をすることにす
リストラと合理化からみ一大事

倉吉市 牧野芳光

思案するふりをしている仕方なく
神様に出会ったような陽の光
誇張した話真顔で聞いている
やんわりと受けて鋭く返される

新年の夜明けの市場セリに沸く 岡山県 国米 きくゑ

恍惚の母の笑顔に神をみる
たくらみ一つ夕焼雲に裁かれる
いろいろな顔が並んだ化粧室

倉敷市 家守政子

神様が選んだ夫婦悔いはない
目刺し焼き二合の酒で機嫌良い
奥飛驒の湯で初風呂を一人浴び
泣くも一人笑うも一人寡婦の部屋

横浜市 鈴江純子

子ら巢立ちシャンブー容器小さくなり
診療所出来て離島に子が戻り
起き抜けの顔でチャイムに出られない
献血も枠外となる歳を生き

横浜市 平達也

挨拶もスムーズに出る恢復期
起きがけの一服今日のスケジュール
鬼手仏心額を見上げて手術室
これ以上頑張れません天仰ぐ

横浜市 豊田羊子

Y2K無事で七輪ほつとかれ
懲りもせず厚底靴にころばされ
ケースから牛タン揃いアカンペー
ガングロも影をひそめてお振袖

冬かもめ舞い高鳴りて漁多き 静岡市 増田扶美

冬桜見知らぬ人と長話
梵鐘の音やわらかく明日の夢
ふれ合いの輪の中にいてとし忘れ

静岡市 大村正雄

約束を破って威張る国もあり
説明のない約款の小さな字
アメリカの眼鏡で見る世の流れ
蛇の夢見たがお金は拾わな

静岡市 中西雅

シベリアの長旅終えて湖のしづき
靴底の高さをほこる初詣で
園児の絵画面一杯陽がのぼる
二千円札不自由の眼がくやしがる

東京都 井上つよし

ホカロンで雪に踏み出す万歩計
助手席の妻に指図をされ通し
おでん屋の湯気の向こうに知った顔
同伴の夫人ばかりに向くカメラ

青森県 福士トキ

さくさくと新雪踏んで賀状来る
百歳まで生きて曾孫の婚の席
何処へ行ったりんご担いだあの力
白鳥の声に目覚める北の国

鳥取県 橋谷 静江
ジョギングで行ける範囲の花回廊

節分の豆は一粒選りでまく
四捨五入すれば前進できるだろう

鳥取県 竹森 富久江

花芽立つ明日にぎやかい里になる
おしゃべりのはずむ魔力をお茶で出し
野に山に恋の季節を謳歌せん

鳥取県 鳥羽 玲子

プライドの高い同士で競い合う
本番の乱れ練習甘かった

倉吉市 大下 智子

露草を摘んだ畑にビルが建つ
夢ばかりみていてお金たまらない
受験生やるぞと絵馬に気を入れる

愛媛県 安野 案山子

新米の鶯だらうホツケキョー
病室に元気をくれた桃の花
晴れ晴れと卒業式の子が帰宅

愛媛県 黒田 茂代

風花や永遠の訣れとなるひとに
ストープの上のケトルの独り言
アクセサリー要らぬわたしは和服党

高知県 百田 幸
むつつりにお酒がはいりかましい
労りか叱られてるかわからない
鏡拭くしみじみ顔の皺を見る

守口市 井上 桂

まだ若い思ってるまに七十路すぎ
たわむれに知事の座すてたノックさん
久しぶり買いだめをした二〇〇〇年

藤井寺市 岸本 寿代

後ろからくる自転車が怖い
困ったなトイレにいと電話なり
久し振りに有馬温泉湯にひたる

岸和田市 亀井 皎月

ありありと妻が別居をそそのかす
墓地を買い納まる準備だけは出来
生けるうち戒名決めておくことも

八尾市 高橋 明子

カレンダー過ぎ行く日々の速きこと
同窓会めつきり減って膳並ぶ
病院の待合室は老いの風邪

河内長野市 木太久 正一

プリントゴッコ手順通りに四苦八苦
クリスマスケーキを孫が六つに切り
につこりと二歳の孫が寄ってくる

羽曳野市 山本 たけし
年明けてもう早十日芽吹く梅

姪嫁ぐ見栄も上積む祝金

父母眠る墓地裏に建つラブホテル

倉敷市 撰 喜子

出世コースやつとのつたら不況風

フルコース食べきれなくて年を知る

結婚のめでたい酒に泣き上戸

鳥取市 谷岡 清子

家の門雪の達磨がかまえてた

すごろくの上がり下がり飯忘れ

雪穴に人が落ちるを忍び見た

鳥取市 西尾 敬之介

辻に立つ手相見冷えた手でにぎる

歳の市不景氣風が値下げする

ガス灯に洒落たデザイン似あわない

鳥取市 田村 邦昭

賽銭を少しはすんで妻の幸

二割引お祭りほどに人がいる

しぶしぶの見合いがなぜか気に入られ

三重県 尾崎 勤

結局は家計に合った趣味になる

セミプロと呼ばれて趣味の域にいる

通勤の睡眠足して8時間

兵庫県 黒崎 美紗子
齒の痛さ正月祝い吹きとばし

フト目覚め夜のしじまにラジオ聞く

皆来てる笑声廊下までもれる

兵庫県 徳平 穂子

血縁の絆煮つめたばたん鍋

おみくじの吉を念じて宮めぐり

一葉の味それぞれに年賀状

兵庫県 広瀬 房江

二〇〇〇年ヒョイトくわえて龍昇る

終い風呂磨き一年締めくくる

皆帰り一人の自由蜜柑むく

大阪府 小泉 ひさ乃

午前様しずかに茶漬食べている

入れてから気が付く切手貼り忘れ

あるがまま生きる余生に人が寄る

大阪府 中井 正秀

爺ちゃんが乾布摩擦をやりだした

若い気へ少しと忘れしてきたぞ

好きなだけ持って帰れと吊るし柿

大阪府 榎本 舞夢

願い事まで控え目になってきた

ミレニアム静かに明けて初日の出

ミレニアム空っぽの壺用意する

賀状きて疎遠の人を思い出し
衝動買いタンスの底であくびする
幸せを感謝しながら生きている

大阪市 辻川 咲

公約は額面通り受取れぬ
健康はまかせなさいと万歩計
遊ぶ子がいないブランコ大欠伸

高槻市 乙倉 武史

心地よい言葉に弱いイヤホーン
しみじみと年と向き合う影法師
すぐ弛む涙腺まだまだ惚けてない

高槻市 江原 秀夫

ダイヤモンド富士を眺めた二千年
エンデバーに日本飛行士加わって
寒の入り花の苗木は皆萎えた

和歌山市 岡本 八重子

らしさを求めざくろエキスを飲んでみる
叩いて揉んで動かしている古時計
デビットカード時代先取りして走る

和歌山市 上地 登美代

いい夢を見たくて枕サラにする
同居して時代の波にのって生き
ほほどの仕合せでよい老いの日々

和歌山市 和田 美寿子

おしやれだなむらさきいもとという名前
苦労話か自慢話か老い二人
どの皿もあまさず食べて帰省の子

和歌山県 森下 順子

渡りきるまでが油断のならぬ橋
耳元のあなただけに乗せられる
うっかりの口が約束反故にする

和歌山県 中村 君枝

ふる里の風が大好き竜字風
新世紀記号が守るわが命
自分史へ正直に書く体脂肪

伊丹市 延寿庵 野鶴

冬木立医師と患者の車椅子
海峡の大橋見える冬木立
極行く道の見事な冬木立

尼崎市 内田 美也子

子の苦手親も苦手で役立てず
ポケットにあとの祭のメモがある
気まずくて勘定書が宙に浮く

豊中市 江見 清

嫁のこと日記の中に賞めたたえ
過去形の話ばかりの老いの友
血圧を比べあつて老い二人

川西市 田中 喜俊

出雲市 加藤 スズコ

襖越し見知らぬ客に息をのむ

ばたん雪地球のよこれ消すように

進メ止マレ川崎大師の初詣で

安来市 原 煩惱児

これからと卒寿の母が尻たたく

故郷で肩の凝らない出雲弁

いい涙国歌流れる表彰台

島根県 福岡 博利

四島を返す約手は不渡りだ

角ばって誠の一字で生きた亡父

釈文が万葉がなで読めません

横浜市 三村 八重子

四面楚歌身を低くして爪を研ぐ

老医師が歳のせいだとき放す

カウンタダウン花火爆ぜいて世界沸く

横浜市 布山 嘉信

鼻ピアス元祖の牛が嗤ってる

ほそぼそとした灯がともる町工場

国旗国歌 遠く軍靴の音がする

横浜市 保田 絹子

二千年自然の畏敬忘れまい

年男運が向きそう籤を買う

休日にはパズルで脳の活性化

横浜市 生坂 サト子

福袋中身の夢に惑わされ

お互いに癒しの言葉待っている

スラングをバイオリズムのせいにする

横浜市 伊藤 ふみ

交叉点時々魔物踊り出る

喪中でも賀状いただき嬉しがる

買物のついでに愚痴を置いて去り

横浜市 金森 徳三

千年紀またげた足に感謝する

コンビニが近くに出来て若返る

人を見る一度で付かぬガスレンジ

東京都 吉田 土風

コンピューター打込む女の手の早さ

子の荷物なるのを避けて一人生き

有るがまま流れに身をば委ねよう

東京都 清原 悦子

胸さわぎしている私恋かしら

子育てを終えてゆつくり歩いてる

道端の草に人生重ねてる

浜松市 岡本 まち

来ても良し去ってもよしの孫五人

嬉しくも淋しくもある娘の意見

五つ子ちゃんチャイルドシートどうするの

鳥取市 岡田 信恵
昇り竜明るい未来託したい
お正月まめを願って豆食べる

鳥取市 山口 千代子
身から出た錆が哀れなノックさん
近過ぎて親の恩には気が付かず

鳥取市 近藤 秋星

鳥取市 宮脇 道子
落ちるだけ落ちたら上るほかはなし
どうにでもなれと度胸を決めて生き

鳥取市
引き攀じった鱗落して年始め
化粧して渴いた心色を染め

鳥取市 高尾 京

鳥取市
親友二人誘い合わせて蓮の葉に
手を握り迎えたかった二千年

鳥取市 山下 節子

鳥取市
基準超すタイオキシンにおびえてる
招待の顔ぶれで知るお家柄

鳥取市 山岡 久枝

鳥取市
賀状きて元気な姿目に浮かぶ
主婦だもの家計黒字に締めくくる

米子市 小塩 智加恵

米子市
娘の恋は賞味期限がすぐ切れる
ペテランの主婦も油断で指を切る

米子市 猪森 スミエ
シャリシャリと縄縋った手の生命線
食欲に注意信号棒グラフ

大阪市 筒島 文枝
新春を迎えて思う遠き友
遠くいて思う故郷古いまま

大阪市 中村 叡子

大阪市 熊代 美智子
新聞がやつとエログロ排斥す
梅の香が匂い始めて春ほどけ

大阪市
靴音で今日のごきげんよくわかり
手招きをしなかったのに貧乏神

大阪市 伊藤 博仁

浪花節テレビ機敷の老夫婦
酒好きと知って快気へ酒二本

八尾市 與田 明

のんびりの元旦も聞く救急車
低金利やがて預り料がいる

八尾市 鷺見 章

木枯しにドツブリ窓に日が暮れて
夜食待つ長い時間を耐えている

寝屋川市 岡本 勲

菌の治療終って旨さ取り戻す
メリツトないが出るとき何故か万歩計

二〇〇〇年難なく越せて寝正月
枚方市 二宮 紫鳳

幸祈る小春日和や初詣で

高槻市 西谷 治三郎

防犯のポスターは署の各部屋へ
散髪し行くあてのない定年後

泉佐野市 大工 静子

十三回忌の亡夫にお迎え頼んどく
子を抱いて階段転ぶ母を見た

岸和田市 不破 仁緑

猿沢の池の辺りで鐘を聞く
乾パンと水持て余すお正月

堺市 丹後屋 肇

鎮魂の点灯どよめく人の波
寒鮒の浮子と終日せめぎ合い

奈良市 渡辺 富子

家族の和乱す手紙が届けられ
三浪へ力うどんの応援歌

奈良市 田中 賢治

南大門お辞儀上手な鹿が待ち
年金を貰い出したら医者通い

生駒市 橋本 洋子

見えずぎて困る事ある眼鏡です
赤ちゃんの手にも小さな結婚線

滋賀県 中 宗明

ふる里は鳥取ですと胸を張る
長い春ようやく叶う披露宴

和歌山市 武本 碧

良いところいっぱいあると元気づけ
ミレニアム紫式部揺り起こす

和歌山市 上地 忍

湧き水を貰い迎えた三箇日
ホッカイロ三つも貼って戎さん

尼崎市 河津 正治

篝火を焚いて迎える除夜の鐘
秘めごとが思わずばれた二日酔

尼崎市 軸丸 勝巳

決ったが日の丸見えぬお元日
子や孫に聞かず国債いいのかね

兵庫県 安達 厚

読経する大声でする健康法
お互いに似てとけあつて五〇年

岡山市 清水 金太郎

今年から安いお酒で我慢する
年金へつき合い事が多過ぎる

岡山県 土居 ひでの

絶景をカタコトガイドに案内され
故郷の香りを詰めた雑煮餅

倉敷市 森本文子

侘び住居少し納得して生きる
誉め上手主幹の魔法よく掛り

島根県 毛利幸

身のまわり喪中欠礼多くなり
悪いけど寢床で拝む初日の出

出雲市 伊藤玲子

まあ一献言いたいことを聞いてあげ
気がきいてあれやこれやと頼まれる

香川県 松村輝夫

三宝に心が籠もる丸い餅
真面目そうだから嫁さん来てくれぬ

高知県 桑名孝雄

文武両道じいの時代に戻ったぞ
盃が大きく見える二日酔い

宇部市 中田忠夫

真っ直ぐに釘が打てない臍まがり
犬連れて妻の散歩の長いこと

新潟県 高野不二

家中の時計は貰いものばかり
独身税国もそこまで気がつかず

千葉県 大川晩翠

二〇〇〇年ハッピーマンデー乗り変える
生一本律儀な人が減って行く

野田市 那賀島雅子
なぐさめの言葉がほしく長電話
電話での強がりいつか泪声

吉本川柳

第9回 「汚ない」 選評 河内 天笑
投句先 5425 大阪市中央区難波千日前11-6
〒0075 吉本文芸館(06-6643-7799)
投句締切 3月11日(便箋に3句以内・80円切手5枚同封)
没句評判会 3月24日(金) 午後6時 吉本文芸館

祝二〇〇〇年

川柳塔唐津支部

相葉あき	仁部四郎
井上勝視	浜本久仁於
岩崎實	樋口輝夫
市丸晴翠	山口高明
久保正剣	山門幸夫
宗水笑	山門タミ
田口虹汀	

大空の、い、ろ

(110)

橘 高 薫 風

まちつく・ベッド

麻生 霞乃

あんまり無口なのも親しみ悪いが、奥底にない事を捲し立てるのも疎ましいものである。こんなことを考えると私は益々日常茶飯事の挨拶にまで、右すべきか左すべきかに迷わされるのである。

假に途中で人に遇った場合、唯「今日は」と言っても挨拶であれば「どちらへ」と訊くのも挨拶である。「やあ」とか「まあ」とかあつさり片付ける方法もあれば、相手に一言も切込ませる隙のない位流暢に、時候の移り変わりから、無沙汰の詫び、向うの肥えた事、こちらの瘦せた事、序に家のごたごたまで一遍にぶちまける法もある。

お互に敬い合い親しみ合う事が挨拶の目的であるならば、余程相手の気持を吞込んでからなければ、到底相手に親しみを感じさせる事は出来ないのである。商人には商人の軽さで、学生には書生気質で呼びかけるのが、ほんとの挨拶であろうと考えるのであるが、そんな事はあらゆる社会を通り抜けて来た通

人でなければ、手際よくやり終うせない芸当である。私のような者は、真正正銘、何処を叩いてもそんな魅力のある挨拶の出よう筈がないと諦めている。第一、相手の意識せねばならん事からして、一番肩の凝る仕事である。

日本人に生れて日本語さえ適切に使いこなせない私が、まんまと無傷なワン・センテンスを発見し、扱ってそれを無調法な口から吐き出さねばならん時に、まだ、その上に先方の性格まで考慮に入れなければならなかったり、その場の雰囲気を見渡さなければならなかったりする事は、私にとつては拷問にも等しい責苦であると考えるのである。世間並の挨拶は作句以上にむづかしいものであるのに、ふつと眼が覚めたら、實際雀が鳴かぬ日はあつても、この挨拶せめに合わない日はない。

世間並の挨拶が面倒だからと言って、山奥へ通れて蔵でも嚙つていたら、屹度、又世間並の五月蠅さが生む文明の利器をありがたがるに相違なからう。又、社会の一員として生存している限り、遁世は卑怯な振舞でもある

し、假令僅かでも腰を掛けさせて貰つていれば、お役目も果さなければならぬと考えているので、私は極めて巧利的な方法を案出した。それは唯私の脳のスイッチを切変えさすれば、忽ちにして現われるマチック・ベッドなのである。マチック・ベッドは静かである。私一人限りである。

雨が降って花が咲いた。風が吹いて花粉が散った。人間の感情もその通り、自然の力に触れて絶えず動いている。人間の思想も撓みなく流れている。その流が広々とした大洋へ押し流される時には、昔は山肌をつたって居た清水であつた事を忘れて居るかも知れないのである。私は刻々に移って行くその心の姿を永遠に葬って終いたくはないのである。洋装をした時に、浴衣を着た時に写真を撮るのと同じ気持で私は作句精進を続けて、句を楽しむ合うという欲望を持つものである。

人の句を楽しむと言う事は、自分の心にハーモニーする楽器を探し求める欲望ではないだろうか。自分の句境が管楽器である場合、勢、絃楽器を求める傾向もあるであろうが、又他の管楽器ともよくハーモニーする事もあるのである。日本全国川柳家の真面目な作句精進こそは、虚空に渦巻く、香り高いグラウンド・バンドであると考えられるのである。

愛染帖

波多野五楽庵選

不倫の火消せず背中に刺さる風
おはこならイブモンタンにしておこう

和歌山市 川上 大輪

手の中で丸めた風が膨れだす

和歌山市 千歩

世渡りが下手で長生きしています

八尾市 高杉

想い出を裁ち切る廃品回収日
衣食住関心のない鬼とすみ

大和高田市 鍛原 千里

疑えば切れない冬の赤い薔薇
あいまいな空間にある過去一つ

岡山県 山本 玉恵

亡夫の樹をゆする 涙のかわくまで

岡山県 山本 玉恵

逆境に立つて素顔を整える

岡山県 山本 玉恵

胃は丈夫首から上が病んでいる
幸せがきそで首をたてに振る

岡山県 山本 玉恵

絵心へ花の命は短すぎ
出せせぬ顔居酒屋の灯に晒し

岡山県 山本 玉恵

水平線あなたの名前呼んで見る
豊かさはないが笑いの洩れる家

岡山県 山本 玉恵

瓢箪の口を大きく開けておく
基会所で出合い基会所で別れる

岡山県 山本 玉恵

先頭が蹟きどつと皆転び
生き様の重し死にざまお重し

岡山県 山本 玉恵

濃く淡く地を這う如く長い影
千柿に白粉塗す 雪ん子か

岡山県 山本 玉恵

晴れやかに葬を送って下さいね
裁かれるたびに泉の水掬う

岡山県 山本 玉恵

ミレナリオ世紀末へと駆り立てる
チャレンジに未だ脈がありベン握る

岡山県 山本 玉恵

隔世遺伝などとうそぶく丸い背な
天の声少し聞える歳になり

岡山県 山本 玉恵

犬猿の刺戟楽しむ嫁姑
ここで根を下ろすと決めた港町

岡山県 山本 玉恵

相思相愛この魂魄をいかにせん
断ち切れぬ思いを胸に追いかける

岡山県 山本 玉恵

シーソーに小石を一つ抱いて乗り
勿体をつける私を袋綴じ

岡山県 山本 玉恵

わだかまり解けて明日が好きになる

岡山県 山本 玉恵

富田林市 藤田 泰子

濃く淡く地を這う如く長い影

富田林市 藤田 泰子

千柿に白粉塗す 雪ん子か

富田林市 藤田 泰子

晴れやかに葬を送って下さいね

富田林市 藤田 泰子

裁かれるたびに泉の水掬う

富田林市 藤田 泰子

ミレナリオ世紀末へと駆り立てる

富田林市 藤田 泰子

チャレンジに未だ脈がありベン握る

富田林市 藤田 泰子

隔世遺伝などとうそぶく丸い背な

富田林市 藤田 泰子

天の声少し聞える歳になり

富田林市 藤田 泰子

犬猿の刺戟楽しむ嫁姑

富田林市 藤田 泰子

ここで根を下ろすと決めた港町

富田林市 藤田 泰子

相思相愛この魂魄をいかにせん

富田林市 藤田 泰子

断ち切れぬ思いを胸に追いかける

富田林市 藤田 泰子

シーソーに小石を一つ抱いて乗り

富田林市 藤田 泰子

勿体をつける私を袋綴じ

富田林市 藤田 泰子

わだかまり解けて明日が好きになる

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 木本 朱夏

急がねばノアの方舟閉ざされる
嬌声が過ぎて広場のさむい闇

和歌山市 木本 朱夏

能面の裏に三つの寒い穴

和歌山市 木本 朱夏

人間のおもちゃにならぬカラスたち
同じ目の高さで語り合える友

和歌山市 木本 朱夏

芽吹いたら名前をつけてくれますか
薔薇の刺 自信過剰になつてくる

和歌山市 木本 朱夏

憧れた人のその後は聞いてない
錯覚をしたまま五十年が過ぎ

和歌山市 木本 朱夏

半分は欲でがまんの落し蓋
一泊の旅を家出のようにする

和歌山市 木本 朱夏

ばたん雪脳に錆びどめぬつておく
くちびるを結んで父と対峙する

和歌山市 木本 朱夏

小野 克枝

和歌山市 木本 朱夏

さえきやえ

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

雄々

和歌山市 木本 朱夏

泉佐野市 稲葉 洋
わき見したとたんに風に逆になる

茨木市 藤井 正雄
さようなら笑いを一つ付けてやる

枚方市 海老池 洋
本心は犬と遊んでいたい犬

和歌山市 武本 碧
今更にいたずらでしたとは言えず

高槻市 左右田泰雄
出会いがしらに心変りをしたドミン

鳥取市 坂田和歌子
玩具箱でてからピエロ帰らない

松原市 小池しげお
どうとられようと石が置いてある

川西市 松本ただし
抜け殻があればこれ口を差しさむ

弘前市 斉藤 岳
失った日々よ三年味噌の味

香芝市 大内 朝子
二〇〇〇年はがゆいボクを脱ぎ捨てて

横浜市 芦田 鈴美
カーナビに誘導されて行く名所

枚方市 寺川 弘一
花道が花盛りとは限らない

寝屋川市 太田とし子
逃げるほど恐くはないが近よれず

京都市 都倉 求芽
他意のない咳払いが座を乱し

尼崎市 田辺 鹿太
中流の意識のままで食う茶漬

和歌山市 吉村さち子
月並の答でここは逃げておく

今治市 越智 一水
あたたかいお茶空間を埋めてくれ

和泉市 中川 楓
鈍色の海へ投げうつ冬の鬱

美祿市 安平次弘道
曖昧なことが嫌いな時刻表

鳥取市 小谷美ツ千
鎚を削る人さし指のある限り

弘前市 富士 慕情
思惑あり池に小石を投げてみる

今治市 野村 清美
ボロボロの心繕う母の海

寝屋川市 坂上 高栄
個性派という一癖をほめられる

横浜市 保田 絹子
遺された絵巻が語る世の輪廻

米子市 鷺見 正子
不景気と聞いて小判が出たがらぬ

和歌山市 青枝 鉄治
人柄が好かれリストラ免れる

羽曳野市 森田四三郎
入社時は腰掛け今は首を賭け

岡山県 福原 悦子
未来像迫るとベンが重くなる

黒石市 相馬 一花
雪原の陽にサンクラス買わされる

唐津市 山門 タミ
よそゆきを脱いでふだん着ホツとする

大阪市 小林 周信
ミレニアム複眼志向で生きていく

鳥取県 乾 隆風
ちぐはぐに三拍子打つ存在感

鳥取県 谷口 次男
トップにはなれぬ男の手相観る

岡山県 矢内寿恵子
生き抜いた顔だ大事にしておこう

鳥取市 福田 登美
親友と自分勝手に思い込み

今治市 野村 京子
円周の外に出たがる冬のばら

藤井寺市 高田美代子
住み馴れた街です風を知りつくし

青森県 西谷 大吾
地吹雪が止んでポツンと無人駅

鳥取県 土橋はるお
亡父の軍歌が五右衛門風呂に浮いている

横浜市 秋元 和可
花屋から鉄砲百合に狙われる

砂川市 大橋 政良
但し書きでんでん虫が死んでいた

尼崎市 長浜 澄子
脱皮してみよとか赤いホツチキス

八尾市 村上 剛治
努力しているのに運はそっぽ向く

倉敷市 井上 富子
歳時記を繙く春のむしめがね

吹田市 石原 靖巳
生命線の長さ素直に喜べず

八尾市 山本 至

富田林市

池 森子

コント弾けて視野は二十一世紀

横浜

豊田 羊子

捨てられた花束理由をききたがり

川崎市

和泉あかり

すじ雲が動いて空が痒そうた

海南市

三宅 保州

米寿なおかくしゃくとして短気なり

吹田市

山本希久子

どんぐりの森へどんぐり身を隠す

和歌山市

古久保和子

平行四辺形箱も私も潰れそつ

横浜市

近藤 道子

煮ごりをゆつくり溶かす春の闇

鳥取県

林 露杖

俯いてあとの一言呑み降す

鳥取県

石谷美恵子

ハイハイハイ七彩のいい返事

西宮市

奥田みつ子

時々自分を褒めてから眠る

岡山県

小林 妻子

顔向けの出来ぬ不孝を詫びますか

八尾市

生嶋ますみ

川底に長いドラマの石でいる

大阪市

三浦千津子

父の座が丸テーブルで定まらぬ

唐津市

市丸 晴翠

籠城の炬燵で春の光待つ

点滴の神の宿った注射針

米子市

林 瑞枝

一粒の種に限りのないドラマ

香川県

木村あきら

温度差を埋める酒なら呑みなおす

弘前市

相馬 銀波

雨傘をたたんで人の声を聞く

大阪市

一本 勇太

欲望は潜めて凜と冬木立

和歌山市

福井 桂香

長生きの血統だったはずなのに

米子市

木村富美子

謙遜の裏に自慢の顔が見え

鳥取県

西沖 彰雄

土壇場の覚悟も出来ている余裕

鳥取県

山内 芳江

靴音でわかる夫の健康度

横浜市

田中 笑子

選挙カーああ痛恨の不適切

唐津市

久保 正剣

御内聞ですと責任背負わされ

唐津市

仁部 四郎

成人式酒も煙草も馴れたもの

仙台市

川村 映輝

へこんでる杭をわざわざ打ちにくる

八尾市

村上ミツ子

只管に信じB面見てしまふ

和歌山市

山口三千子

説教のあれは我が身にしてるんや

大阪市

渡部さと美

新聞のコラムで拾うア・カ・サ・ナ

羽曳野市

吉川 寿美

Y2K世界の初春をまどわせる

尼崎市

春城武庫坊

のし袋義理の深さへ迷わされ

横浜市

菱田 満秋

何という才能もなく平和です

西宮市

西口いわゑ

八十になったらプラトニックラブ

豊中市

田中 正坊

ご先祖さま廢屋にしてしまいました

堺市

志田 千代

末端から殺す不況というドラマ

和歌山市

榎原 公子

妊婦用のシートベルトで丁度良い

和歌山市

楠見 章子

あの時のわたしはどうかしてました

和歌山市

玉置 当代

つますいた石から生まれ出たコント

堺市

宮本かりん

表札も門も変らぬ世紀末

唐津市

田口 虹汀

時と言う味方にいつも助けられ

鳥取市

夏目 健一

粋がって子のジーンパンを借りて穿く

大阪府

澤田 和重

とつに不用の合鍵持つている未練

八尾市

吉村 一風

子には子の目算あつてする同居

奈良市

米田 恭昌

水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から

増田紗弓

仁王さま笑えばどんな顔かしら

中島春江

いつも怒っている人ともだぶらせて……
想像がうれしくなって笑ってしまいます。

当然な事が意外と喜ばれ

吉村さち子

そうなんです。当然がなかなか出来ない。
喜ばれて更に嬉しかった姿が見えて来ます。
こんなこともさらっと句になるのですね。

念仏を唱える割に不親切

田中トシエ

エッこんな教義を説く方が……なんてこと
ありますよね。

お隣で叱られているうちの猫

広瀬房江

あー自分が叱られているような気がする。
カーテンの陰で困っている作者の顔が見える
ようです。

スケッチにいい空気で書けず

清原悦子

気持ちと雰囲気伝わってきます。

種袋の絵と似て非なる花が咲き

撰 喜子

絵も商魂なくましい。花が咲いただけまだ
よかったのかもしれない。

この顔に免じてと言う顔でなし

井上京一郎

よく使われる言葉を打ち消してみせる。い
いや、どうしてどうして。

普段着の会へ着て行くものがない

長島亜希子

さあ困った。どこまで普段着というのか
しら。こんなことありますよね。

モシモシとお辞儀している妻であり

原賢

「妻であり」に言いたいことが沢山隠され
ているような気がします。

親子酒もつれた糸が解け始め

辻川咲

そうだったのか、父と息子の誤解が解け
始めたお酒。そしてホッとしている母。

もう一本箱に戻した自制心

平達也

少しでも体のため禁煙・禁煙。

新しい鍋買う古希の台所

中村好恵

「新しい」ここに張り切っている姿が見え
てこちらも励まされてしまいます。

ドアのノブ風邪ひきらしい帽子着せ

久保田千代

ノブを掴んだ時の暖かさ「風邪ひきらしい」
と感性がやさしくて好きな句です。

褒められたからには稽古さばれない

巖田かず枝

「からには」がんばらなくちゃ……。

あの頃は足のやりばの無いコタツ

井上すみれ

今は……と賑やかな頃を思い出す。
介護掛金聞いた寝たきり起きあがり

森田四三郎

いよいよ四月から実施の介護保険。その掛
け金も負担になる。そりや大変だと起き上
った。そんな比喩もあろうというもの。

味方にはなれぬが愚痴は聞いてやり

武本碧

同感。聞いて貰うだけで安心なのかも。
鼻の先ちゃんと春風すぎった

和田つづや

「ちゃん」に人生の深みとおもしろみが込
められているような気がします。

苗香のむ

宮西弥生選

人生のおまけがとてもおもしろい
定年へ失くした時間返される

近頃はゆっくり靴がへつてゆく
しっかりと遊んでからの太い骨
死に際の世話のご恩は返せない
えべっさんの賽銭箱にある期待

母はいつも晴れのマークで動いている

夢ばかり見過ぎ溺れている金魚

うっかりと素顔をみせたバラの刺

冬の貨車女の吐息乗せてくる

バラの刺で綴る女の別れ唄

美しい紙で包もう棘の花

なでしこの素直に負けた赤い薔薇

出る杭を抜いてもすぐに生えてくる

絵の中の小鳥しきりに飛びたがる

二千年も昼寝などせぬうさぎ

モヤモヤを春の神籤に救われる

書き直すほどに勢い失せていく

嘘つけぬ顔だと母だけ信じきる

富田林市 藤田 泰子

藤井寺市 太田扶美代

芦屋市 黒田 能子

富田林市 池 森子

八尾市 宮崎シマ子

藤井寺市 高田美代子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 吉川 寿美

吹田市 山本希久子

倉敷市 小野 克枝

和歌山市 福井 桂香

富田林市 中井 アキ

大和高田市 鍛原 千里

松江市 川本 畔

鳥取市 録沢 風花

寝屋川市 岸野あやめ

横浜市 保田 絹子

岡山県 矢内寿恵子

傷心を気遣い椿そつと落ち

盛り合わせ私はパセリの役が好き

心まであげると夫に言っていない

コンビニの賑わい怖くないですか

迷惑をかけたくはなしくすり飲む

縄電車姑にも娘にも駅がない

疑いが晴れたか鳩も寄ってくる

耳鳴りは心の奥のつぶやきか

野ばらには野ばらの誇り風の中

玄関にわたしの顔を吊って置く

善人の嘘にすっかり嵌められる

受験子がいてお隣も息を詰め

回り道ばかり無駄足踏んでいる

幾千の願い受け止め星光る

つんつんと見舞いの花が毒となる

向い風うけて結び目がたくなり

二千年子の荷にならぬ生きざまを

乾かない傘の湿気が気にかかる

かぞえ唄欲のはじめの指を折り

お診たても聞かず更年期でしようか

飼い犬も主も肥り過ぎですよ

三人が寄ると静かさにも活気

怒り切れず憎み切れずに母子草

浮ききれず沈みきれずに冬至柚

潰すのも女守るのも女

和歌山市 福本 英子

大阪市 神夏磯典子

倉吉市 野口 節子

羽曳野市 徳山みつこ

西宮市 西口いわゑ

羽曳野市 西村りつえ

西宮市 門谷たず子

和歌山市 上地 忍

西宮市 奥田みつ子

松江市 銭山 昌枝

尼崎市 春城 年代

東京都 後藤 早智

出雲市 園山多賀子

和歌山市 武本 碧

鳥取市 坂田和歌子

寝屋川市 平松かすみ

鳥取県 さえきやえ

鳥取市 徳田ひろこ

熊本市 永田 俊子

横浜市 芦田 鈴美

愛媛県 黒田 茂代

寝屋川市 森 茜

和歌山市 吉村さち子

愛媛県 宮本 末子

河内長野市 植村 喜代

羽子板の羽根の行方がなつかしい
赤いルージュ捨てて女をやめますか
気まぐれな風がわたしを振りまわす
雑草魂抱いてひとりの旅つづく
預金通帳ゼロ一つ減り二〇〇〇年
忍の字で生きた大正白い足袋
また会える友にも別れ惜しみたい
うろうろとせずに越したい川がある
編み物をさせてくれない縫製炎
自分勝手個性だなんて言わせない
やさしゅうすると皆もやさしゅうなりました
自己愛のパフが車内を忘れさせ
箒目の上に枯葉が模様つけ
曇り後晴れを待ちかね白を干す
登りつめた梯子誰かに外される
神様に明日という日を予約する
ペーパーナイフちよつと卑怯ではないか
迷惑をかけない主義で出遅れる
火も水も包んで母の手の厚み
誰も口にせぬ言葉で自信くれた亡夫
鉢底の営み見せず咲いた花
先送り出来ない性で不眠症
動けるうちには心に化粧する
青い鳥掴んで春の仲間入り
又聞きが有らぬ方へと行きたがる

貝塚市	池田寿美子	八尾市	村上ミツ子	寝屋川市	籠島 恵子	岡山市	大森 純子	鳥取市	岸本 孝子	鳥取県	西原 艶子	岡山県	富坂 志重	和歌山市	桜井 千秀	香芝市	大内 朝子	鳥取市	植田 一京	今治市	塩路よしみ
藤井寺市	鴨谷瑠美子	八尾市	清水 潮華	横濱市	田中 笑子	横濱市	田中 笑子	米子市	木村富美子	倉吉市	米田 幸子	香川県	川崎ひかり	八尾市	高橋 夕花	鳥取県	石谷美恵子	大阪市	三浦千津子	米子市	林 瑞枝
八尾市	高杉 千歩	鳥取市	福田 登美	八尾市	生嶋ますみ	松江市	安食 友子														

髪染めていま手が離せないという
耳遠い二人でボタン掛け違え
あと少し続けてみよう妻おんな
年末に売りがつる胃腸薬
花活けて花のいのちと向かい合う
出世魚ささいな事にこだわらぬ
旅馴れか歳かリュックにスニーカー
聞き上手作り話に疲れ気味
煩惱はミレニアムでも百八つ
あの日からチグハグになる咳ばらい
刻まれたみけんの皺に悔いがある
どの顔も花の咲く道笑い皺

泰子さんの句―作者の句には表現方法が巧妙で引つ張られる。
「人生のおまけ」も然り。長い人間生活、特に熟年の佳境に達し
ては、ずばり「おまけ」なのであろう。充分に深く味わって、せ
いぜい長生きしたいものである。扶美代さんの句―私の実感句で、
しみじみと味わっています。若さのすべてを企業に捧げた現役時
代、沢山失ったものがある、が沢山勉強もさせてもらった。フリ
ーとなった今日は自由に泳がせてもらい、貴重な熟年を味わって
いる事に感謝している。この句で改めて定年の意義の深さを知る
事が出来ました。能子さんの句―「ゆっくり靴がへってゆく」こ
れでよいです。現実を確かな眼と肌で凝視しているのが素直で
よい。加齢するに従って自然の姿になる。大事なことは自然体で逆
らわないでいること。ここまで来ると闇の向こうに光が見えるの
み、一生感動、一生青春でありたい。森子さんの句―「しっかり
と遊んでから云々」にはいろいろな含蓄があるが、はじめから「し
っかり」と強めた言葉が森子さんらしい。視野いっぱい体をさら
して、大きな人間に飛躍をしたいものです。

鳥取県	土橋 睦子	鳥取県	岩崎みさ江	横濱市	山下 省子	横濱市	秋元 和可	岡山県	山本 玉恵	尼崎市	長浜 澄子	大阪市	津守 柳伸	米子市	小塩智加恵	大阪市	板東 倫子	富田林市	片岡智恵子	東大阪市	北村 賢子	横濱市	伊藤 ふみ
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------

ふだん

木村春枝選



ふだん着で見舞ってくれる温い友
宅配便ふだん着で来る里の味
ふだんよりやさしい妻だ何がある
ふだんなら買わないクジも旅のこと
普段には見えないものが見えて新春
母の勤何時もと違ふ子をキヤツチ
構え方知らずふだんの生地で生き
ふだんから沸騰点を抑えてる
ふだんには見せない父の目に予感
素顔にはホームウェアがよく似合い
ふだん着の母がほんとははである
ふだんより早い帰宅の呼ぶ波紋
職退いて妻のふだんと噛み合わず
優柔不断そんなおとこに逆らわぬ
余所行きもふだんも白い飯を食う
ふだんから根回しできている流れ
待ったなし世紀不断の季がめぐり
ふだん着のまま出て行つてそれつきり
星の位置ちがうとやはり不気味なり
ふだんから他人の前ではおとなしい
ストレスを溜めぬふだんを生きる知恵
喪の日にもふだんと同じ朝がくる

鉄治 強一 靖巳 四郎 アキ 潮華 彰雄 健一 庸佑 満秋 たず子 周信 あずき ひかる はるお 千里 螢 啓子 和歌子 重人 朝子 あずま

ふだんから大分貢いでいたらしい
お茶漬でやつとふだんの顔になり
本当のお洒落ふだんに気をつかう
二人だけのふだんを毀す子が戻り
留守のはずふだんと違ふ音がする
ふだん着の中に詰つていた本音
ふだんとは違ふと嘘を見抜かれる
心底を見せてふだんの顔になる
優柔不断試着室から出て来ない
客帰りやつとふだんの飯茶わん
花冷えにふだんの風で火がもえぬ
通夜の席ふだんの不仲しまい込む
ふだん着に味がこぼれる台所
普段から付き合いくいのも隣
普段着に着替え仮面も取り外す
佳
ふだん着の言葉でお礼言い交わす
母危篤ふだんの覚悟置き忘れ
ふだんと違ふものを探しに途中下車
ふだん着で不整脈打つ人に会う
他所行きもふだんの顔も知る鏡
人
ふだん通り春が来るから生きられる
地
他所行きの裾に尻尾が見えている
天
二三本輪ゴムをはめているふだん
軸
七変化ふだんの顔に戻る夜
小池しげ

妻 由一 美代子 一 齋 仁 緑 不二 よしえ 大輪 雄々 英子 狸村 善信 尚士 日枝子 哲男 扶美代 正雄 鐘造 俊子 あき

紺碧の空に弾んだスニーカー
紺色の布団に糊が利っていた
アルバムに母若き日の紺紺
茄子紺の色も若味もいい朝餉
大正の名残りを秘めて紺紺
溜息をつくには空が紺碧すぎる
紺紺亡父の匂いが染みている
なす紺の一味違ふ糠の床
高級になった野良着の紺紺
リクルートスーツに風が冷たすぎ
紺がすり茶摘みの歌が聞えそう
紫紺旗をねらう球児の意気盛ん
紺碧の空に心の飢えを知る
紺紺あんこ棒も夢を見る
漬けなすの紺が映えている白い皿
紺青の海にヒントが浮いている
美人です駅弁売りの紺紺
迷つたら紺のスーツで出かけます
大原女の紺の紺が春を売る
紺碧の海に龍宮きつとある
糠床にほどよく漬かる茄子の紺
紺がスリ妻が端切れをためている

紺

高杉千歩選



靖巳 善信 白光子 タミ 和枝 ひでの 剛治 英子 水笑 重人 照子 宗明 雄々 活恵 智加恵 帆雀 次男 美代子 とし子 よしみ ますみ 保夫

紺碧の海へくじらのおらが土佐
紺紺のままで案山子も年を越す
民謡のとても好きな紺紺

警察の紺の制服汚染され

紺碧の空から元氣貰つて

袖温い亡母の形見の紺がすり

おめでたい席は黒より紺を着る

想い出のモンペは母の紺がすり

刺髪に紺の作務衣が似合つて

紺碧の海へ散骨言い遣す

内定を掴む気迫の紺スーツ

アルバムに若さ溢れる紺がすり

紺碧の空 決心鈍らない

秘伝継ぐ河内木綿の紺の艶

紺碧の大海原に戦友を呼び

佳

まなつらに紺の野良着の亡母がいる

紺碧の海を人間食い尽くす

濃紺の茄子に季節のないバイオ

戦争の悔い眠つて紺紺

紺碧を水平線に分けられる

人

始めての紺の背中は父の線

地

初出勤茶髪も紺で決めている

天

紺碧の海に還つた父の骨

軸

青春の想い出紺からぬけ出せず

カ
ー
ド

丹下美津子選



カードきる女の爪が魔法めく

テレホンカード使い果して恋終る

手品師の手からカードが湧く不思議

カード一枚地獄極楽秘めている

暗証の数字に秘めた謎の恋

カードばかり使つていつか蟻地獄

貧相のゴールドカード怪しまれ

タイムカード押すと踏絵をふまされ

カードまで渡し他人でない二人

キャッシュカードこんな便利な無駄遣い

誘惑に弱い女のクレジット

えらいことカード持たずに出て行つた

温暖化イエローカード出す地球

取つときのカードを持つている自信

ジョーカーを引かされたなと目でわかり

佳

テレホンカードみんな使つて退院日

フルムーンカード一枚しのはせる

好カードのままきよならをいうつもり

ただ貰うようにカードで買っている

カードから振り回されている母娘

人

星占い魔女のカードに賭けた運

九回の火花はじける好カード

潮華

洞庵

風花

潮華

次男

寿恵子

強一

ツ
ネ

仁
緑

まさ
と

ひかり

一壺

よし
み

度

雄々

勇太

狸村

東雲

靖巳

あきら

タミ

あ

たもつ

みつこ

宵明

虹汀

鐘造

ただし

た

た

た

た

た

た

た

た

初歩教室

題 本

吐田公一

川柳ではよく一句一姿と言われる。創作された一句の姿が大切であり、人間でいうなら

八頭身美人である。八頭身であるためには贅肉があつてはならない。できる限り贅肉を削ぎ落すことが第一要件とされる。例えば

○大学の袍に詰まるマンガ本

この場合末語の本は贅肉となる。何故なら、袍に詰めてあるとなれば一応本ということが推定できるからである。この本の二音字を削ぎ落して推敲してみると(余り美人とは言えない)

▽大学のカバンにマンガばかり詰め

傍点の表現によつて現代学生氣質が標榜されるのではなからうか。これは今回の本の一例であるがこのような句が随所に見受けられた。

添削句

○近頃はだんだん積ん読ようになり 春江

上五を老眼とか老齢という表現にすれば

▽老眼が積ん読癖をつけはじめ

○装飾をはずすと本質まで消える セツ子

装飾より虚飾の方が適切かと

▽虚飾とりはずすと本質まで変り

○つん読にしないと誓つて本を買つ 勲

これは全くの説明句

▽必読の誓いも空したまる本

○飾るから本が欠伸をくり返す 輝夫

オーバーだが見付けはいい。飾るからではなく、飾られてと受身の方がいいのでは

▽飾られて本は欠伸をくり返す

○停年を推理小説と睨んでる 知華子

推理小説とするよりあつさりと

▽停年へ読みたい本がたんとあり

○花の名所を手にとって一人旅 紫

手に持つてだけでは本とは限らない。パンフレットも然り。

▽花尋ねガイドブックと一人旅

○色々と本を並べて読むマンガ 志重

隠し読みの情景とすれば

▽勉強の本で隠して読むマンガ

○本を買つと言つ子を親はつい信じ 宏子

できるだけ川柳は五七五に。本をのをは省

いても意味に大きな変化なし。

○二〇〇〇年積んでる本に陽をあてる 邦昭

下五の表現は誤解を招き易い。

▽積ん読へ挑戦誓う二〇〇〇年

○うたた寝の本を枕にどんな夢 宗明

下五がややお粗末

▽広辞苑枕で学者になった夢

○六法全書はこりを被っている平和 千代

「を」は省略しても表現内容に何ら差支えない。で中八を中七に

○つらい時落ち込む時も本が友 深雪

原句とは内容が異なるが(本来添削はてにを。は程度をよしとするので)

▽消沈へ読書をバネに立ち直り

○コンビニで立ち読みしてる求人誌 四三郎

コンビニでは川柳にならない。今や社会問題化しているリストラを持つてくると

▽リストラが立ち読みしてる求人誌

○八十路坂介護の本を拾い読み 栄翁

上五をもつと端的に表現すれば――

▽気にかかる介護の本を拾い読み

○本を読むうなじを見せた女学生 幸枝

見せただけでは訴求力が乏しい。

▽本を読むうなじに女匂う部屋

○育児書を読み過ぎ迷い行き詰り 芳江

中七が冗長。内容はその通りだが

▽育児書を頼り子育て行き詰り

○絵本から今でもあざやか祖母の声 洋子

できる限りリズムを大切にす意味から、

今でのもので削除(推敲)を

○料理本読んでいるのはパパの方 トヨ子
言わんとするところは分るが表現が弱い。

▽料理本読んでるさいババの膳

○末席で広がっています週刊誌 てる代

単に広がっていますより暇をもて余す様子を

詠んだ方が面白い。

▽末席で無聊なくさむ週刊誌

○若い頃読んだ感動生きている 志津香
感動がいただけなかった。

▽若い頃の読書が今も生きている

○水をほしがるボロボロの辞書 (例) 玲子

七七の句は面白いが上七の意味が分り難い。

▽ボロボロの辞書捨てられぬ青春譜

○大掃除出した古本また仕舞い 勝久

出した本を仕舞うのは当然のことで、これ

は説明句となる。

▽大掃除思わぬ古書に手を止める

○読まぬ本置いておくのもインテリア 和可

上五が言わずもがなの表現

▽全集を飾る書斎のインテリア

○退職の夢は雨説と本揃え 美恵子

下五がこの句を平易にしている。

▽退職の夢は晴耕雨読とす

○安く買い高く売ります古本屋 つよし

商売では当然で着想が甘い。句異は異なるが

▽珍本と知らずに買った安い古書

○逆貞繰る癖があり意味はない 篤子
下五が遺憾。年をとるとすぐ筋書を忘れる。

この点を読み込むようにすれば――

▽筋書を忘れページを逆戻り

○老い目を悩ます文字の文庫本 よしこ

上四音字。リズムが悪い。

▽老眼を悩ます文庫本の文字

○借りた本返した時に余韻消え 梓

下五に今一つ共感を覚えたい。

▽謝辞添えて余韻と共に返す本

○本離れビデオ童話がよいと言ふ 純

今のお子様は確かに本離れ。下五を添削

▽本離れビデオ童話が好きな孫

○歴代の宰相語るマンガ本 智加恵

マンガ本にされたから面白いのである。歴

代は省いてよいのでは

▽マンガ本にされた宰相物語

○傘の中心心言えぬ雨あがり 茂代

傘の中と雨上り。何か矛盾しているよう

▽本心が素直にいえた傘の中

○老眼鏡敬遠してる文庫本 宏

よしこさんの句をご参考に

佳句

本籍地変え人生のやりなおし 方子

本箱にテープばかりが幅さかす 五月

輪になって本音の火花膝を打つ ふみ

本棚のヘソクリも出る大掃除 賢治

青春の図書館だった古本屋 緑骨

姑の死へ嫁の本心垣間見る 正雄

アドリアが台本よりもきいたギャグ 泰雄

読書好き俺に似てると子の自慢 トシエ

日だまりに本一冊と昼寝する 美也子

波風をたてぬと本音伏せておく 賢

本心の見えかくれする世辞を聞く 靖雄

直木賞もらってからの肩のこり (彌) 玲子

立ち読みが目当の本を離さない 尚士

くすりより眠気をさそう本を読む 民子

本心を語れず跪く水面下 敬之介

本心を言えばあなたが逃げたがり 美智子

本棚の顔に名作集を置く 勤

懲りないで六法読んだる堀の中 美弥子

アルコール抜きの本音で酔わされる 純子

コーヒータン本に憑かれて時忘れ (園) 玲子

ここだけの話と本音でるのれん 一典

歯一本欠けて歯車くい違ふ タツエ

(諷刺の効いた句)

一本の木に逢いにゆくにぎりめし 美寿子

(余韻のある句)

積木も本も一緒にねむる玩具箱 郁子

(磨きのかかった句)

根本が揺らぐと何も見えてこず

本社 二月句会

二月七日(月)午後五時半

アウィーナ大坂

二月の寒気のなか、会場へは百六名の参加があった。はじめ、一月に同人二人、田中透太氏(羽曳野市)と川上富湖さん(和歌山市)が相次いで亡くなった悲しい報せがあり、黙祷を捧げる。とり分け富湖さんは、十二月までお元気に活躍されており、余りに早いその死に驚きと悼みの声があちこちで聞かれる。

夫君大輪氏から生前の感謝と、お悔みに対する御礼の挨拶があり、短い間であったが妻は花を咲かせることができたことをせめてもの慰めとし、今後は二人分頑張るつもりと述べられた。

お話は副主幹の宮口笛生氏、昭和16年に当時の国鉄に奉職、機関区に配属となった。見習い期間中、折角憶えた名称も、敵性語の為ホイラーと言えず釜道と言ったりした。

19年機関士となり以後26年間蒸気機関車を動かした続ける。その間、自殺を含む10件の人身事故を起し、警察で取調べられたりもした。

大鉄局に、短詩文芸の会があり、文章を書いたり、俳句、川柳に親しむ。盆正月も休みなく働いたボツボツ屋の生活を思い出しながら、なつかしく語る。

月間賞は初出席者である北野哲男氏(三田市)に輝く。

(司会―遠野) (記名―澄子・希久子)
(受付―典子・あやめ) (清記―希久子)

席題「逃げる」 山海友照選

逃げ道にこっそり母のにぎり飯子を叱る前に裏木戸あけておく
幼い日のおもいで逃げた母の膝
犯人を逃がした後の空虚かな
逃げ足が早くて警官追いつかず
左遷地へ逃げた男のひとり酒
逃げたらあかん逃げたらあかん親だから
指切りの切符ホイホイ逃げてゆく
古希過ぎてまだ逃げ水を追っている
逃げながら信じて従いて来いと言う
わけも言わず逃げていくのは女
逃げ仕度とくにくすます丸木橋
こっそりと逃げて帰った男傘
逃げ道を用意してから切る啖呵
逃げ道があるから強く言い切れる
相槌が下手で話が逃げていく
逃げ道を作ってくれた恩がある
逃げたりはしない男の向こう傷
逃げて逃げてどこへ逃げて地球です

かすみ 弥生 紫香 東雲 愛論 義 咲二 弘一 信子 岳人 靖巳 千里 風云児 典子 保州 昭子

逃げられてはじめて気づく妻の価値
未来図を碎いて逃げた誘い水
近づけばスルリと逃げる青い鳥
逃げられる前に俺から逃げてやる
逃げるから追ってみたくなのです
逃げられたさあ大声でお泣きなさい
宵の酒から逃げる四面楚歌
たなごころすべって逃げる銭と水
逃げ切れぬ距離にあなたを置く絆
うしろ髪引かれながらも逃げ切った
逃げ道に薔薇の花粉を蒔いておく
本命に逃げられチョコが宙に浮く
逃げきれぬ追いかけてくる影法師
逃げて逃げて私は貝になりました
逃げてはるらしい見んふりしておこう
今こゝで逃げたら敵の思う壺
転げ出た秘密に逃げる場所がない
人
しんがりて逃げる男にある勇氣

逃げかくれはしない責任とる覚悟
現実から逃げてゴッホの黄の中に
軸
摩訶般若心経が逃げることはない
兼題「ゼロ」 高橋夕花選
ゼロまでの初心にかえることもなし

賢子 愛論 まつお 咲二 千代 冬葉 房子 たず子 房子 夕花 いわゑ 舞夢 鹿太 二三 月子 風云児 寿子 正坊 ルイ子 翠子 螢

再起期す失うもののない強さ
困ったな明日があるのに金利ゼロ
どうしてもゼロにはなれぬ欲がある
答案のゼロに血筋は争えぬ
零歳の顔できんざん神になる
足元にわたしのゼロが落ちている
ゼロ発進一番過激なあなたです
通帳はゼロで冬眠まだ続き
鍋一つ二人は今日から0世帯
美しくゼロを並べて幕を引く
ゼロからの出発八起きめに賭ける
ゼロ歳児キミも借金背負うのか
愛はゼロ家裁で確認した二人
0地帯子も遊べないいらしき
軽く言う一兆円のゼロの数
差引きがゼロならいいと母無欲
ゼロだから大法螺ふいているのです
思考ゼロそんな日もある君とボク
残高はすでにゼロです余命表
新知事にゼロから託す二〇〇〇年
富湖さんの計皆の心はゼロになる
ゼロで良し太平洋は静かなり
存在感のあるゼロは萌えてくる
千万億それから先はよう読まん
再出発のゼロを哲学書に学ぶ
ゼロひとつ変える勇氣に従って行く
苦闘して借金ゼロのありがたさ
世話役がちよっと出し合い収支ゼロ
ゼロからのけじめ言いたい事を言う

剛治 哲夫 英里 扶美代 路児 月子 東雲 千代 英子 一步 シマ子 三男 春 恵子 扶美代 風云児 レイ子 冬葉 岳人 千歩 萬的 弘一 一二三 しげお 寿子

ゼロ一つ多くあきらめつけている
ゼロからの出直し私が試される
満足な一月だった赤字ゼロ
自信ゼロ元氣を出せと路の臺
視界ゼロあなたまかせの船に乗る
借金はゼロつたましく生きてます
ひたひたとゼロ萌えてくる始発駅
住
借金がゼロになったら老け出した
所詮ゼロ悔いも美名も残さない
ゼロが並ぶと大変な威圧感
残高はゼロでも情熱持っている
計の知らせ受話器おとして思考ゼロ
ゼロからの出発破産怖れない
人
男と女いつもゼロで美しい
地
ゼロからに応援団がいてくれた
天
可能性をたくさん秘めたゼロである
軸
ゼロ地帯まず一本の樹を植える
兼題「毒」 高杉千歩選

笛生 愛論 かつみ みつ子 風云児 金太 義子 天笑 泰子 希久子 瑠美子 みつ子 文秋 弥生 恵子 信子 千代

毒舌ヘチューインガムを噛んでおく
ありがとう言うたび毒氣抜けてゆく
毒舌もたじろぐジョーク溜めてある
毒になる酒を毎日紙めてます
毒すこし足せば美味しくなる料理
毒舌も機嫌いいなら放つとく
あなただには毒よお酒を取りあげる
さそり座の女で毒に慣れている
毒舌を吐ける仲間が溝がない
薬にも毒にも愛の匙加減
毒のあるうちが華よと妻が言う
お気の毒にと見下していませんか
毒だみの花の白さにだまされる
エプロンのポケットに毒が入れている
毒舌家案外腹は真つ白だ
狂いたくてすこし毒を飲んでいる
毒を盛るような勇氣は持っていない
風船の口に微量の毒匂う
何が毒なのか頭髪うすくなり
氣の毒がだんだん愛になつていく
涙いっぱい流して毒を抜いておく
毒舌を吐いているのは淋しがり
人間の弱さを知っている毒だ
毒さのこ美味い顔をしています
じわじわと毒効いてきた軽い罪
女文字封書に毒が伏せてある
見ただけで毒じやないかなと思ふ
少々の毒ならわたし持っています
毒舌が吐けなくなった友の老い

しげお 楓楽 千秀 金太 あやめ 義子 月子 アキ 風云児 澄子 鹿太 保州 はじめ 舞夢 三男 翠子 ますみ 瑠美子 シマ子 風云児 大輪 重人 希久子 典子 友照 寿美 信子 義子 正坊

行間に微量の毒が伏せてある

佳

ちよつとずつ五臓六腑に溜まる毒

視聴率上げる為です毒舌家

盛り場を歩けば毒に突き当たる

虚と実の間に少し毒を盛る

春一番が毒より怖い花粉症

人

ちよつと毒あつておもしろい人と居る

地

胃カメラにむかしの毒を覗かれる

天

思いやりの毒はゆっくり効いてくる

軸

平均寿命越えて気ままな酒たばこ

兼題「背く」

小池しげお選

背かれて背いた人の身を案じ

背くとは見抜けなかった目を悔む

幸せに背いた妻という錠

亡父の願ひに背いて若く後を追う

世間には背を向けている青デント

裏切りのころへ句読点を打つ

背かれて母は自立が出来ました

背信に夕餉の豆腐白すぎる

初めから背くつもりで関ヶ原

背かれた女へ夜霧深くなる

わけもなく背き淋しくなっている

押し付けをされると背く自我がある

寿子

天笑

かすみ

鹿太

楓楽

天笑

利昭

おさむ

幹斉

満津子

庸佑

螢

咲二

正坊

咲二

千代

千秀

正雄

萬的

美代子

周信

哲男

天笑

信子

風云児

冬葉

澄人

重人

義人

岳人

千代

背信に投げた指輪の落ちどころ

罰当たるから嫁さんに背かない

背かれたりそむいたりチヨコのお話

背かれた前に先手を打っておく

背いてからのエンジンが調子よい

神様に背いてからの失語症

矢を射てくるのは敵ばかりでない

一度なら背かれてみる冬いちご

背くのはよそ夕日が美しい

背いてた頃に野太くなったよう

本心に背いてばかり飛び込めぬ

背かれた傷は夜半にうづき出す

背かれていますのか夜風身に沁みる

背かれた日を呑み込んで暮にする

背かれて自問自答をくりかえす

背いても背いても母まだ尽くし

吹く風に背いて生きた花が好き

旗に背く自分の色を持っている

神様に背いてカプセルを開ける

背かれた痛手は消えることがない

しよせん釈迦の掌背いても背いても

背く子に鳴らしつづける糸電話

背を向けていたのは僕の影法師

背くのが平気孤独な人だろう

佳

常識に背くと落ちる目のうろこ

背く日の酒がちよつとも効いてこず

甘やかし過ぎたか背く竹トンボ

ヤマトグマシイにいつも背いてばかりいる

哲男

天笑

信子

風云児

冬葉

澄人

重人

義人

岳人

千代

泰子

房子

千秀

寿子

恵子

昭子

扶美代

ダン吉

扶美代

金太

保太

勇太

大輪

翠子

楓楽

月子

典子

幹斉

背信に転がり落ちていく心

人

4日は人の心を背かない

地

背いても温かった母の膝

天

臍の緒を切ったら背くかも知れぬ

軸

もひとりの自分にいつも背かれる

兼題「舞う」

西出楓楽選

緞帳が上ったとたん舞い上がる

根も葉もない噂が風に舞っている

終章は妻の掌で舞うことにする

舞初めに形見の帯を強く締め

キリキリ舞いしてますねと元氣そう

人の世の運命舞い終え地に還る

善人の哀しさをぐにに舞い上がる

雪舞などこころはぬくいかさ地蔵

全快に新世紀への夢が舞う

花を抱く少女に春の光舞う

木守柿風がひと吹き舞うてくれ

大鷲の舞う森林が削られる

渡り鳥ヒマラヤ越えの空で舞う

てんでこ舞していたころは若かった

自公の正論宙に舞うていた

浮かれすぎないように二千年の舞

火の粉舞う春の演技の二月堂

ルイ子

睦子

いわゑ

大輪

義

萬的

保州

笛生

天笑

久峰

鹿太

泰子

賢子

ルイ子

みつ子

洞庵

西

ますみ

義

萬的

保州

笛生

舞いすぎて割れてしまったシャボン玉

風に舞い火に舞い女強くなる

泰然と舞うこと知らぬ椿落つ

舞い終える肩をみつけた春の雪

百七歳ゆるりゆるりと舞い納め

舞うことを知らず瞑想盤の鶴

北限の美学絵になる鶴の舞

二千年てんでこ舞をさせて新春

母からの手紙に雪が舞うている

雪害も知らず舞う雪愛でる客

ひとり芝居の影が哀しい色で舞う

病窓に鶴の舞う日を信じてる

無重力なら僕も天女とダンスする

連れ舞の男と長い冬を越す

男舞 意中のひとが居るらしい

粉雪が風の姿を見せて舞う

ポケットが浅くて嘘が舞うてでる

住

家出した妻二時間で舞戻る

舞い終えた妻が小さな箱にいる

あとやさき何争うて雪の舞う

二の舞を踏まない地図を子に残す

どう舞うか期待してます女性知事

人

もっだれも舞うてはくれぬ父の笛

地

ここだけの話が軽い風に舞う

天

精いっぱい舞いたい今日という舞台

幹 斉

洋

伽 羅

瑠 美子

希 久子

岳 人

雅 文

房 子

友 熙

あやめ

翠 子

夕 花

弘 一

風云児

しげお

文 秋

睦 子

義

大 輪

茜

風云児

幹 斉

昭 子

千里

保 州

優々が舞う日を空は待っている

軸

兼題「火」

橋高薫風選

熊野灘 友を弔う漁火か

山籠りして火の章を書き上げる

目から火が出る苦しみを知っているか

愛の火の消えないままで土になり

篝火を二〇〇八年内で焚かず

手弱女と思えぬ身内の炎

野次馬は風景として火事を見る

火事騒ぎうちの自転車どこいった

下手な字の出火見舞が貼ってある

犠牲者が出来た火事場の人だから

真つ白い明日へ火渡り駆け抜ける

火を囲むと急に親しくなってくる

焚火する辻で事件の裏を聞く

お喋りでいつも火種を持ち歩く

存在を誇示したくなるマツチの火

勢いがついてふたりに火が点いた

お受験に親が燃やしている火花

火の気ある誰か居る家あたたかい

火葬場の吊り棚にある忘れ物

残り火の命春風がそそのかす

火ともえる若さ横目に爪を切る

火の神の掬りどころ無しマイキッチン

火吹き竹とわかわでしようか千年後

金輪際口には出さぬ火消し壺

火消し壺無謀な夢をくい止める

希 久子

充 子

螢

照 子

しげお

英壬子

茜

柳宏子

しげお

笛 生

セツ子

たもつ

紫 香

寿 子

澄 子

月 子

ますみ

賢 子

咲 二

希久子

一二三

あやめ

保 州

洞 庵

典 子

赤い芯抱えているから燃え盛る

火傷せぬ辺りで右往左往する

僕と君結んでくれた火の祭り

火の色に飢えて火の粉を浴びに行く

火と会って風と別れていくふたり

梅花前線庭の一枝飛火せり

火だるまになっても家族守る父

火花散らした友が消えたよ冬木立

住

豆を火にかけて江藤淳ひらく

火をつけにきた美しいイヤリング

出直そう私の過去に火を放つ

夜の焚火かこむ男の暗い貌

残り火が時々風を驚かす

人

褒められて火になることを慮れてる

地

火の如く二月を走りぬくつもり

天

双方に神が後押しして戦火

軸

老いの風邪火のような熱も出ない

大阪川柳の会

とき〓4月4日(火)17時開場

とところ〓サン

ケイビル本館3階322号室

題と選者〓噂

・牧浦完次△騒ぐ・福島直球△節目・川島風

云児△会費800円 18時締切 各題2句 席

題なし 各題秀句 各題秀句

伽 羅

ア キ

落 児

泰 子

洋 度

東 雲

扶美代

楓 楽

重 人

ダン吉

伽 羅

扶美代

夕 花

月 子

北野哲男

■図書紹介

『冬の蠅』

岩津ようじ 著

瀬戸 まさよ

川柳『冬の蠅』は岩津ようじさんが川柳とエッセーの合作本として二〇〇〇年を期し、出版された句文集である。

一九九五年、なにわ柳壇『私の百句』を出版されて以来、ようじさんは今回の句文集の企画を温め実現の運びに到達された。

一読、楽しく、ふわっと心を和ませる。句も文も軽妙洒脱、ようじさんならではの味が込められている。

収められた百六十句は肩の力をぬいた平明な句ばかり、その百六十句すべてに、さらりとしたエッセーが綴られている。

百六十句すべてにエッセーを綴るといふことは並大抵のことではなく、これは大変な仕事である。ようじさんはこの大変さをものにされたのだ。

ご自身、病気のデパートと揶揄されるほど、若いときから肺の手術、胃潰瘍、背髄の梗塞、泌尿器のガン等を経験され、尚且つ、十年前

には次男である「子息を亡くされている。

「ようじ」という雅号は「子息のお名前である。岳夫という、ご自身の名を「子息の「ようじ」に変えられたお気持ちをお察しするのは余りにも辛い。

これらの状況を乗り越えられてきた、切なさ、優しさ、強さなどが、ようじさんのお人柄に加味され句文集の底流となっている。

内容は永年のサラリーマン生活の哀歎、家族の絆、友人との交流、健康、人生観、社会批判等、多岐に亘り、ようじさんの深い教養、見識の高さと相俟って味わい深いものになっている。そして現在のようじさんがあるのは裏から全面的に支えてこられた奥様のお力があつてのこと―そのことも忘れてはならぬだろう。

好きな句を列記させていただく。

◎家族の絆

冷えもせず温もりもせず夫婦仲
散歩とは名のみ家内の荷物持ち
小半時バケツと日向ぼこ墓前
先に惚けた方が勝ちだと老夫婦

◎サラリーマン稼業

わが運命ひん曲けた元上司近く
抜擢があつさり変えた主義主張
出世したのが白けさすクラス会
繋がれてこそ飼い犬に居住権

送別会左遷が背負う床柱

◎病氣

あのクスリ効いたかと首ひねる医師
生き甲斐は病院通い医者通い
困ります医学が進歩しすぎます
君知るや大病院の待ち時間

◎友情

遠き友楽シカラズや長電話

葬式とお通夜ばかりで会う仲間

返事の返事に返事来る友も暇

◎社会批判

そういうがやっぱり不安原子力

内需拡大要するところ無駄遣い

バブル去るようやくわかる汗の価値

終戦忌結局死んだ人が損

◎科学者の目

小賢しいホモサピエンス天に唾

遣伝子という神様の依怙蟲屑

最後になったが題名の『冬の蠅』の由縁、

打たないでおく陽溜りの冬の蠅

からヒンとを得られたとのこと。ユニーク

でユーモアを覚える。

本の装丁も美しく品がある。ようじさんの

このご本を心から推せんするひとりである。

この本を御希望の方は葉文館出版へお問い合わせください。(06・6634・5548)

難聴

金井文秋

わたしも長い事川柳をやって居りますが、近年つくづく困ったと思う事が多くなりました。その一番が難聴なんです。

二十数年前に私の耳が遠くなったのかと感じたのですが、それ程不自由もなく過しておりました。それが十五年程前には大分遠くなったと身を感じるようになって来たのですが、まだそれまでは弱聴の範囲だったのです。テレビを見ていて、ドラマも漫才もボリュームさえ上げればよく分かりました。

難聴と言うのは声が聞こえていても、言葉としてはつきり聞こえないのです。電話を発したグラハム・ベルもこの点で随分苦労したと言語話を本で読んだ事があります。

句会で入選句を披露する時一回読み終った時、はつきり呼名して下さいと多くの選者が言われる。なる程結構な事だと思いが難聴には期待に添いかねると言うのは、一回読み

聞き取りにくいと言う事である。声が出ないのは難聴者かも知れないのだから、一回読みで、どなたの句ですかと問われる前に、もう一度ゆっくりはつきり読んでもらえば助かるのです。

百人程集る句会なら補聴器をつけた人が四五人は居る。補聴器はまだ要らないが少し耳が遠くなりましたと言っている人達は十人余り居ると思う。これは推定ですが、補聴器も目立たないものを使用しているせいか、はつきりとは分かりません。

補聴器と言っても色々あって、ボックス式からオーダーまで、価格も二万円位から四十数万円まである。補聴器さえつけたら普通の声に聞こえるのかと言うと大違い。補聴器は、超小型の拡声器を付けた役目だけしかしてくれない。言葉の識別は出来ないのです。

ある大会で選者が呼名して下さいと催促された事がありました。それも続けられませんでした。それを遮ったのは時間です。大会などでは講話に何十分、披露にはどれだけの時間がかかると、スケジュールが組んであるから、一人二人の考えが押し通せないのです。

披露を二度繰り返しても声のない時、これあなたの句じゃありませんかと、世話人が私の前へ持って来られるのを恥ずかしいと思っ

たり有難いと思ったりしている。裏に号を書いて置いたらと思ったりして、たまには書く事もあるのだが、披露に反応がなかったら、すぐ裏を見て脇取の方に回され、そこで呼名されるのだが、私の句がどれであったかまだわからず、今抜けた句どれでしたかと下書きを見せて隣の人に聞いたりしている。

ある句会で、いくら句を読み返しても声がなかった時、選者の言うのには、これだけ読んで声がないのは作った人に余程自信のない句だろうからこの句は没にしますと捨てられた事があつた。あとで考えると私の句であつたかも知れないのだが。

句会で一番楽しいのは、川柳を耳で聴く事だと思っている。勉強にもなるし笑いの生れるのも声からだと思ふ。だがその半分を奪われたのだから楽しみも削減される。こんな事を言うとは老人の愚痴になるから止めましょう。私より若い柳人達が冥土へ先立たれた事を思うと、米寿を越えるまで健康そのものの体で生かされて居る事へ大いに感謝せねばなりません。句会へ顔を出して皆さんのお姿を見ているだけで楽しいのですから。

肝心なことを補聴器聞きもらし
難聴に惜しいと思ひい講話

文秋

〃

第二回 川柳大学作家賞・募集要項

川柳大学作家賞は、隔年で募集いたします。また「研究・評論賞」を来年二〇〇一年度から隔年で設けます。ともに短詩文芸の一翼をになう川柳の文学的高揚をめざしての事業です。第二回作家賞は前回受賞者をも選考委員に迎え、選考に清新さを加えます。門戸を開放して応募はどなたでも歓迎。ふるってご応募下さい。

■応募資格

いっさい問いません。どなたでもどうぞ。

■応募作品

新作十五句（未発表作品）に限ります。

■応募原稿

A4判用紙使用。タイトルと作者名を記し、三行あけて作品十五句をハッキリとわかる字で清記して下さい。

原稿とは別のA4用紙に、お名前（郵便物の宛名となる雅号）、住所、生年月、電話番号を明記し、以上二枚をお送り下さい。

■原稿宛先

川柳大学編集部・作家賞係。

■応募期間

二〇〇〇年四月一日から三十日まで。

■選考委員

時実新子 八坂俊生 石部 明
情野千里 倉富洋子 曾我碌郎

★作品がすでに発表済みであることが判明した場合、賞は取り消します。また応募原稿はお返しできませんのでご了承ください。

■選考方法

選考委員は全応募作品を読みます。おのが秀作七篇（作者）を挙げ、その合計得点の順に作家賞一名、準賞三名、佳作若干名を選びます。同点が生じた場合、さらに選考委員の投票によって決定します。

各委員の「選にあたっての感想」は受賞作品と同時に本誌8月号に掲載いたします。

■発表

本誌8月号誌上。

■表彰

川柳大学作家賞 一名 賞状と賞金十万円
準賞 三名 賞状と賞金三万円
佳作 若干名 記念品贈呈。

★表彰式は七月三十日の川柳大学全国大会にて行います。

川柳大学

時計台ビール川柳大募集

今般札幌市の地ビールメーカー時計台ビール株式会社をスポンサーとする時計台ビール川柳を募集することになりました。入選句は川柳塔、番傘ほか有名五誌の平成12年5月号以降の奇数月号に掲載されることになりました。ご賛同の上、左記により是非あなた様の玉句を時計台ビールにお送り下さいますようお願い申し上げます。

選者 川柳塔社 理事長 河内天笑

題		題	
第1回「時計台」	3月末	第4回「憧れ」	9月末
第2回「ゼロ」	5月末	第5回「ラーメン」	11月末
第3回「海峡」	7月末	第6回「酔う」	1月末

時計台ビール賞(毎回)

特選 一句……時計台ビール3ケースと二万円
 準特選 二句……時計台ビール2ケースと五千元
 佳作 二十句……時計台ビール1ケース
 資格紙 国籍不問・二十才以上
 官製はがきに一句(何枚でも可)

宛先

郵便番号・住所・氏名・職業・年齢・電話
 入選句掲載誌 さつぽろ、きやり、川柳研究、犬吠、ふあうすと
 尚、入選作品の版權は時計台ビールに帰属します。
 アシスタント 播本 充子・藤田 泰子・河内 月子
 〒06010051

札幌市中央区南一条東七丁目15-16

時計台ビール株式会社

時計台ビールのシールに
 あなたの一句を！

時計台
 ビール
 と
 新
 ぼ
 う

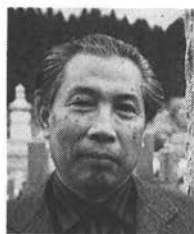
二〇〇〇年

入選句

時計台の鐘の音を、
 心に響くおいしさにして。



時計台ビール株式会社



さようなら 透太さん

門 谷 たず子

小正月も過ぎて間もない一月二十日、透太さんあなたは私達の手の届かない遠い所へ行ってしまったのです。二十三日の御葬儀の日は涙雨でしようか、一日中冷たい雨が降り続けました。幼いお孫さんがおじいちゃんの好きだったリングを入れてあげて、パイパイと手を振る姿が参列者の涙を誘いました。淋しいBGMの流れる中、静かに旅立たれました。

思えば去年の一月、腰痛の為入院なさって三ヶ月、退院したものの腰痛は一向快くならず、他の病気が発見された時は、すでに手遅れだった由。以来約一年長い苦しい一年だった事と、今も胸が痛みます。

透太さんは一九三〇年大阪生れ、一九八二年頃より川柳の道に入られたようで、瓦版の会などに入会、一九八六年には川柳塔同人、二年後日本銀行を退職されてから、その記念にと句集『かばちゃはい』を出され、ますます

すその才能を開花されてゆかれました。

一九九五年には第二句集『風のあと』を出版、そのやさしい句風と底に流れる温かい人間味が読む人の胸を打って魅了されました。

『風のあと』から

楽しくて妻のいるのを忘れてる

許すとは言わぬが電気つけてある

傾いた棚を夫婦で吊っている

顔上げて酒は飲むべし太郎冠者

いきさつはどうあれ鳥もつ泣かぬ

どんなご事情があったのか知るよしもありませんが、娘さんお二人を嫁がせてからの独り暮らしはお淋しかったようで、心の痛む句も多くなります。

自画像の裏にあるのは冬の景

残り火で心の芯をあたためる

一九九七年、「時せん賞」の佳作には

どう座り直してみても寒い椅子

また一九九八年「ふあうすと」誌には

負け癖がついて何度もお辞儀する

などご自分の気力体力の弱さを予感されていたのでしょうか……。

一九九六年頃、住み馴れた家を売って高鷲の新しいマンションに移られました。五階のお家の前には大和連山が借景の如く列なり、とても気に入っておられたようで、戸口には風柳亭と書いた可愛い看板を吊るし、親しい柳友を招いては手作りの料理でもてなし、談論風発熱い言葉で川柳を語っておられました。また、柳画も器用にこなし皆さんにさし上げておられたようでした。私達のグループもお招きを受け、楽しい一日を過ぎて頂いたのも今は懐かしい思い出となりました。

透太さんはとても気さくで心遣いのこまやかな方で、男性を意識することもなくグループの友人達と同じように気楽に付合せて頂きました。私共の西宮北口句会を始め、各地の大会や京都の句会などもよく御一緒にさせて頂き、時には居酒屋でコップ一杯のビールで熱く語り語られる柳論をお聴きしたものでした。本当に透太さん有難うございました。何もかも思い出の一コマになってしまいました。今頃あの戸口の風柳亭の看板は寒い風に叩かれ主を亡くした淋しさに哭いている事でしよう。

透太さんゆっくりお休み下さい。 合掌



大きな足跡 二重奏響く

福本英子

素晴らしい友だ七色唐辛子 富湖

あまりにも有名になった句。随分お若い頃から川柳の道に入られ、亡父大矢十郎さんから御主人大輪さんへと素敵な支えの下で、大きくなられた富湖さんですが、ここに、三年の御活躍は本当に彗星のように華やかに、そしてあつという間にお亡くなりになりました。大輪さんからのお知らせを受けてすぐ病院へ駆けつけました。綺麗な顔で眠っていたる感じでお名前を呼び続けました。御主人と二人のお子さんに看取られて、本当の水いらずのお別れになりました。

天国が休みで命取り留める

こんな句も二重奏の中に載せていられるのに残念と勿体ないの思いがいっぱいです。

二年前にオール川柳大賞を受賞され、その後葉文館の社長齊藤俊輔様のお勧めで、御夫妻の句集『二重奏』を上梓されました。

その序文に川柳塔社主幹橋高薫風先生が、お二人のことや川柳の御縁を余すこと無く書

いて下さつてあるので遠慮させて頂きます。

又昨年の川柳塔まつりには最高の路郎賞を亡父十郎さんと父娘での受賞出来たと大そう喜んでいられました。そして十一年度の年間賞の受賞と、川柳誌の何処を開いても富湖さんの秀句が見られます。これからの惜しい川柳作家を失いました。

女偏考えたのは男だら

踏み台にするには丁度よい男

空腹の男に叛かないことだ

ご苦勞様そして男は出し殻に

行つてらっしゃい夫が下げるゴミ袋

こんな楽しい句も出される夫婦仲の良さに大輪さんの懐の深さと温かさ、富湖さんの可愛さが出ていて嬉しくなります。

川柳塔わかやま顧問の野村太茂津先生にも可愛がられて「私が十郎さんの所へ行って二重奏のことを伝えて共に喜びたい」と書いておられたのに、又、主幹牛尾緑良さんの両手足となつて吟社を支えて下さつたのに、と思

えばとても大きな損失です。

でも不思議なことにお元気だった頃の作品ですが、お二人が共にこんな句を

クランケと呼ばれて白い息を吐く 富湖

舞台暗転森は白装束纏う "

細長い切符と旅をしています "

本日快晴告別式がある 大輪

焼香の列で涙が出て来ない "

ありがとうやうばり僕の負けだった "

オール川柳と川柳塔の二月号にあります。

目に見えぬ糸に操られて最後まで仲の良さを皆に知らせたかったのかと涙が出ます。

そして、初めて川柳を作られたと、長男の祐司さんと長女の祐貴子さんがお母さまに、捧げる句を弔吟にいただきました。

はてなはてな二千年に母は逝き 祐司

かくれんぼ母が鏡の中にいた 祐貴子

富湖さんお二人のご成長お見守り下さい。

ご冥福をお祈りします

本名 川上 富子

戒名 春柳妙富大姉

平成十二年一月二十七日没 享年五十一歳

甲 吟

美しくやさしくデュエットは雪か 森中恵美子

神の阿呆仏もあほう富湖の死 奥山 晴生

雪抱いて花一輪が散り急ぐ 開発 淑乃

月光の空に消えない二重奏 近江あきら

お地獄城

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

二千年へ幸せ拾う旅支度
世の中は期待外れが多すぎる
国民の期待大きい雅子さま
新世紀期待を倍にふくらます
二千年期待と不安交差する

和代 信敬 鈴枝 久子 豊枝 公美子 智恵子 弘子 静江 康女 正光 雄々

東大阪川柳同好会

森下 愛論報

場違いを感じ早々引き上げる
場末にはおいしい酒と悪友と
バカ力借りる時にはおだてとく
爆笑の渦へわたしが浮いている
深々と頭下げられはてどなた

萬的 シマ子 文秋 朝子 美弥子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

気が付けば引くに引けない深い仲
故里をのみこんだ湖深い色
雪深い里が育むうまい米
少女無知テレクラからの深い闇
七五三無理をしたなと思う神
メダカ達戻って神話の川消える
夢のある神話ひもとき旅に出る
ハイジャックやがて燃料切れになる
介護法私のやがて重ねみる
火のドラマ抱いて女を演じきる
献体でやがて自分史締め括る
やがて来る過疎の村から冬支度
花の園やがてこぼれる冬の鬼

柳宏子 千里 みどり 雅文 弥生 庸佑 東雲 湖緑 晋吾 高尚 愛論

川柳高知

川竹 松風報

親展の文字が生木に火をつける
炎天下が知ってる風の道
監督の一言炎えるからすごい

和江 京子

京都塔の会

都倉 求芽報

コンビニでふる里恋し母の味
大鍋にグツグツ煮えて山の味
農薬は使っていない土の味
新そばの味が恋しい祖谷の里
酒の味覚えて母が遠くなり
なつかしい舌は忘れず母の味
札束の味は知らないほうがいい
来世での契りを予約した彼女
地図広げ旅の予約を先取りし
出来るなら極楽行きを予約する
極楽の予約がとれるまで逝かぬ
予約してわくわくと待つフルムーン
自由席ガラガラ予約後悔す
支払いが頭痛の種となる予約
幸せの予約結納届けられ

美々 典雄 圭風 てるみ 呆斉 祥子 佳風 孝雄 さき子 幸 快風 千鳥 節 かず子 松風

長い旅終えて遡上の鮭還る
三等星からの電気なら受ける
歓声と拍手燦さんとルミナリエ
飛び級の彼へ中嫁が来ぬ
翔ぶことも知らず此の家に根をおろし
時折は飛ばずに羽を休ませる
当ってないクジにとてもない噂
夜空跳ぶトナカイ子等に夢はこぶ
大空へ飛んだ風船星になる

清芳 シマ子 慶子 欣史子 喜美子 能子 弘直 香住 あずき

若い日の友情つなぐ年賀状
戦友会三名目出度く賀状来る
みかんの手とめた名なしの年賀状
添えて来た一句が生きている賀状
ふところに答を持った審議会
答まだ出ない老後の空模様
人間の答が出ない鐘を打つ
傷つける返答だからばけておく
チョコレット送って答待っている
努力して答が見えぬもどかしさ
追伸に少し答をにおわせる
生きさまの答えは送る人の数

葉子 吉之助 求芽 紫香 英一 欣之 典子 輝女 芳美 宏子

神様の答へ氣長に待つてゐる
 効き目よりCMで売るかぜ葉
 投げ売りの此処も師走の不況風
 売れ残りせぬよう磨くお年頃
 売れ残り福も混じつた福袋
 売りたいが我が家ローンに縛られる
 売り尽しセール私も売れないか
 売り言葉笑顔でかわす腹の虫
 一年のずばらを洗う十二月
 勤勉な男 ずばらな妻がいる
 「終りました」心底待つた九十分
 京近し尾花の上の鯛雲
 どんな夢見てるか犬の高軒
 種を播き花咲き実る日を信じ
 まさかの訃報が明日に控えていたなんて
 たいせつな人と老いゆく銀木犀
 紅葉色づき旬報の表紙もつ会えぬ
 さよならも言わずに空の星になる

城北川柳会

神夏磯典子報

諷云児 巨詩 高栄 波留吉 友照 ルイ子 磯 百合子 福子 正坊 てる 春蘭 美穂 庸佑 達子 年代 武庫坊 水客 東雲 美代子 トヨ子 典子 睦子 一枝 あき子 容子 求芽

平凡を装うて暮らすもまた楽し
 行雲にしばしたらずみ無にかえる
 風船の氣負いに触れた針の先
 また出逢う菊一面の秋に居る
 十四時間機内散歩と体操と
 誰にでも家族の欲しい夜がある
 平凡に生きて人生ケセラセラ
 猫などの奥の手使い封じ込む
 洋花の名をまた問うて花を買う
 平凡の中で見付けた今日の幸
 修羅越えて平凡の二字に辿りつく
 臨界という二文字の恐ろしさ
 沈む陽に今日一日を振り返る
 面食いの息子に未だ嫁が来ぬ
 能面の下に潜めている野心
 奥方の申す通りに箸を置く
 面通しその一言で活気つく
 奥の手は間に合う少し出ずものだ
 飲みに行く雨なら少しに濡れ
 追い越しのレーンに邪魔なバスの列
 しとど降る恋しき人を裂くように

竹原川柳会

時広

チサ子 寿美子 春蘭 和歌子 政子 佐津乃 藤子 静枝 秀夫 久留美 千里 あい子 達子 倫子 史風 とし子 高栄 あやめ 小路 白峰 公一 一路報 2史子 高3千 枝 蘭 幸 夏喜 蝸牛 節夫

区切れない心冬の雲走る
 銭にぎり走れば鬼がついて来る
 走らねばすぐにボクにも冬が来る
 鶏の助走へ空が高すぎる
 憎まれて段々強くなる私
 ひ孫です亡父に見て欲しい抱いて欲しい
 父の背に商売の道教えられ
 亡父の写真やさしい顔は分らない
 父の愛正月下駄に盆扇子
 いつからか頑固な父の像に似る
 父からの遺伝子だらう飲めぬ酒
 天辺にあるのは父の冬帽子
 アルバムに貼れば五枚の亡父でしか
 父の海見たくて父の樹に登る
 薬より酒で元氣な父でした

佳句地十選

(2月号から)

宮尾 みのり

貞子 静風 不朽 孝枝 汎美 節生 規代 千年枝 笹舟 正宏 房子 菁居 美佐雄 鈴美 桂子 裕子 正博 治代 いわゑ 吉之助 新雪 比呂史 哲子

信念を通した父の縄梯子

本棚の亡父を時々虫干しする

豪快に笑った父を忘れない

父の背の温き忘れぬ冬帽子

器用だった父にマヒという現実

物とんぼ父が持たせた小さい空

川柳塔おっぱひ吟社

木村あきら報

それ稼げかせげとローンが背を押す

悪い処ばかり老父似とボヤく母

沢庵をバリバリかんで古稀の坂

芸林展知ったか振りで観て回る

似る声に内緒の話筒抜ける

捨てるため買って置いとくゴミ袋

こやかに話しかけたが知らぬ人

つきはきがパツワークというおしゃれ

笑っては居れずに妻の袖を引く

色よりも味で勝負の吊し柿

ゆっくりと赤いワインを胃に落す

長老の昔話に時忘れ

似た者の夫婦で又やっているロゲンカ

割れもせず重さに耐えて竹の雪

背伸びなどするなと笑う竹の節

竹垣でキリッと締まったミニ庭園

竹トンボ幼き夢を乗せて翺ぶ

若竹よ素直な心真つ直ぐに

北方が雪解けになる二千年

竹割ったような気性で損もする

手応えを掴んで策士ほくそ笑む

喜美子

幸子

栄恵

一枝

笑子

一路

天職になったミシンと五十年

サークル檸檬

小林

一夫報

棟上げでローン忘れて餅を投げ

黒豆の転がりたるも初笑い

哀しみを集めて瞳深くなる

お雑煮へ口々に言う餅の数

しきたりを変えた嫁御の雑煮餅

募金箱 素通りのとき俯いて

月も地球も餅掲ぎの音しくなり

ここからが 一気呵成のおんな坂

健康が気になり出した餅の数

かがみ餅もつたいないががみみれ

ぜんざいの餅にゆっくり癒される

手あぶりでお餅を焼いた日の童画

川柳ささやま社

酒井

靖子報

農を継ぐ夜道へ月が出てくれる

先読めぬ方が幸せかも知れぬ

黒枠の写真文句を言いたそう

年金が無理をするなと儲け口

貧乏神儲ける術も知らずいる

大口の寄附光らせる儲け口

愚痴一杯吐かせて泣ける森が好き

外材で日本の森は泣いてます

儲からぬ先に使った皮算用

叱る子の笑顔に文句言いそびれ

かおり

遠野

一夫

みつ子

あずき

靖巳

雅子

智恵子

楓楽

房子

希久子

澄子

義子

いわゑ

正坊

満月を見てたら文句消えました

文句なし老人増加にいる看護

儲けすぎバブルはじけてツケがくる

柳友の森で自分の息をする

儲けたよ雨の子報が晴旅行

森に入る闇にキラリと神瞳

川柳の森でやさしい風に逢う

儲からぬ田んぼにお金つきこんで

いい文句一つ浮んだ秋の天

神の鈴森の眠りを揺り起こす

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

曲り角ここで追い羽根なくした日

敏感に母は雲行きすぐ覚る

空港の別れは音と風ばかり

停年で家事の始めは風呂掃除

敏感と鈍感との中程で生きている

陰口が好き尾ひれをつけて触れ回る

筆太に希望を書いて孫二十

めでたさは希望をはおる初春の酒

戎さんも成人式もテレビで見

国訛り入れて故郷から来る手紙

墨たつぷり年の始めの軽い筆

大阪府政吉本調とノックさん

仕事始め初夢を見た失業中

辰年の飛躍を乗せる始発駅

ドン感を敏感にする甘い声

女ごころの水面は羽音にも揺れる

事始め勞り渡る夫婦橋

君代

ヒサ子

毬子

富美

美紗子

美緒子

房江

泰子

可住

靖子

和歌子

江美

鹿太

哲嗣

モトコ

亀与子

まさ

美智子

昌子

六浦

勇次郎

弘治

夢之助

正治

満寿蔵

澄子

十四郎

敏感に動いて廻るニュース記者

紫 香

川柳会梨花

石上

悦子報

空耳にしては上手な受け答え

石花菜

亀さんが殺られた空耳ならいいが

節子

幻聴が進軍ラッパが鳴り止まぬ

美ツ千

言い訳は空耳だった事にする

きみ子

空耳かわたし勞つ亡母の声

和歌子

時計が囁き私をせきたてる

蟹郎

火の玉が海に見えたら漁がない

真砂

話し合えば一層深くなる絆

美恵子

もう少し女でいたい髪を梳く

幸子

口惜しいが立つも座るも声がでる

一京

きつかけが無くて他人のままでいる

一夫

雨つづく甘い話にのせられる

東雲

身の下相談だけは知らんぶり

克枝

犬猫にかまわず戻るブーメラン

螢

水中に花奔放に根をひらく

主詩朗

仏滅の今日は愛しい女と会う

洋

好きですと言えず砂場に丸を書く

ただし

楕円形に垂れてビーナスは見事

勝美

まるでない過去の記憶をつつく妻

よしえ

コンパスで画いたまに味が無い

完司

お日様は雲の中であまらん丸い

忠良

生きているだけでまいにち花丸だ

常代

軽トラは畑ベントで街へ出る

多哥由

トラックに満載をしてりんご売り

求芽

落ちこんでいるのに誰も茶をくれぬ

求芽

いやな客だった茶かすパツと捨て

菓子を見て次のお茶にも期待かけ

行男

催促へ濃いい熱いお茶出され

典子

お茶がらになるまで愛を貰こう

睦子

女々しさは白木蓮の茶の姿

悦子

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

島はまだ還らず今日もこんぶ干す

大輪

ペットボトルといのちの話ししてみよう

輝子

ミレニアム消印嬉し年賀状

よし子

孫からのおめでとっただけ年賀状

サト美

面影をたどって見入る年賀状

あつむ

一年の消息賀状からもらう

英子

一枚の賀状と重い会話する

稚代

年賀状子供の名前増えてくる

佐代子

墨痕淋漓長寿自慢の年賀状

忠翁

出世した雲の上から来た年賀

高夫

ゴミの日のペットボトルに自負がある

紀久子

ペットボトル暮らして深く根をおろす

和重

晴耕雨読ペットボトルが側にある

和子

一輪をペットボトルに挿して文の友

豊太

銘水がペットボトルを知り尽す

正博

結納のこんぶも熱い愛に酔う

寿子

無人島にもペットボトルが捨ててある

保州

根昆布で夫の血圧管理する

泰子

出がらしのこんぶになった倦怠期

富美子

こんぶ茶で火花を散らす筈がない

生米子

蟹とこんぶ食べ放題の北の宿

三男

エリートのに布は桐の箱で寝る

清史

出し昆布言いたいことがたとある

清史

福袋二人で編んでいる新居

裕美

幸せが入ってますか福袋

さち子

やさしい妻は僕の心の福袋

優子

初春のときめきを買う福袋

太一

青い鳥入った袋さがす春

信子

ミレニアムベビーが出たよ福袋

佳子

余命表過ぎて余生は福袋

紀美女

大原川柳社

矢内寿恵子報

快活な娘だが泣く胸はしくなる

あすなろ

開拓の夢がふくらむ新世帯

はるみ

快活をさげ重心に戻る老い

絹子

快活につられて老いも若がえる

静子

快活な親子で悩み消えていく

昭子

快活な顧客リストを持ち去られ

ひでの

開拓が進み地球が泣いている

たづ子

快活な娘無口になされた恋

みさえ

快活な母を蝕む老いの虫

敏子

男にえ切らぬ男にはほしい快活さ

貴美子

男には負けぬ快活器量よし

こふゆ

快活で気取らぬ娘だと見初められ

巴子

快活な嫁で家族の輪が丸い

悦子

快活な嫁で明るくなる茶の間

妻子

開拓の友満洲の土となる

玉恵

快活を買われて夢をふくらます

さちこ

明治から昭和へ女開拓史

あやこ

快活に振舞っている電話口

みづえ

快活な嫁が良い案出してくれ

はじ芽

快活な嫁がやさしく見てくれる

はじ芽

快活を装う寡婦の笑い皺
快活な意見に一歩引いておく

川柳塔なら

坊農

柳弘報

地佳平
寿恵子

映画館出てうまいもの食べ歩く
北海道ポッポや健さんボスターに

また鍋を焦がしてしまふ主婦の本
悪友に恵まれている凡夫婦

映画館優雅なときをおぼろげに
我が青春シネマスコープ全盛期

あの頃は泣いて出ました映画館
空き腹で名画座にいた頃の僕

映画館アートの場所と決めた春
遺伝子を盗み研究する時代

プロマイド今も机の原節子
力づくで景気持ち上げ火の車

恵まれぬ難民がいる拒食症
スクリーン昔を今に取り戻す

七人の侍を観るおとなの目
啄木の歌集失意と感傷と

悔いばかり残ってまんねん十二
父さんの下手な第九の十二月

貸し借りの無い十二月部屋に花
切れぎれの記憶を綴る終の章

机上論だけは負けない本の虫
六十億神の恵みを奪い合う

経本が見ていた小坊主の欠伸
神の恵み忘れ遺伝子をさわる

忘年会胃にも過酷な十二月

恵まれた余生を走る趣味の会
スクリーンに雨が降ってた友楽座
打ちのめす試験も神のお恵みか
容姿恵まれて波瀾がつきまとう
十二月切れぬ鉄がもどかしい

川柳大阪

坊農

柳弘報

秋雄
卓
朝子
美千子
孝子

色恋を忘れ付き合う友がいる
健康を愛する母よりありがとう
かなんなあ紙くずになる宝クジ
愛燦々うけて重荷の子が育つ

景品は豪華に見せて歳の市
土曜日は赤い服など着たくなる
熱燗や死ぬまで熱きまよいね
肩寄せて言葉は無用海の色

今茶髪未来の色に賭けてみる
マイカラー百歳までもずっと赤
かなんなあいつまで独りいるつもり
愛すると香る優しさほのぼのと

叱らずに愛する事で子は素直
辛抱が老後バラ色やつたらね
焼酎をこよなく愛する島暮らし
妻の愛たつぷり皿に盛ってあり

断ち切れぬ愛に女が重くなる
妻と子の愛でうす愛慣らされる
まだ男まだ女です愛してる
酔ったらし愛してるよと妻に言い

青い海守れと立った赤い旗
地下の街師走の色が暮れてゆく

すがお
信
高主

リストラに家族の愛が深くなる
大金を吸い取る足の裏の怪
いたわりの言葉うれしい歳になり
景品に妻が踊っている師走
愛されて愛して太くなる絆
地球から国防色が消えてはし
売れば上がり買えば下がる僕の株
絵手紙の柿が熟した里の色

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

余力あるらし旦那の歩く懐手
八〇円の封筒あつてよさそうな
詫びるなら要らぬと言われたサツが詫び
寒空に洗われ紺四股を踏む

組み替への味噌はちよつぱり舐めてみる
非常品準備せわしい師走です
入試の孫春に帰ると年の暮れ
二千年私の風も高く揚げ

リスラの父にも欲しい助成金
桐油を積むと妻の機嫌がすぐ治る
様子見の客も粗品を拝受する
劣化音ばかりが響く永田町

川柳塔鹿野みか月

土橋

淡い恋レントゲンにはうつらない
浄土には手ぶらで来いとおっしゃった
老骨にむち打ち柿の畑守る
二日酔いばかりしている電ですか

雑煮食べ迎春の味噌みしめる

一歩
本蔭棒
三十四
ダン吉
金太
笑風
重人
柳弘

螢報

武子
隆風

幸枝
はるお

茶子

そそくさと雑煮を食べて飛んで出る

つつがなし雑煮戴きい春だ

お雑煮を食べてころり寝正月

前向きに人生の彩探している

二千年彩る春を生きてゆく

淡彩で夢という文字画きつづけ

どの竜の彩りもよく賀状くる

彩変えてカムバックする夢もある

バージロード私の彩は変わらない

二千年彩り濃く生きようか

生涯を煌く彩がまだだせぬ

全景を彩る春のはたん雪

どの色もあなたの彩を抜けきれぬ

初春の彩あざやかに御来光

あのネあのネゆつくり話す愛らしさ

神さまがゆつくりしろと休まされ

ゆつくりと炊けたおせちがよく売れる

晩成なのか息子ゆつくり構えてる

雪しんしんしみじみ老後話し合う

祝二千年ゆつくり開けたガラス窓

ゆつくりとできぬ実家へ行きたがる

もつれ糸ゆつくりと解く愛で解く

今日の悔いゆつくり酒に溶けてゆく

千年紀また千年を目指す樹々

小半日新聞読んでお茶のんで

かわはら川柳会

上田

俊路報

病友に情け頂く談話室
アドバイス頂き迷い断ち切れる

一 薫
泰 良

喜与志

きみ子

八重子

明 美

久 枝

茂

みさ子

実 満

宣 子

汲 香

忠 良

睦 子

くに子

かつ乃

みどり

きみゑ

保 子

節 子

和 子

富久江

野草

野 草

弘 子

螢 子

諷 人

螢

頂いたほうのお菓子をおいしがり

頂いた椅子が大きく肩がこり

頂いた生命思ふ誕生日

頂いた歳暮に足がついて出る

窓越した氷雨いよいよ冬を呼ぶ

とび起きいよいよ雪とタイヤ替え

親孝行いよいよ虹のかなたへと

いよいよよとなると積み木がゆらぎ出す

三幸川柳教室

三宅

保州報

言わぬだけ誰にでもある腰の傷

介護保険誰のためでもない模索

誰の首かえて責任とるつもり

職人の誰もが持っている愚直

聞く耳を持たねば誰も手を貸せぬ

その時は誰にも負けぬ幕を引く

栄光へ誰にも見せぬ水面下

日の丸の小旗を振ったお下げ髪

式次第日の丸いかにいたします

日の丸を戦好きだと決められぬ

日の丸に無常の風が揺れている

フリーハンドで描く日の丸に高い空

亡き父の好きな日の丸だから好き

日の丸を振れば茶髪も日本人

サポーターの頬で日の丸燃えている

日の丸をお子様ランチから覚え

踏台にして昇進はしたくない

進み過ぎの椅子が吹き矢の的となる

秀 子

ふじ子

静 子

余更子

正 子

寿 子

悦 子

俊 路

かす子

登美代

栄之進

公 子

和 代

利 治

三千子

豊太郎

桂 香

一 歩

章 子

起世子

正 圃

和 子

当 代

美智子

み ね

一喝がお灸になって進みだす

進む科学きれいな地球怒らせる

前進へ力を溜めている一歩

見縊った亀の歩みが前へ出る

進歩した医療に寿命延ばされる

人それぞれに鬼も仏も待つ行く手

誘蛾灯命知らずが夢を追う

また一つ老舗灯を消す城下町

漁火を幾つも消した埋立地

灯をつけて聞けば許せる事ばかり

コンビニのあかりを目指す漂流者

身のほどをわきまえている月明かり

岸和田川柳会

長谷川呂万報

大勢の祈りに神は迷いはる

祈る事めつきり多い年になり

神様に心の底を打ちあける

どん底で今日も祈っているわたし

万歩計と一緒に落日へ祈る

神様が大小中の祈持料

反核の祈りをこめてペンを取る

上役へ左遷覚悟の上申書

上役の情け見て見ぬ振りもする

上役のくせを真似てるうちの猫

遠慮はしたがほんとはほし目をしてる

止められず遠慮しながら吸ってます

のみの夫婦おとさん御免なさい

ばったりと逢ってしゃべって用忘れ

おしゃべりがハガキ一枚書きあぐね

孝 子

めぐみ

さち子

町 子

鉄 治

千 秀

美 子

嘉 平

秀 男

健三郎

朱 夏

保 州

弘 子

鹿太郎

基

一 弥

蛙 城

齋

ゲン吉

美智子

柳宏子

狸 村

洞 庵

仁 緑

力 子

苑 子

路 子

おしゃべりの奥さん避けても寄って来る
おしゃべりに可愛さがある新入社
ここだけの話おしゃべりふれ回る
ストレスは溜めぬお喋り好きな妻
救急車止まつておしゃべり寄ってくる
駆け引きが露骨になった選挙前
なにお商人駆け引きがある店じまい
ソロバンの駆け引き冴えているあるじ
駆け引きで商売出来る上手下手
駆け引きの道具に核は使わせぬ

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

手を結ぶか細いけれど温かい
結んで開いて掴み損ねた青い鳥
結び目をほどけぬようにしています
義理という紐を結んで世を渡る
はころびを結ぶ指先はてり出す
ありがとう結んだ語尾の美しさ
本物を一つ求めた新春の床
あれこれと求めてしまふ十二月
身の丈に合うもの求め春を待つ
万が一若しやと求む宝くじ
子に残す求めて鮭の川
新春の朝が求めた屠蘇の味
白魚の命をカメラじつと見る
そのままに撮ったカメラが嫌われる
春のカメラへ女さびしい影を連れ
ありのまま心を写すカメラ好き
スナップ写真見て泣きだした女の子

東吉 白光子 甚一 金太 萬的 洋 東雲 昭二 信博 みつ江 友子 多賀子 邦代 きみ子 和歌子 螢 房子 晃 注湖 煩悩児 芳枝 義良 小鹿 茂美 早苗 蘭水 静江

アルバムに記録が残る旅日記
未来図の余白に夢を遊ばせる
羽づくろい夢が脹らみかけている
いい夢が見たくて枕取りかえる
でかい夢あつて雑巾耐えている
初夢で七福神と舟に乗る
風船も夢も大きい方がいい
若いねといわれることに耳はしゃぐ
へそのまん中に若さためている
風向きを変えた若さを見せつける
若い気であるのに歳をよく聞かれ
若いからいいなア遠い日を想う
若いのはいいなと靴を磨いている

南大阪川柳会

吉川

サラ金のお灸じわじわ年の暮れ
見渡せばお灸すえたい人ばかり
玉の肌二つ並んだ灸のあと
三里の灸すえて芭蕉は長い旅
手の甲に祖父のぬくもり灸のあと
定年に耐えた背中灸のあと
焼印を押され羊は春の野に
焼印の枳は誇りを持って
職人芸焼印しつかり押しておく
焼印の銘が由緒を物語る
躍動の形で鮎は饗される
躍動の春へ大地の力こぶ
鉄棒で躍動見せる大車輪
躍動の春へ期待の鈴を振る

寿美報

米子 桂子 咲 与根一 昭二 すみこ 日出子 久枝 たけし 太泡 静恵 町紅 直子 度 柳宏子 勝美 清成 蛙 叔子 ひさ乃 寿美 楓楽 朝子 雅文 なぎさ

テレビからはみ出しそうな躍動美
黒髪がなびく少女の未来像
書道展躍動してる字が読めず
躍動をためてスタート台に立つ
ルミナリエ躍動求め湧く神戸
屋号よりうまいめし屋で通ってる
おかめまんじゅう一心堂もしんどおす
ビル谷間屋号守っている老舗
男まへの屋号が好きでゆく理髪
大向こう屋号ひと声名舞台
道問うに屋号で聞けばすぐわかり
ちゃんこ鍋力士のしこ名そのままに
三年越しの夜食にうれしい春がくる
半纏に屋号を入れてコマースヤル
焼印の痕に老舗の自負がある
激しい愛で心に焼きついて

横浜あおば川柳会

菱田 満秋報

旅だちの荷へお守りを入れる母
一休みすれば浪茶の出る波長
叶うなら宗派問わずに手をあわす
好物を送って母を温める
目配せに慣らされ今日もどっこいしょ
小吉に夢の半分加減する
願望に終着駅のない生命
訪問の会社観察するゆとり
ふさふさの髪へ願ひの胡麻を食べ
身勝手な願ひに軽い銭の音
素っ気ない答えに慣れて鬼と住む

とみを 柳伸 文秋 三男 千里 幸子 萬的 正博 志華子 庸佑 東雲 たもつ 日出子 重人 アキラ 和可 鈴美 かず枝 あかり ふみ 句多留 良子 政勝 街湖 早智 道子

児の生命 臍帯血に願ひ込め

細暖簾くぐつて慣れた土地の風
上等でなくとも妻の味がいい

待つことに慣れてベンチに話しかけ

転居して荷が解けぬまま共稼ぎ

重い物持つ腕力は妻が上

虫のいい願いで神に放つとかれ

こうさい空気のような妻に慣れ

お荷物にならぬつもり万歩計

譲られた座席すなり札が言え

一生のお願い何度でも使い

手荷物にふるさと詰めて母が来る

仕事には慣れて気を抜くコツも知り

リストラの肩に家族という重荷

顔色を見ていたずらを始めたし

書き慣れた履歴書寒い冬迎え

なまものを貰ひ真つ直ぐ帰らされ

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

天と地の恵み忘れている傲り

天が知る地が知ると生き七十年

天の声心して聞くミレニアム

冬型の天気図見ると急ぎ旅

クローンも脳死も天を恐れない

後はもう天のさだめと養投げる

天国に黒い花咲く世紀末

天女とのデートもできる新世紀

究極の男か三日月が光る

通天閣知事の後釜憂えてる

純子

笑子

亜希子

かつ子

十三子

美柳士

八重子

絹子

敏子

省子

雅子

ただお

徳三

あらた

広和

潮華

満秋

直次

敬子

桂子

ただし

セツ子

正三郎

和歌子

美津子

保子

祥風

亡き親友の便り読んでる三回忌

献立はチラシを読んでから決める

掃路に読むガイドブックでよく解り

風向きが読めず上がらぬ風景気

いい顔だやはり自信があるのだから

妻にないし三億の夢やはり買う

許してもやはりあの眼は哭いていた

じゃんけんばんやはいあいこのまに

怒つてもやはり優しい父の愛

老い二人やはり吉祥の雑煮膳

やはりいなあ親子の絆丸い鼻

足りた世か抱負語らぬ若者よ

柏手に抱負を込めて初詣で

胸に期す抱負は絵馬になど書かず

何見ても輝きたいな新しく

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

四季の花やさしく語る無人駅

夜行列車で釣客が来る磯の駅

出発してから一人足りぬバス

さあ出発今年も元氣に初句会

出発をしてからあれこれ忘れない

ゼロからの出発だからこわくない

出発はしたが還らぬ一つ星

帆を上げて出発の風待つている

風邪の妻に何もするなと手伝わす

いよいよをあまり恐れぬことに

二〇〇〇年いよいよ心新たなり

いよいよになればへそくり持つ強氣

正安

まみ子

実

柳童

喜美子

博史

よう

久子

雪子

緑骨

千里志

馬洗

竹二

螢柳

新雪

高栄

萬的

昌子

メ女

柳宏子

正坊

房子

能子

みつ子

義子

ルイ子

周信

総入歯いよいよ餅が食べられぬ

いよいよへ人間神を疑わぬ

損得で動く自分が嫌になる

黒幕が動いたらしい風変わる

スランプを乗り切つてから動かない

二度手間もつこり老母の台所

初夢は上昇気流に乗って行く

風あげがとつてもうまい女の子

躍動の今年にしたい玉子割る

泣き虫の頃も知つてる友という

うしろから目隠しをした掌が温い

達者かと一言冬の日の息子

蛙の子ですが名刺はもっている

本番へ墨ふくませる春の筆

古壁のように落ちてく記憶力

我慢にも限界がある腹の虫

行動半径きめる非情な風の糸

回転木馬ゆっくり余生委ねよう

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

行きずりの恋が芽ばえた雪の宿

恐れど一度会いたい雪女

一本の銚子誘つた庭の雪

シブールに世間の憂を捨ててくる

子の巣立ち胸一面に名残り雪

文明の利器を試しに雪が降る

幸せな雪は美女の口に解け

冬山の雪は妥協などしない

世界の連れとパレードしてる御堂筋

江美

いわゑ

靖巳

庸佑

澄子

トミエ

武庫坊

鹿太

千代

石舟

春蘭

しげお

涼子

美智子

颯云児

絹子

たず子

敦子

昭平

昭平

吐太

金太

みつこ

かつみ

昭子

重人

忠宏

ギヤル神興茶髪のバレード祭り笛
 バレード好き西に東に飛んでゆく
 バレードに孫が手を振る一輪車
 バレードに踊り狂ったサンバの音
 バレードの先頭を行く一輪車
 いやな事あんまり聞かぬ事にする
 嫁の味あんまりだけ褒めておく
 あんまりや国民だけが負う痛み
 あんまりに期待した程ない遺産
 一張羅に車が跳ねる水溜り
 隣に三階合法ですと胸張られ
 酒ぐせを知ってあんまり勧めない
 消費税また引き上げという話
 さりげなく心えぐって逃けた風
 笑顔にはあんまり自信ないわたし
 あまりにも美しすぎて手が出ない
 デートには未来の地図を持って行く
 日だまりのベンチでデート喜寿傘寿
 いま逢ったばかりで次を約束し
 老いらくのデート手だけを握りしめ

川柳ねやがわ

江口

度報

四三郎 俊男 美喜 一壺 泰子 辰子 たけし 一知 章司 庸佑 ダン吉 美代子 扶美代 りつえ 志洋 利武 満寿蔵 忠央 女 高栄 庸佑 光子 三郎 修

終る頃やつと慣れ出す年賀状
 時雨きて身の上ばなし終らない
 背伸びした頃の涙を大切に
 説得をするのに効果ある涙
 父さんの汗と涙で食べます
 立ち直るきつかけ母のひと滴
 別れてからほんとの涙落ちてくる
 犯罪にうといおやじの盗み酒
 犯罪と無縁のままで終る幸
 保釈金積んでずっと生きる顔
 詐欺漢が名を連ねてた紳士録
 インターネットが新種の犯罪つれてくる
 動物が裁けば人科みな死刑
 犯罪から少年守る老婦警
 ふる里も時雨か母に電話する
 理屈ではないパチンコに技がいる
 四世代笑顔が揃いミレニアム
 川上のうわさ下流でもみ消され
 あちこちに杖を忘れる快復期
 ちんまりと母はソファアに正座する
 髪染めたこと遠い娘に電話する
 ご懐妊のニュースに躍る平和なり
 雑踏に数字が踊る十二月

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

たもつ 茜 磔 文秋 かすみ 時弘 一風 とし子 順三 美代 あやめ 亜成 洋 波留吉 恵子 冬葉 勇太郎 博泉 ルイ子 仁清 弘一 小路 度

白髪ぞめばちばち止める歳になる
 にぎやかにガラクタ貯めて暮してる
 女独り汗を知らない金を貯め
 金貯める古い女と言われても
 へそくりが少し貯まるぞ喋りだす
 貯まる頃きつて猫が病気を貰う
 頭患そうな学生ばかり絵馬を貰う
 バスツアー額で数える頭数
 頭だけひっこめ亀が死んでる
 頭いい男かるがるしゃべらない
 頭髮がブラシにからむ寒い朝
 インターネット人の頭を餌にして
 あいさつがまだねむってる始発駅
 終電と始発の狭間にある我が家
 初心貫徹始発の風は耳を刺す
 始発電車ゆくり街が動きだす
 鬼の面はずして始発待っている
 美しい嘘を裁いた北の風
 北風が来るぞ大きな火を焚こう
 北風がぞくぞくとしみる朝がえり

川柳塔おとり

原みさを報

和歌子 たもつ 春蘭 秋雄 太郎 ダン吉 勝美 半蔵門 宏 直子 柳弘 とみを 弘一 柳伸 ますみ 夕花 年人 欣之 弘直 雄々 清子 紀子 宏章 庸二 由多香 黙光

食いぞめ一杯に盛る母の愛

炎天下一杯の水生きかえる

隣家とを区切るやさしい花の堀

好いところで次週へ区切るメロドラマ

長すぎた春を心に読む誓詞

もう少し区切りのつかぬ本を伏せ

人生のピリオド自分では打てぬ

一日の区切りと日記書いて無事

自己反省の度に区切りはつけて来た

はげましを賀状にもらう辰の年

虐待と嫉の区切りつかぬ親

大工さん区切りをつけて一休み

ひと区切りつけてお茶飲む大掃除

七草で区切り歩調を整える

ひとりっ子翔んで行けない孤独抱く

人生の関所亡父の年迎え

一人立ち年の始めに子は誓い

段落を打ち自分史に暮おろす

たとう紙に孫の成人包みこむ

携帯へとび込んできたおめでとう

肌で知る二つの世紀おめでとう

おめでとうヤッホー山で初日の出

初産の孫の嫁女におめでとう

はまゆう川柳会

中後

清史報

有頂天そこに初心の影がない

あせらずに初心わすれずあゆむ道

歳を重ねいつか迷子になる初心

いつまでも初心じゃ困る吊し柿

まゆみ

和子

仁子

ゆきの

せつ子

舎人

野草

幸次郎

彰雄

千秋

佳子

雅通

崇

利枝

登美

風花

義弘

伝住

邦昭

孝子

艶子

道子

小生

富貴子

富貴子

富貴子

富貴子

富貴子

富貴子

富貴子

富貴子

富貴子

何事も初心忘れずやっています

運勢は初心を守り事故はゼロ

迷信と思ひながらも磨見る

保証印迷ったらしい歪んでる

あれこれと迷うお客を待つ店主

あれこれと迷い結局かすつかみ

また迷い妻の助言に乗って見る

研鑽の花香の中に射す光

四季の花香る窓に射する光

妻子待つ窓の灯に足輝む

迷いから覚めて心の窓を拭く

窓ぎわの椅子で孤独を飼ひ狎らす

平和だなア窓に明かりがついて居る

路地裏の温もり嬉し窓明かり

子供から社会の窓を指摘され

暖房の車窓に指で夢と書く

アタックをしても心の窓開かず

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

お受験が合格孫のヒットです

人生観変えた一本のヒット

ポテンヒットで自信をつけてからの運

世間体気にする母はよく喋る

傷心の身をひっそりとし山の宿

四斗樽のお神酒うれしい山の宮

飢えてたがときめいた日もあったよう

懐かしい遠い記憶の母の胸

胸の内察し多くは喋らない

飲みっぷり見てた飲み屋の年賀状

雄造

登

平和

慶一

恵美子

サト美

雅視

公治

太一

てる坊

清史

すみれ

利ぼん

美佐子

華水

修也

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

比斗志

ボクよりも悪筆がある年賀状

神様も時には耳が遠くなる

ベットボトルに囲まれている花の城

ミレニアム祝う門松見当らず

絵蠟燭亡父も微笑をしてくれる

こんなことに腹の底から笑うひと

マネキンに着せたらスーツすくれた

笑うたら笑い返してくる鏡

急いでは時に久方ぶりの友

宝くじばかりはヒントなしに買う

しがらみが胸のどこかで息を呑む

うら若き尼僧の胸に過去が住み

倉吉川柳会

松本よしえ報

珈琲碗によんだ夢をかきまぜる

宝くじ当った夢を見たいなあ

夢のない話が弾む老人会

微かだがいつも少女の気分です

ハンカチに微かに匂う罪のあと

年頭にやるぞと酒を飲み過ぎた

父ちゃんはやるぞと言ってすぐ忘れ

ハードルが高くて夢も届かない

やるぞと決めた途端に風邪をひき

へそくりで夢を買ってやる宝くじ

遺産やるぞうっかり乗れぬ相続税

二十年バケツの水は無駄だった

古希迎え夢また一つ膨らませ

天平の秘仏微かに笑みたまふ

二十年やるぞ私は今が旬

正坊

諷云児

紫香

柳宏子

薛児

求芽

英子

周信

博子

薰風

ただし

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

メ女

園喜美子

一年の計やるぞと太く派手に書く
微かに揺れて花は姿を整える

夢で泣く涙の出ないもどかしさ

二階の子朝になるまで眠らない

初夢で私の室がふくらんだ

張り替えた障子かすかな陽の匂い

超音波微かな鼓動母になる

夢のある話をしよう二〇〇〇年

花になる鳥になる魚になる夢

昨日より微かに影が伸びている

何かやる気父がセメント買って来た

夢白夜風も白夜のドラマ積む

この腕に親子三代ぶらさがり

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

鍋釜なしレンジですます一人部屋

鍋の中七草がゆで胃を休め

進学を決めた子供と鍋囲む

梅小路武骨な顔になるたのみ事

この顔で飾りおこらず山のぼる

なにくわぬ顔でのら猫失恋す

寄り添って顔の似てくる柳箸

面長に距離をおいてるコンバクト

それなりの顔で大任果たしてる

顔つなぎ終電車まで念を入れ

敢えてな顔はえがかぬ紙人形

玩具箱出てからビエロ帰らない

シヨパン聴くものあわれを分かち合い

告白は続ける窓の冬のばら

先祖ご先祖累々ときてミレニウム

おーい雲歩いていきます私

故郷ヘーラルランプのはてしなく

モニターにわが脳映る真昼の夢

恐い街 恐い童話が溢れている

三ヶ日すんで一合米を炊く

春になればなんて約束してしまふ

正月咲く花 昔の苦労はなし

芒野に陽が射せばまた孤独に還る

七度目の辰どし祝う欠け茶碗

きこなく踊るお神楽バイト巫女

岩美川柳会

石谷美恵子報

念入れた男結びを解く別れ

見直しの続く計画書が荒れる

紙おむつしてもとこん生きてやる

銀行の利子で暮せる計画だった

輝いている葬儀屋のゴミ捨て場

輝いた知事の手先が悪きした

不況風トコトン節がよく響く

あの女輝いている跳んでいる

下の子は計画的な欲ばりだ

計画はみんな成らせる茄子の花

孫たちの輝く瞳裏切れぬ

念のため書いたメモ帳また忘れ

念じても花の命は神まかせ

かくわしく匂う女に輝こう

紙一枚水に浮かんだ計画よ

静

比ろ志

昌子

和子

薫

光穂

武庫坊

恵子

キク子

芳子

弘治

義芳

大漁

忠良

洋々

蟹郎

石花菜

蟹郎

孝男

季芳

一夫

静生

圭一郎

喬水

きみ子

睦子

和歌子

輝いた城もわたしも共に老い

カルチャーで妻がキラキラして帰る

去つてなお輝きくれる人でした

ガングロもとこん若き主張する

計画が思いどおりになる怖さ

計画に息抜き箇所を入れておく

夢語る目の輝きに年はない

雑音の中念力で堪えている

翠洋会

児玉

句集発刊祝う宴の旨い酒

祝出征御桶となりて還らない

新世紀国に捧げた華おもう

膝掛けの手編嬉しい古稀祝い

六段の調べが初春の部屋に舞う

華やかなえびす顔から笹もらう

お隣のおばさん今日は令夫人

華やかに咲かせた糧は涙です

テーラカット苦労した日が胸過ぎる

祝い膳鯛はなくとも皆揃い

松竹梅祝いの品が納まった

初孫の祝いはボンと気前よい

祝宴のにぎやか過ぎた夜の孤独

宴会を盛り上げている飲まぬ人

喜寿祝う夫に贈るモンブラン

披露宴羽田離婚を感じさせ

ご祝儀を持ってだんじり来るの待ち

子や孫が来るとお祝い気分なり

華やかな人ほど過去を語らない

一京

雅女

公乃

節子

裕子

たぬ

美恵子

蛙報

恭昌

千歩

照子

英王子

真砂

舞夢

伽羅

澄子

日の出

東雲

志華子

喜美子

さと美

叙子

蕉子

千梢

千枝子

靖巳

母傘寿色華やかにちらし
宴会開始セクハラ注意する幹事
二の膳に手をつけぬまま宴終る
披露宴すめばひと息親同士
祝勝会片目達磨が墨を待つ
華やかだったころを知ってる袋帯
祝膳えらそうな顔のニラミ鯛
夢の続き見たくというぞく万華鏡
生きている今日という日を祝うべし
祝日も脇役バセリかすみ草
道端の宴に自動販売機

うぶみ川柳会

上田

宣子報

独り身の稽古そろそろ考える
ところとしていては返り血を浴びる
その先が読めず孤独な月の着
澄んだ空山河奏でる童歌
独りでも生き抜く気概青りんご
バリトンの世辞にとろけていくピエス
澄む川に子等の歓声メダカ追つ
独断で決める私の悪い癖
反ることを知らぬ野菊はひとそと咲く
独り身ののんびり過ぐす今が好き
ところのビーフシチューのある夕餉
人前に出る少々背を反らす
補聴器がメーテルを待っている独り
ところとわけの解らぬ列につく
独り者それなりの夢さがし出す
背信の弓が闇夜に反ってくる

蛙 正雄 宣司 絹子 周信 義 会美 楓楽 みつ子 希久子 鬼遊 天雀 雄人 美ツ千 黙光 華子 ひろこ 良雄 あづま 雅女 くにお 亜季 健一 登美枝 天人 一枝 忠良

変化球打つ気の打者をのけ反らす
話そつ貴方も独り昼の月
風呂帰り子と影踏みの月が澄む
ところの足を何度も待つてやり

堺川柳会

河内

月子報

割り勘で財布のひもが微妙なり
遊ぶことなら先頭で旗を振り
わたくしの財布はずつと病気です
先頭はお調子者と見られてる
原石だらう鈍いひかりがのぞいてる
ドミノ倒しの先頭じつと耐えたまま
ときめきが鈍りポトリと紅椿
逃げたくて男は鈍いふりをする
歳一つとつてよろこぶ歳は過ぎ
頂上で鈍い男を待っている
鈍感が笑顔味方にする早さ
わがままで酒もよう飲む美人妻
先頭は父さんだらう雁の列
知らぬ間に一番前に座つてる
たまたまの浮気が鈍い妻にばれ
鈍つて来た脳へ鉛筆尖らせる
笑い声最後に入れて瓶に蓋
鈍いなど言つてはおれぬ妻の位置
知事選に鈍い反応大阪府
猥談を鈍りとかわす美人妻
先頭にいると眠りが浅くなる
先頭は食われ役ですメダカの子
別れても差し上げませんビター文

静生 ユリ子 葉士人 宣子 春蘭 伽羅 千代 かりん 五月 楓 小雪 錦 東雲 日の出 なぎさ ちゃや さくら 舞夢 昭子 扶美代 紀美女 八千代 玄也 つづや 朋月 りつえ

先頭のつらさ知ってる朱いばら
鈍いのを平気で年の所為にする
理由ありのサインを仕切る美人秘書
鈍感でしばらく経ってから響く
わたし達笹を授ける美人です
土地勘が鈍くてポチに馬鹿にされ
一円玉の軽さで転ぶ皮肉だな

川柳塔打吹

米田

幸子報

歎いて歎いて何と小さなことだった
近頃は目刺しも鯛も同順位
定年を終えてやれやれ粗大ごみ
ひもじさに歎いた頃がなつかしい
こもを着てそつてやれやれ冬支度
子を持つば人の歎きはよくわかる
ロケットがやれやれ又も不成功
リストラに家族のささえ歎かない
せまい部屋ピアノ一人がいばつて
なに歎く地球まだまだ消えはせぬ
少年の真実赤に刺した儘
サボテンの棘ささつた儘で二千年
世の中の突飛な事が胸を刺す
やれやれと一段落の茶がうまい
逆上り出来ぬ歎きを発案にする
やれやれほんとに真面目男は肩がこる
すし詰めにされた冷蔵庫の歎き
歎いたら幸福の木が枯れていく
注射針ためらいもなくすべり込む
やれやれと座つたとたんピンポン

冬虹 梓 アキ 泰子 春 紫 美代子 美ツ千 しろう 楨元 きみ子 善江 貴恵 龍枝 セツ子 久芽代 博丈 和歌子 睦子 孝恵 和恵 季芳 玲子 芳光 克枝 玲泉

重い腰やれやれやと上げさせた
歎いたり笑ったりして十二月
調律のできぬピアノが置いてある
湯豆腐の外は北風肌を刺す
刺股に取り囲まれて十二月
皿の絵が透ける河豚刺しほめている
木の葉っぱ落ちて歎いた娘は十五
留守の昼目刺しに香香TV鳴る
歎いても生れ変わるものじゃない
けん盤を歩く小人のような指

富柳会

池

森子報

胸奥に発展途上の恋が棲む
満員の車窓が見てる土手の恋
カルチャーと言って遊びに出掛けてる
もう一人の私が遊ぶサングラス
終焉の幕は綺麗な彩にしよ
忘れた心に眠る古いきず
子育てが終わって母を折りたたむ
食卓にチンと一色そえる赤
一冊の本に心が裏返る
遊びぐせ染みてエリート挫折する
もうあかん言うてアデランスと遊ぶ
気前良い賞味期限が切れている
残照の中から探す愛その他
北風に乗って届いたためいき詩
左手が右手をかばう良い仲間
コーヒーの一杯分程しぐれけり
すれ違ふ意見ポケットから抜ける

玲 坊 石花菜 雄々 完司 よしえ 勝見 定明 節子 幸子 和子 一慧 夕子 潤子 冬虹 文子 花梢 かなこ 夕花 義清 晴美 東雲 勇太 信博 宏 大かし ひろこ

褒めにくい味にまごつく褒め言葉
どなたにも笑顔をみせている自信
お守りを五つも持って旅に出る
夢ひとつずつ消えて残り火と遊ぶ
古いほどもてやされる出土品
合鍵をもって遊びがよく続く
終章は野の花でよい笛でよい
肩触れる傘に期待をさしかける
意見聞く膝の痛みをもてあます
風に盗まれてしまった子守唄
戒名をひとつ残して軽い骨
怠けるとあつと言う間に古くなる
関西は優先座席若い人

川柳クラブわたの花

分月吉村

街の木がネオンの花に飾られる
手ぶらではいけない程に義理を欠き
街角で他人の運を見て暮す
貧しくも布団の中はあたたかい
芝居はね道頓堀に人の渦
八尾の街かわず仰天ネオンの灯
バチンコのネオンが消えて眠る街
捨てられずがらくた増える古世帯
あはやなあと優し目許で叱られる
街路樹も色づきはじめ人恋し
くだおれの街に出かけてうどん食べ
余生なおまだまだ抱えている五欲
飾らない言葉に貰うあたたかみ
人は人亀の甲羅にある誇り

一風報

三和子 アキ 昭永 紅紫朗 登子 けい子 信子 春蘭 欣之 森子 一夫 奈良司 友甫 朝子 一 道 ますみ トシエ まさと いづみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八州子

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

街おこします温泉を掘ってみる
ビル街で宝のような鉢の土
鈴の音頼りにばくの道を行く
孤児哀れ大陸の街想い出す
ボー捨てに手をやく街のボランティア
鳴り止まぬ拍手の向こうには家族
グルメ街みているだけで肥りそう
亀の背に父の童話が眠ってる
街の灯にさびしがりが生き易し
町から街へ見合う庁舎に建て替える
夢の中ここがチャンスで目がさめる
ゴミの日を街の鴉は知っている

剛治 ミツ子 道子 春江 和歌子 春子 一風 幸枝 隆盛 美千子 鬼遊 友甫 朝子 一 道 ますみ トシエ まさと いづみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 剛治

ばくの金たくさん足がついている
人生の節目に夫の加護思っ
助け合い義理で雀の涙はど
小さな鈴大きな鈴と猫五匹
上を向いて九ちゃんん歌口ずさみ
美しい嘘も嬉しい思いやり
なみだ壺かれて女は強くなる
血の涙こぼす連帯保証人
亀の子に心やすらぐ昼下がり
鈴の音で財布の無事を確かめる
何したん笑いながらも泣いてはる
お悔みの途中で溢れくる涙

川柳藤井寺

高田美代子報

泣き笑い心の駅を通過する
終電車だんだん母の顔になる
終着駅が竜宮ならばうれしいね
駅伝のたすきの中にある祈り
駅前の赤きょうちんがトーセンボ
潤む目で出征兵を出した駅
バージンロード父の手からの始発駅
風の駅風の便り待っている
雨やどり駅でやさしくなる平
輪廻転生終着駅のないドラマ
売店で駅弁買った旅籠
錦まだ着れず遠のくさとの駅
無人駅人なつこい鳩の群れ
終電車駅のベンチに妻がいる
最果ての駅で越年一人旅

ミツ子 道子 君江 和歌子 春子 一風 幸枝 隆盛 美千子 恭一 奈良司 鬼遊 和樹 喜代子 栄一 悦子 六点 龍一 よしえ アキ 瑠美子 大八 敦子 昭子 春蘭 終一 史郎

单身赴任恋しくなった妻の味
卵が一個これから料理考える
飽食の舌が忘れた母の味
手料理で虜にされたのは私
お疲れさまでしたもう一品添える
父子家庭の皿にぶっきらぼうな愛
許す気で囲む大きな鍋の湯気
どんなにしても芯の煮えない人と居る
妻の腕旦那はうまく料理され
わたし下戸過ぎたお酒に泣かされる
山から谷に吹き過ぎる風除夜の鐘
欠伸している間に過ぎた富士の山
あま過ぎる社長会社をまた潰す
窓ぎわの椅子が昔を知りすぎる
おの付いた受験はママの見栄がする

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

ささやきへ誂経の和尚目で叱り
人当たり良いが家では青い鬼
天才も英才教育とかじり
雪蛭母と別れた日の記憶
過去言わぬ男の居間に雪蛭
妻の掌にゆっくり消える雪蛭
天才が天才でいる孤独感
ささやきへ耳が性感帯になる
淑女かと覗けば揺れる雪蛭
パソコンの天才熱い血を持たず
天才と知るよしもない子守唄
一匹の鬼もやがては雪蛭

志洋 美代子 鐘造 正一 和子 扶美代 桂子 昌子 放宗 利武 修六 重人 かつみ 凡々子 きよし 敏人 霜石 紅雨 大吾 ヒサ子 岳水 順風 龍人 慕情 銀波

陽の当たたる場所で今日も生かされる
川の方でひそひそ話パパとママ
太陽がいっぱい当たる子供絵
雪蛭逢いたい人を連れてくる
顔色で母は悩みを言い当てる
踊り場にまた陰口置いてある
雪蛭遠い都を逃げてきた
懸賞の通知に騒ぐ酒がある
失恋もピタリと当てる心電図
雪蛭そして少女は脱皮する
天才も鈍才も居る神経科

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

晴天につながる二〇〇〇年の朝
老春の坂は大地を踏みしめて
頑な瓶の口元火にかざす
青畳終の栖が喜寿の夏
生かされて地球を汚す塵を積む
手をつないで大きな輪っこ作りましょう
進まねば私の脚が退化する
齢かさねて梅一輪と対話する
冬木立祈る姿で朝日を抱く
薬を打つ亡父の背中も丸くなる
大家族のとなりの声が羨まし
去年買った店で三億当たりくじ
体力に合わせて磨振ります
おしゃべりの玩具がほしい老いの部屋
誕生日忘れた振りを子がさせぬ
二〇〇〇年私の彩で花咲かす

ふさこ 花匠 雅城 愁女 井蛙 黙人 隆樹 花峯 一花 五楽庵 日枝子 瑞枝 天雀 春枝 亜弥 恵子 てい子 富美子 八重子 玲子 やえ 千代 晶子 ゆき 麗

哀しみがたまるそろそろ撥ねかえそ
餅搗機ひとりて掲げることを継ぐ
子育てに砂糖一匙隠し味
初メール送りしっかり肩がこる
寝たきりの母から学ぶ明日の像
二〇〇〇年へ一跨ぎした年女
糸車 川の流れば来世まで

ロイズ川柳会

山崎

君子報

身の丈に合うしあわせをふと忘れ

気にもせず生きてる事が幸せか

山程あるけどは何が幸せ

寿老人へ老いの幸せ初詣で

重い荷を背負う幸せだつてある

乱雑な机私の城である

みかんむく手から本音が洩れている

平坦な道ばかりない万歩計

しあわせの真ん中について充たされぬ

誕生日大正昭和振り返る

余生とや温めあえる人と居る

めでたしで話が終りみかん剥く

島便りのせてポンカン小正月

幸せってどんな色かな形かな

好物のみかんの山をひとりじめ

田鶴

ふみ

スミエ

寿々子

文葉

荒介

ミサヲ

キク子

藍子

哲子

トミエ

貴代子

澄子

いわゑ

武庫坊

年代

はつ絵

君子

義子

女子

笑女

『人生の悩みに愛の一行詩―川柳人生論―』

多田哲朗著「人間未塾」主幸・「川柳ばらば

ら」編集長）B6判288頁・定価1233

円（税別）・河出書房新社出版

文学ルーツ川柳募集

文学ルーツ（松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市）

作品・文学ルーツ（5市）周辺の自然や衣食

住・信仰・年中行事等に関する習慣・民

俗行事などを題材とする川柳（未発表作）

宿題と選者（各題2句以内）

松江市「夕映え」「湖」

尾道市「うず潮」「坂道」

今治市「タオル」「鯛めし」

松山市「坊ちゃん」「いよ絆」

高知市「日曜市」「カツオ」

第2次選者

（出）全日本川柳協会会長

理事長

常務理事

応募方法・専用の応募用紙または官製はが

き、封書に書かれた作品（FAXによる

応募可）。応募作品には「宿題」及び氏名

（ふりがな）・住所・年齢・性別・職業・

郵便番号・電話番号など明記のこと。雅

号の場合は本名も書き添える

応募資格・年齢・職業・性別・国籍は不問

出品料・無料

応募締切・平成12年3月31日（当日消印有効）

発表・平成12年8月、入賞者に通知。

賞・大賞1点・奨励賞5点・佳作賞若干

応募先・問い合せ

「夕映え」「湖」松江市経済部観光文化課

69085540 松江市末次町86 ☎（08552）

55-5293 FAX（08552）55-55553

「うず潮」「坂道」尾道市教育委員会文化振興課

72228501 尾道市久保1・15・1 ☎（08）

48-25-7367 FAX（0848）25-72293

「タオル」「鯛めし」今治市教育委員会文化振興課

79448511 今治市別宮町1・4・1 ☎（0

898）36-1608 FAX（0898）25-1700

「坊ちゃん」「いよ絆」松山市教育委員会文化振興課

79000003 松山市三番町6・6・1 ☎（08

9）94806520 FAX（089）94319001

「日曜市」「カツオ」高知市教育委員会社会教育課

78008571 高知市本町5・6・13 ☎（08

88）22-6394 FAX（0888）23-9361

◎「宿題」によって応募先が異なりますので

要注意。松江市民の方の高知市への応募な

ど、どの「宿題」を選ばれても構いません。

◎どなたでも参加できます。一人でも多くの

応募をお待ちします。

主催 文学ルーツ形成推進協議会

柳界展望

★川柳サークル卯の花は平成11年度年間優秀賞を1月句会で表彰した。①川島楓云児②山本磯③石原靖巳④大野百合子⑤小池しげおの各氏。

★朝日新聞香川版の平成11年度年間賞の表彰式が1月15日、朝日新聞高松支局であり、柳壇には本社同人の木村あきら氏が選ばれた。

ロボットが俺の介護にやってくる 木村あきら

★西宮北口川柳会は平成11年度年間賞を1月10日、表彰した。カップ永久保持者は西口いわるさん、優秀賞は①川島楓云児②田辺鹿太

③西口いわる④田中正坊⑤門谷たず子の各氏。

★京都塔の会は平成11年度成績を発表した。最優秀句賞は堀豊次氏。総合得点賞

①大野百合子②田中正坊③山本磯④黒川紫香⑤都倉求芽の各氏。

★前月号掲載の朝日新聞な

にわ柳壇平成11年度の薫風選の十秀に前記三氏のほかに志田千代さんも入選。

★役員の交流紙「こんにちわは川柳塔です」第六号が12月末、発行された。

★川柳塔わかやま吟社の平成11年度各賞が決定、2月13日の句会で表彰した。

〈葵 水 賞〉

矢を放つ最早信じるほかはない 宮園射月芳

〈あおい賞〉

骨の無い傘とふんわり生きている 故川上 富湖

〈たちはな賞〉

僕だって昔はジャンプ傘だった 日野 愿

〈課題吟賞〉

受付の順は問わない絵馬の数 田中 輝子

▽御芳志御礼△

■北山春子さん（故北山悟郎氏夫人・生駒市）から供養として金一封を拝受。

▽出版△

■翠洋会は句報「翠洋会」二百号を記念して、川柳合同句集「翠洋会」Ⅳを発行した。会員三十八人の二十二句ずつを取録。題字橘高薫風・序文高杉鬼遊・あとがき米田恭昌。B6判・160ページ。頒価700円申込みは米田恭昌まで。

▽同人消息△

■山海友照さん（京都市）は故松川杜氏の氏が200号からずっと描いておられた京都塔の会の句報表紙絵を一月号（335号）から担当されることになった。

■春木圭一郎氏（鳥取市）は二月から毎日新聞「山陰文芸」の「とつとり柳壇」

の選者をつとめる。毎週土曜日掲載で、これまでの新家完司氏と隔月に担当する。

▼計 報▲

■田中透太氏（理事・羽曳野市）は1月20日、病氣のため死去。70歳。1月22日・23日にメモリアル成就で行われた通夜・告別式に薫風主幹はじめ、岳人副理事長・柳友多数がお見送りした。

■栗谷春子さん（元同人・吹田市）は1月29日、病氣のため死去。86歳。

新同人紹介

安芸田 泰子

―吐来・敏・金太推薦

東 芳香

―重人・敏・金太・比呂志・柳弘推薦

河 合 楽子

―重人・敏・金太・比呂志・柳弘推薦

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 会 梨 花	18日(土)午後1時から 選ぶ・紙・やさしい・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
城 北 会 川 柳 会	18日(土)午後1時から 絆・ぎりぎり・ルール・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸 和 田 川 柳 会	18日(土)午後1時半から 草分け・稽古・効果・さいわい	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日)正午から 脱線・自慢・すすく・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半から やる気・口実・居心地	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から マダム・素足・押す・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	22日(水)午後6時から 赤・異状・敬う・獲物	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前10時から 忍ぶ・えくぼ・焦点	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から 表札・開く・せめて・嘘	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	26日(日)午後1時から 胸・エッチ・噛む・「欠点」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日)午後1時から 腰抜け・ルーズ・すっかり	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	27日(月)午後1時から 布・スケール・銭別	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	27日(月)午後7時半から 桃・卒業・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木)午後 1 時から 無茶・頭・縛れ	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR 奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	3 日(金)午後 1 時から たけのこ・口・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	4 日(土)午後 1 時から 兼ねる・介護・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	4 日(土)午後 4 時から 許す・義理・荒れる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	5 日(日)午後 1 時半から あっさり・鳥・闇	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
堺川柳会	9 日(木)午後 1 時から 変化・凶星・(折句)つくり	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10 日(金)午後 6 時から なかなか・食べる・鼻・週末	八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 打 吹	11 日(土)午後 1 時から そこそこ・痛烈・丘(岡)	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	11 日(土)午後 1 時半から 借りる・帽子・絵の具	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	12 日(日)午後 1 時から 喉・ふらふら・イベント 「びっくりした・驚いた句」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR 和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13 日(月)午後 1 時から 形・揃う・まずい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	14 日(火)午後 1 時から 本・困る・下手	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	14 日(火)午後 1 時半から 入学・予言・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16 日(木)正 午 から 紐・洗い・几帳面・あっさり 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児

編集後記

「時代おくれ」なのか。★秋山庄太郎「60年の軌跡」と題する写真展に行った。

★「車がない／ワープロがない／ビデオデッキがない／ファックスがない／パソコン インターネット 見たこともない／けれど格別支障もない／そんなに情報集めてどうするの／そんなに急いで何を／頭はからっぽのまま」これは茨木のり子さんの「時代おくれ」という詩の一節である。★確かに世の中、便利にはなった。計算にしても算盤を置いたり、筆算をしなくても、電卓ですぐに答が出る。だが考えることを機械に任せてしまっているのだろうか。専門的なことはとも角、少なくとも頭の柔らかい子供の時には自分の頭で考えて、鍛えて欲しいと思うのだが…。こんなことを考えている私も、やはり

落の臺

この丹波篠山の春まだ浅い山奥に落の臺が顔をだし始めました。

平成八年、栄えある賞を戴いた日、あこがれの小出智子先生にお逢いでき、どんなに嬉しかったことか。あの晴れの舞台で亡父河原みのるの話をして頂き、生存中は父の川柳に耳もかさなかつたことを悔いる反面、川柳の方々の温かいお心に感激いたしました。

ひとこと

今『落の臺』の某先生の序文の「この題は智子さんのお人柄にぴったりで、つましやかな香りと苦味は印象的」とありますのをごきながら読み返しております。生涯の師と申しましようか、三十八歳で伴侶を失った私にとって生涯座右の伴侶とさせていただきます。ありがとうございます。

(倉垣 惠美)

★毎年二月初めに友達が雷のいっばいいた梅の小枝を持って来てくれる。暖かい部屋の中では次々に蕾が開く。昨秋以来、度重なる計の知らせに沈みがちな気持ちを癒めてくれるようだ。

★本社句会とは同人誌友を問わず一人でも多くの方の御参加をお待ちしています。★一月号から小林周信さんに編集部に加わって頂いたので、よろしく。

▽一月号から編集のお手伝いをする事になった。元来、健康には恵まれているので、「肉体労働なら」お役に立てると申し上げておいたのだが、どこかで混線誤作動を起こしたらしい。

▽担当は「各地柳壇」「佳句地十選」と「各地句会案内」である。毎月45句会1200句前後の作品が届きその校正に当たっている。各句会に入選された佳句を

扱う以上、正確を期さねばと神経を遣っている。▽経験も才能も乏しい身の悲哀―神経を遣う割には見逃しも多く―最後は編集長のスリーパー役に頼っている現状。早く習熟度を上げて満点が貰えるよう頑張っ

て行きたいと思う。併せて各地柳壇報告者の方々の倍手許の塔誌を通読してみたい。先輩方のように行きそ

うもない。自然体でのお付き合いをお願いします。(周)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（5月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

川柳塔(8句) 橘高薫風選
水煙抄(8句) 河内天笑選
愛染帖(3句) 波多野五楽庵選
茴香の花(3句) 宮西弥生選
「あっさり」 森松まつお選
「島」 原みさを選
「闇」 中塚礎石選
初歩教室「焼く」(3句) 吐田公一担当

5月号発表(3月15日締切)

6月号 課題吟「スマイル」「太い」
「探す」
初歩教室「夫婦」

本社3月句会

とき 3月6日(月) 午後5時半
ところ アウィーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
兼題 「カリスマ」 藤田泰子選
「あかり」 神夏磯典子選
「姫」 桜井千秀選
「願い」 奥田みつ子選
「様」 橘高薫風選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社4月句会 7日(金) 予定

兼題 「きらきら」「呼ぶ」「石」
「えくぼ」「未来」

夜市川柳募集

第10回「甘」 杉森節子選
ハガキに3句 3月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上上納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

二〇〇〇年(平成十二年)三月一日発行

編集兼 発行人 橘高薫

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍地区三木町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1691 四番
振替 〇〇九八〇一五 三三六八番

全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。全日本川柳大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の權威ある三大自然行事ですので、こぞつてご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

- 〔乾杯〕 塩見 一釜 酒井 路也 共選
 〔化粧〕 佐藤 美文 杉森 節子 共選
 〔そろそろ〕 藤澤 岳豊 小林由多香 共選
 〔切符〕 大木 俊秀 田中 正坊 共選
 〔未〕 塩見 草映 外山あきら 共選
 第二次選者 仲川たけし 磯野いさむ 大野 風柳 竹本 瓢太郎 吉岡 龍城

参加費

2000円（投句料・『平成柳多留』第6集代）
 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・（社）日本青少年育成協会会長賞・（社）全日本川柳協会会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切

平成12年3月10日（金）

発表・表彰方法

平成12年6月・第24回全日本川柳東京大会
 所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求くだされば送ります）。

〒530-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702
 社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX (06) 6352-2210

第15回 国民文化祭・ひろしま2000

―瀬戸内の風 そこにうたがある―

応募受付期間 4月1日（土）～6月30日（金）
 宿題・選者（各題2句・未発表作品に限る）
 事前投句

- 〔和紙〕 大野 風柳 選
 〔おみやげ〕 奥田 みつ子 選
 〔元氣〕 川島 諷云児 選
 〔橋〕 酒井 路也 選
 〔生まれる〕 定本 文也 選
 〔酒〕 藤沢 岳豊 選
 〔広〕 柏原 幻四郎 選
 〔不思議〕 塩見 草映 選
 第二次選者 竹本 瓢太郎 選
 磯野いさむ 今川 乱魚 選
 野谷 竹路 吉岡 龍城 選

第二次選者

応募料 1000円（小・中・高校生は無料）
 応募方法 所定の応募用紙を使用のこと
 応募先 広島県大竹市小方1-11-1
 〒739-0692 第15回国民文化祭大竹市実行委員会 事務局

賞 文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・他
 入選発表大会 11月4日（土）10時30分～15時30分
 大竹会館講堂（アゼリアホール）
 問い合わせ及び募集要項請求先
 〒730-8511 広島市中区基町10-52
 TEL 082-2281-2111 第15回国民文化祭広島県実行委員会 事務局

主催者 文化庁・広島県・（社）全日本川柳協会・他